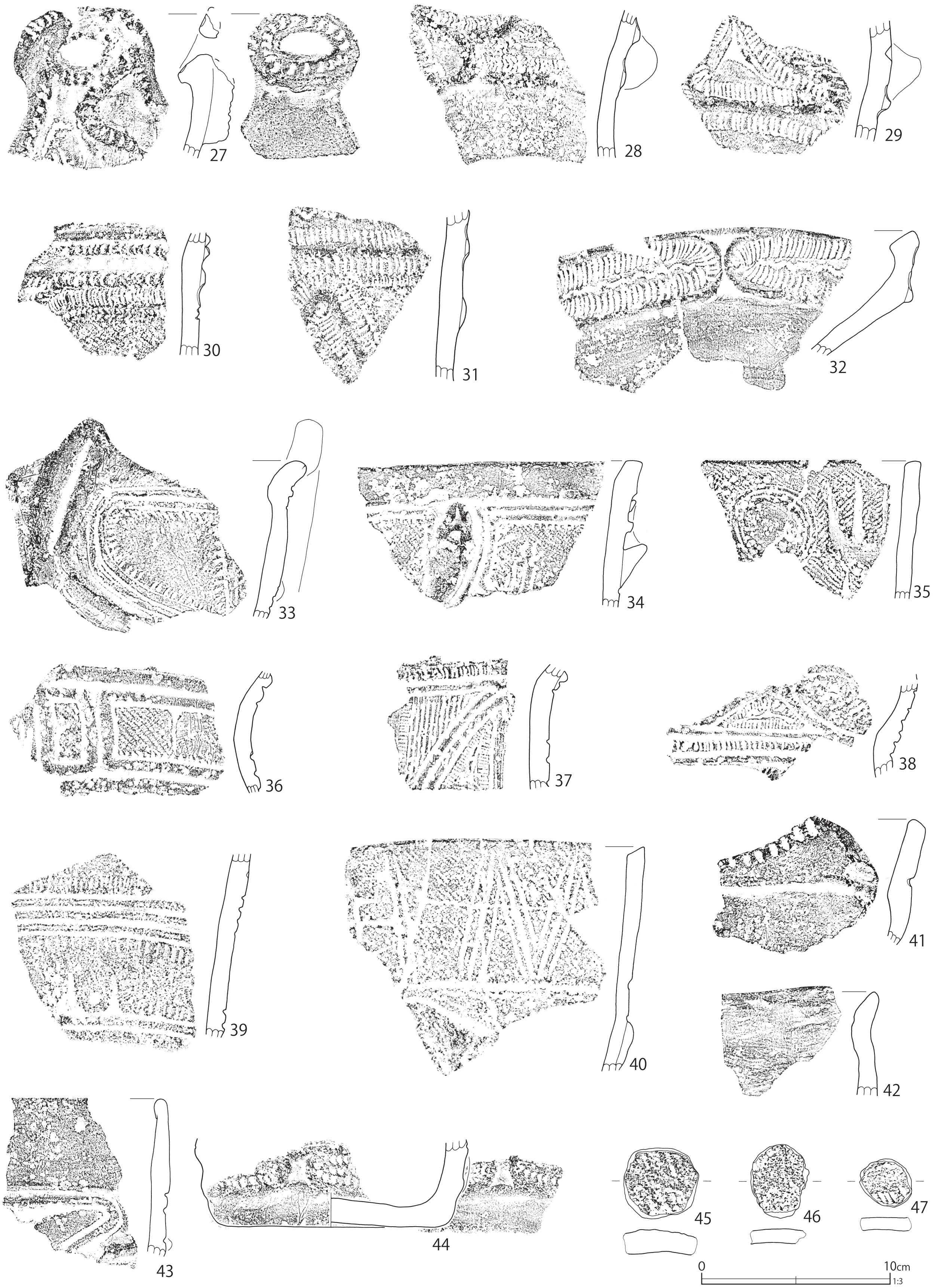


第423図　第54号住居跡出土遺物（3）

第424図　第54号住居跡出土遺物（4）

第172表　第54号住居跡出土石器観察表（第424図）

番　号	器　種	分類	石　材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備　考
424 - 48	石鏃	Ⅰ2①	黒曜石	3.3	2.2	0.5	2.4	
49	石鏃	Ⅰ2①	黒曜石	[1.9]	[1.3]	0.5	0.7	
50	石鏃	Ⅲ①	黒曜石	1.5	1.5	0.3	0.3	
51	磨製石斧	Ⅰ②イ	安山岩	[11.2]	5.1	4.0	337.9	
52	磨製石斧	Ⅰ②イ	安山岩	[7.7]	[4.7]	[4.0]	171.3	
53	打製石斧	Ⅰ①イ	頁岩	11.3	4.8	1.5	68.5	
54	打製石斧	Ⅱ2①イ	ホルンフェルス	13.6	5.0	2.4	228.2	
55	打製石斧	Ⅲ2①イ	砂岩	[12.2]	5.9	2.4	187.5	
56	打製石斧	Ⅲ2①イ	ホルンフェルス	11.5	5.8	2.6	155.4	
57	打製石斧	Ⅳ①イ	ホルンフェルス	7.1	3.6	1.6	44.9	
58	打製石斧	Ⅲ2②イ	ホルンフェルス	8.6	4.7	1.3	59.3	
59	打製石斧	Ⅲ2①イ	砂岩	11.7	8.7	2.5	222.3	
60	打製石斧	Ⅱ2②イ	ホルンフェルス	[7.0]	3.2	1.9	49.7	
61	打製石斧	Ⅴ②イ	ホルンフェルス	[3.1]	[3.2]	[1.1]	12.8	
62	敲石	Ⅱ3②イ	砂岩	[5.6]	[5.1]	[2.8]	88.5	

28 ～ 32は幅広の爪形文を施文するものである。28、29は口縁部の三角形区画に爪形文を施文し、区画内に印刻状の三叉文を施文する。30 ～ 32は爪形文に沿って幅狭の角押文列を施文するものである。32は浅鉢の口縁部であり、楕円区画に沿って爪形文を施文し、中央部にペン先状の三角押文で細かな鋸歯状文を描いている。以上は勝坂式古段階の新道式段階に位置付けられよう。

33 ～ 36は半截竹管状工具の平行沈線でパネル状の区画文を施文するもので、34 ～ 36は地文の単節ＲＬ縄文上に区画文を描く。33は区画の縁辺に刻みを施し、36は方形区画内に差し切り状の沈線を施文して、区画縁辺に刻みを施す。34は口縁部に向けて先端に三角印刻を施すゾウの鼻状の隆帯を施文する。35は円形モチーフや縦位沈線を磨消状に浅く削り取る。

37 ～ 40も半截竹管状工具による平行沈線で施文するものであり、37、38は爪形文を伴う三叉文を施文する。39は平行沈線の横位区画に沿って刻み状の押引文を施文し、部分的に三角印刻を施し円形刺突文も施文している。40は口縁部に３本沈線の鋸歯状文を施文する。以上は、藤内式の古い段階に位置付けられよう。

43は無文の口縁部を平行沈線で区画する円筒形土器である。41は波状口縁を口縁部で区画する深鉢で、42は無文深鉢の口縁部である。

44は底部の楕円区画に沿って三角押文を施文している。

土製品としては、45 ～ 47の土器片を利用した土製円盤が出土している。

石器類は48 ～ 62である。

48、49はともに両側縁が鋸歯状の石鏃である。49は両方の脚部を欠いている。50は石鏃の未成品である。平面形は石鏃に近似した形状を呈しているが、全体的に調整が粗く、裏面には主要剥離面が全体的に残っている。そのため、未成品と判断した。

51は乳棒状の磨製石斧で、刃部が欠けている。刃部が欠損した後、欠損面を使用面として敲石に再利用している。52は乳棒状磨製石斧の基部片である。

53 ～ 61は打製石斧である。53、54は短冊形を呈し、ともに刃部が片刃である。55 ～ 59は撥形を呈する。このうち、刃部の大半を欠く58を除いて、全て刃部は両刃である。60が基部片である。刃部片である61は両刃で、刃部には擦痕が認められる。

62は敲石で、上半部が欠けている。

第55号住居跡（第425図～第427図）

Ｇ－21区に位置する。東壁で第110号土壙と重複するが、本住居跡の方が古い。

平面形は南北に細長い楕円形を呈し、規模は長径3.1m、短径2.7m、深さ0.2mである。非常にに小形の住居跡であるが、確認面までの掘り込みが浅く、床面近くまで削平された可能性がある。

壁溝や柱穴は検出されなかった。壁は床面から皿状に緩やかに立ち上がる。

炉跡は地床炉で中央部やや東寄りに検出された。規模は径45cm程の円形で、深さは７cm程である。

埋甕は検出されなかった。

当初、土壙として調査を始めたが遺物がまとまって出土し、床面から焼土も検出されたため、改めて住居跡として調査を行った。柱穴等は発見されなかったため、周辺を広く精査したが発見に至らなかった。

住居跡の時期は、出土遺物から勝坂式古段階である新道式でも古段階の所産と判断される。

遺物は第426図１～第427図22の土器類、石器類が出土した。

１は、口縁部が直線的に開くバケツ形の深鉢で、捻りのある突起を口縁部に付け、胴部の文様帯を幅狭の５帯に分割し、それぞれ半分ずらした楕円区画文を配置する構成となっている。

１帯目の口縁部は長楕円区画を４単位に配するものと思われ、区画の端に捻りを加えたリング状の貼付文を施し、ペン先状の三角押文を区画に沿って施文する。区画は角押文状結節刺突文で小鋸歯状文を施文する。

２帯目は頸部文様帯に相当するものと思われ、楕円区画と方形区画文を組み合わせて４単位に施文するものと思われる。隆帯には三角押文を沿わせ、充填文に角押文を施文する。

３帯目は１帯目と同様の構成で、ほぼ同位置に配置している。

４帯目も同様な楕円区画文を半単位ずらして施文する。

５帯目は底部文様帯となるもので、胴部下端の区画帯の意味も有する。三角押文を施文する隆帯区画下に、短く垂下する剣先状角押文を横位に連続施文するものである。器面の剥落が著しくモチーフの不明な部分もあるが、幅狭な楕円区画文帯土器と言えよう。新道式の古段階に比定されようか。

２～18は角押文を主体に施文する土器群で、単独、細太の並行角押文、平行結節押引文等の使い分けがある。

２は頸部と胴部が緩く２段に括れる器形で、口縁部から波状の隆帯を垂下する。文様は単独の角押文で施文し、隆帯文の中央部に蛇行角押文を垂下する。

３、４、７～９は波状口縁で、３、９は扇状の把手部と思われる。複列の角押文を施文するものが多い。５は平口縁で太細の角押文を施文する。６は角押文がやや幅広の爪形文状を呈する。

10～16は胴部破片で、隆線状の隆帯でモチーフを描き、多くは太細の角押文を施文する。

17は隆帯の楕円区画文に沿って、平行結節押引文を施文する。

18は口縁部が短く屈曲する浅鉢で、口縁部に太細の角押文と角押文の鋸歯状文を巡らせている。

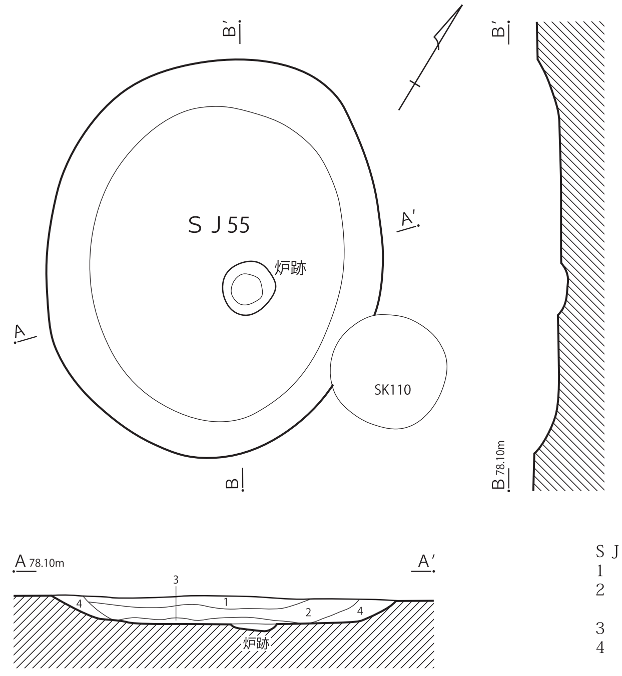
土製品では、19の土器片を利用した土製円盤である。

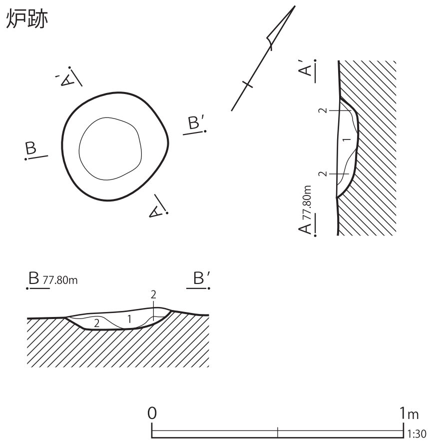
石器は20～22が出土した。

20は粗粒の石材を素材に利用したスクレイパーである。素材剥片は横長と思われ、裏面上部にはバルブ及びバルバー・スカーが残る。

21は撥形の打製石斧で、刃部が欠けている。

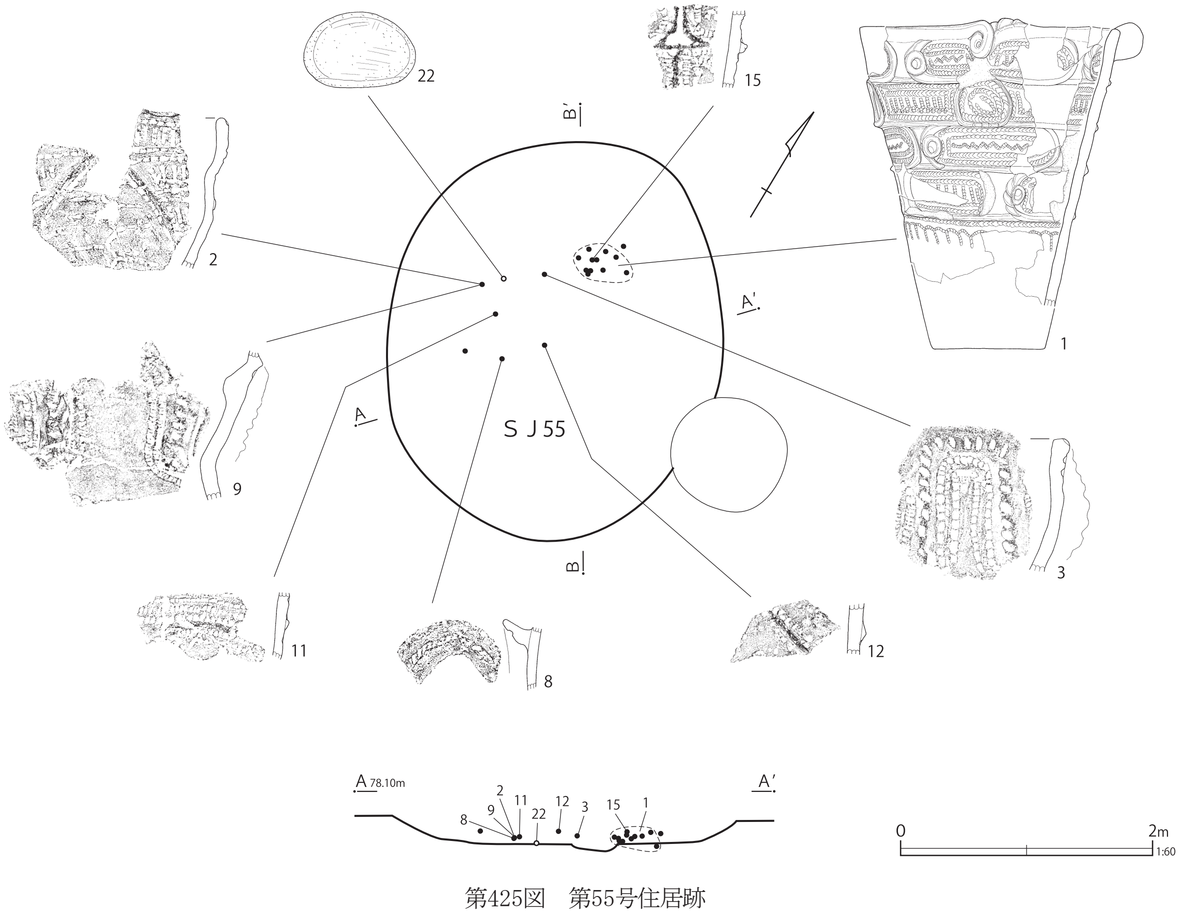
22は磨石である。



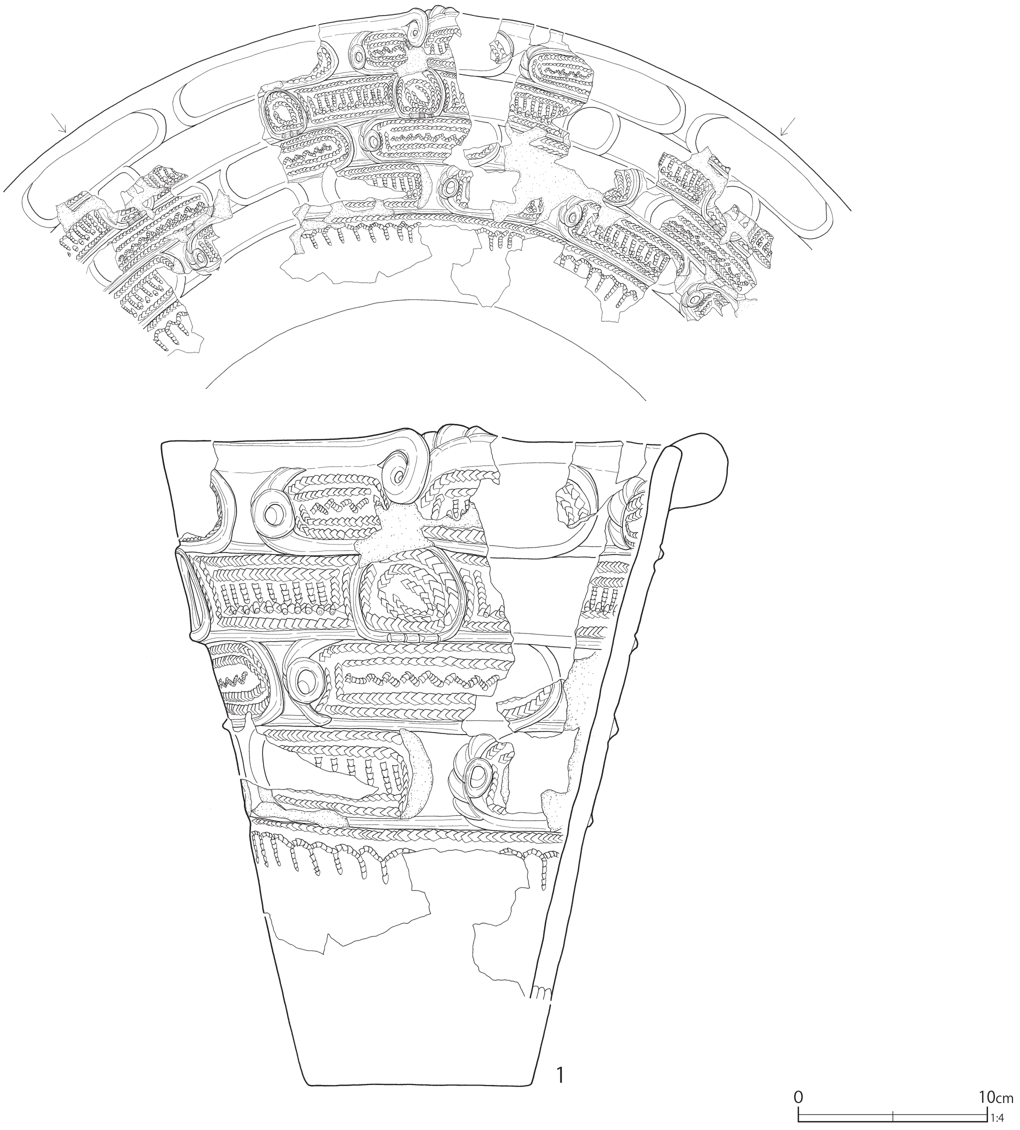


S J 55
1　暗褐色土　　ローム粒子・炭化物少量　焼土粒子微量
2　暗褐色土　　ローム粒子多量　炭化物・ソフトローム少量
　　　　　　　　焼土粒子微量
3　暗褐色土　　ローム粒子・ローム小ブロック多量　炭化物少量　多量
4　褐色土　　　ソフトローム多量　炭化物少量

S J 55 炉跡
1　暗褐色土　　ローム粒子・焼土粒子多量
　　　　　　　　焼土ブロック（径２～３cm）少量　炭化物微量
2　鈍黄褐色土　ローム土主体　ローム小ブロック多量　焼土粒子少量
　　　　　　　　焼土ブロック微量



第425図　第55号住居跡



1

第426図　第55号住居跡出土遺物（１）

第173表　第55号住居跡出土復元土器観察表（第426図）

番号	器高(cm)	口径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	備 考
426-1	[30.5]	(27.5)	-	-	70%

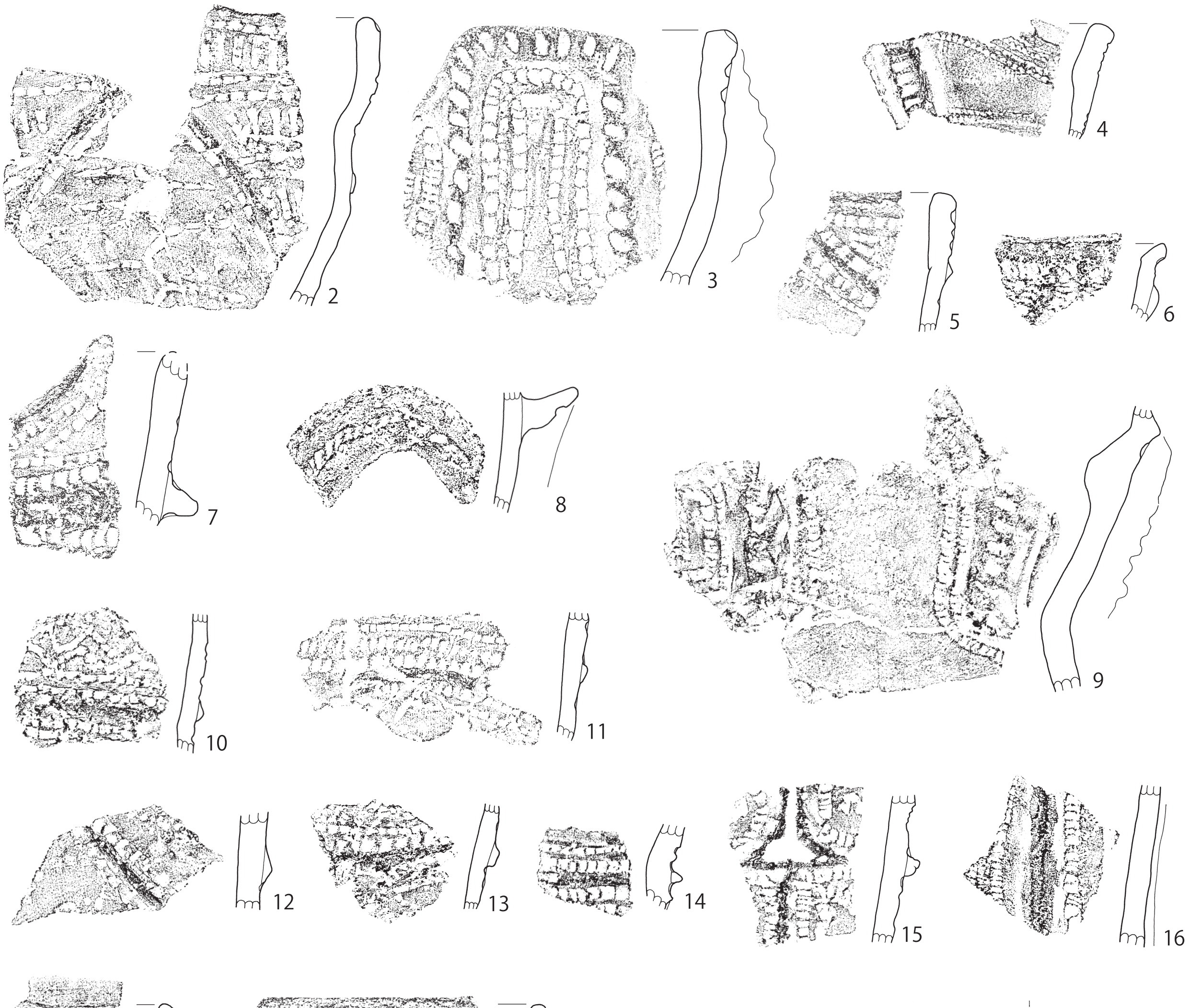
第174表　第55号住居跡出土石器観察表（第427図）

番 号	器 種	分類	石 材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備 考
427 - 20	スクレイパー	Ⅱ1①イ	砂岩	6.6	6.8	1.5	68.7	
21	打製石斧	Ⅲ2②イ	ホルンフェルス	[10.7]	5.3	3.5	263.1	
22	磨石	Ⅱ1①イ	砂岩	8.9	6.0	5.7	445.5	

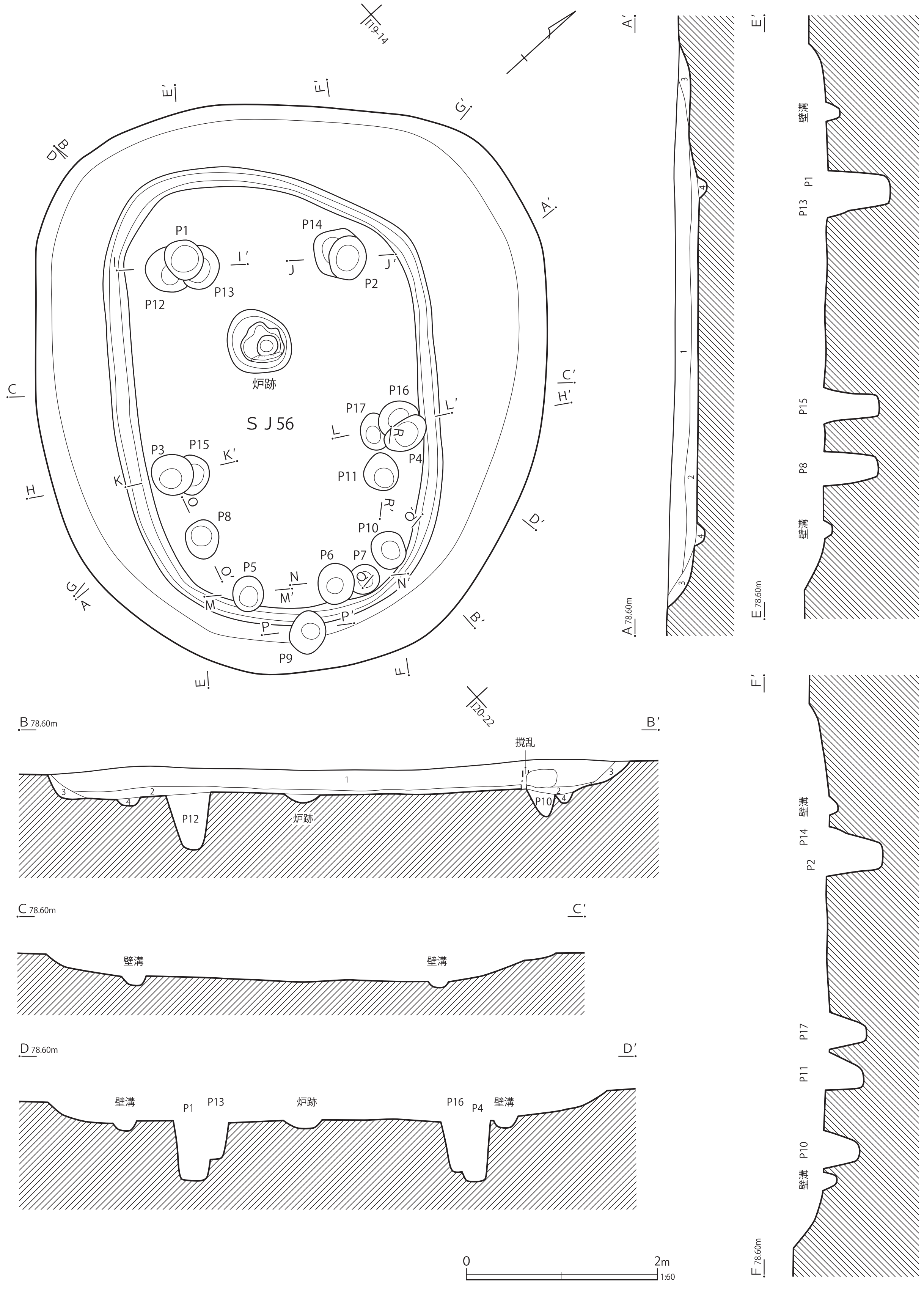
第56号住居跡（第428図～第436図）

Ⅰ－19・20区に位置する。北側で第62号住居跡と一部重複するが、本住居跡の方が新しい。平面形は北西方向に細長い隅丸長方形に近い不整楕円形で、規模は長径6.00m、短径5.40m、深さ0.32mである。

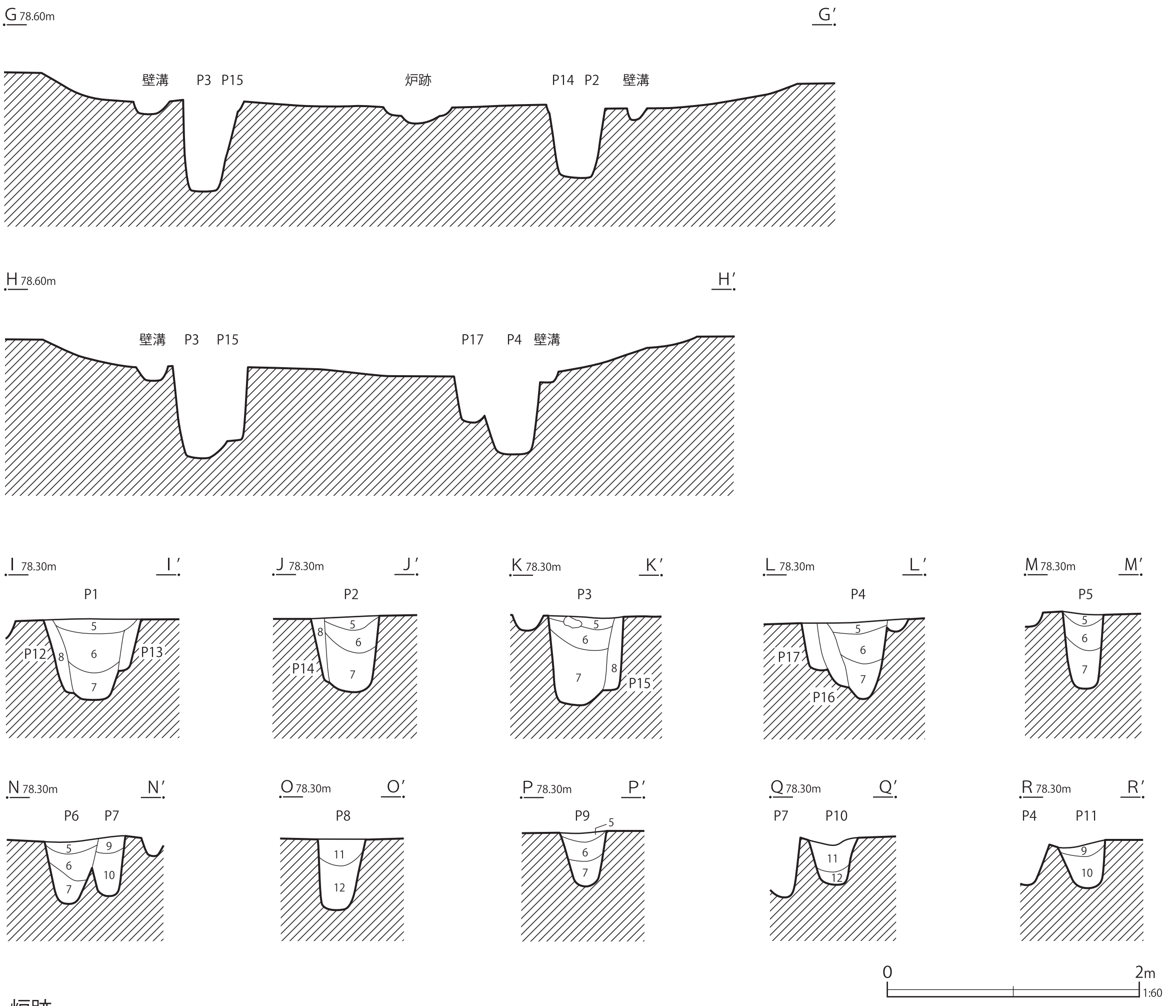
住居跡中央部に、長軸方向に細長い長方形状の壁溝が巡る。壁溝は全体の調査終了後、床面精査



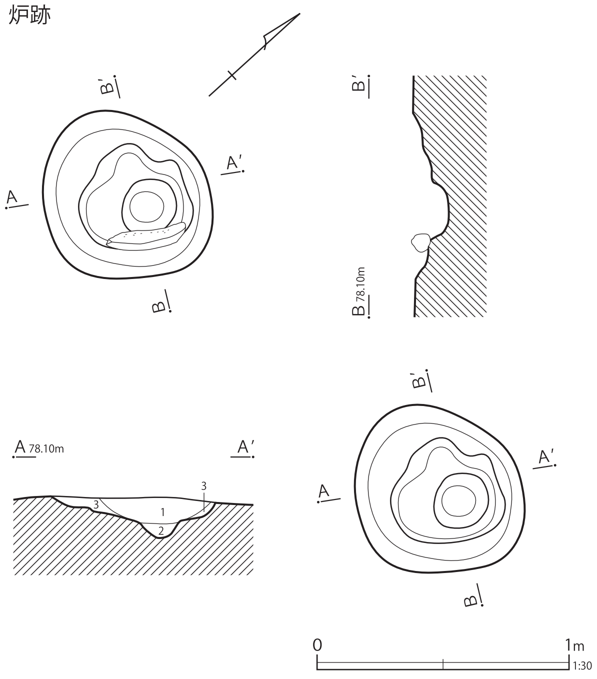
第427図　第55号住居跡出土遺物（2）



第428図　第56号住居跡（1）



炉跡



ＳＪ５６
1　暗褐色土　ローム粒子・炭化物・ソフトローム少量
2　暗褐色土　ローム粒子・ローム小ブロック多量　炭化物少量
3　褐色土　　ローム粒子・ソフトローム多量
4　暗褐色土　ローム粒子多量　炭化物少量　ローム小ブロック微量（壁溝）

ＳＪ56ピット
5　暗褐色土　ローム粒子多量　炭化物少量　しまり良い
6　暗褐色土　ローム粒子・ローム小ブロック多量
　　　　　　炭化物・ソフトローム少量　しまり良い
7　褐色土　　ローム粒子多量　炭化物微量　しまり悪い　粘性あり
8　褐色土　　ローム粒子・ソフトローム多量
9　暗褐色土　ローム粒子・炭化物少量
10　褐色土　　ローム粒子少量　炭化物微量　しまり悪い
11　暗褐色土　ローム粒子・ローム小ブロック多量
12　褐色土　　ソフトローム多量

ＳＪ56炉跡
1　暗褐色土　ローム粒子多量　炭化物・焼土粒子少量
　　　　　　焼土ブロック（径 1cm）微量
2　暗褐色土　ローム粒子多量　炭化物・焼土粒子微量
　　　　　　ソフトローム混入
3　暗褐色土　ローム粒子・ソフトローム多量
4　赤褐色土　被熱したロームブロック　ガリガリに焼けている

第429図　第56号住居跡（２）

第175表　第56号住居跡柱穴計測表（第428・429図）

ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)
Ｐ１	42.0	64.0	Ｐ２	45.0	61.0	Ｐ３	44.0	71.0	Ｐ４	49.0	63.0	Ｐ５	37.0	62.0
Ｐ６	43.0	51.0	Ｐ７	33.0	48.0	Ｐ８	40.0	56.0	Ｐ９	46.0	44.0	Ｐ10	41.0	38.0
Ｐ11	39.0	39.0	Ｐ12	49.0	58.0	Ｐ13	45.0	40.0	Ｐ14	48.0	52.0	Ｐ15	39.0	58.0
Ｐ16	43.0	51.0	Ｐ17	39.0	37.0									

中に確認されたもので、外側の住居跡より古い段階のものと判断される。新しい住居跡の床面は壁際がやや高くなり、壁溝内と合わせる段差が見られる。したがって、新しい住居跡の壁は緩く段状を呈する床面から、皿状に緩く立ち上がっている状況となる。

柱穴は、合計17基検出された。柱穴はほとんどが壁溝の内側から検出されており、中央部の４本に複数回の重複が見られた。また、長軸上の南壁寄りに複数の柱穴が対峙するように存在しており、全体として６本、もしくは４本を主柱とする柱穴配置が想定される。

主柱は重複関係、覆土の状況、配置等から少なくとも２組以上の組み合わせが想定される。

新しい段階の住居跡は、Ｐ３、１、２、４、６、５の柱穴６基と思われ、４本＋２本の６本主柱の住居跡と思われる。

古い段階の住居跡は、Ｐ15、12、14、16、10、８の柱穴６基と思われ、やはり４本＋２本の６本主柱の住居跡と思われる。

さらに組み合わせが整わない柱穴があることから、本住居跡は少なくとも１回以上の建て替えが行われ、２軒以上の住居跡が重なっているものと判断される。

主柱穴の深さは、Ｐ１＝64㎝、Ｐ２＝61㎝、Ｐ３＝71㎝、Ｐ４＝63㎝、Ｐ５＝62㎝、Ｐ６＝51㎝、Ｐ８＝65㎝、Ｐ10＝38㎝、Ｐ12＝58㎝、Ｐ14＝52㎝、Ｐ15＝58㎝、Ｐ16＝51㎝である。

炉跡は地床炉で、住居跡の中央部やや北寄りに検出された。炉の南側で、入り口部に対面する部分に横長の礫が１個設置されていた。また、炉の中央部が丸く窪むことから、埋設土器が抜き取られた可能性がある。長径0.73ｍ、短径0.64ｍ、深さ0.17ｍである。添え石炉とでも呼称されようか。

埋甕は検出されなかった。

住居跡の床面にほぼ接するように大きな礫が２個出土している。古い住居跡の柱穴としたＰ８、Ｐ10に隣接して覆うかのように設置されていた。廃棄されたものではなく、新しい住居跡で使用されていた原位置での出土と判断される。

住居跡付属の土器がなく、詳細な時期は不明であるが、覆土出土遺物から勝坂式新段階の所産と考えられる。

遺物は床面近くの覆土から出土しているが、比較的ローム面への掘り込みが浅いため、検出された時点では吹上パターン状に遺棄された遺物の中でも、下部に相当する土器群が検出されたものと考えられる。

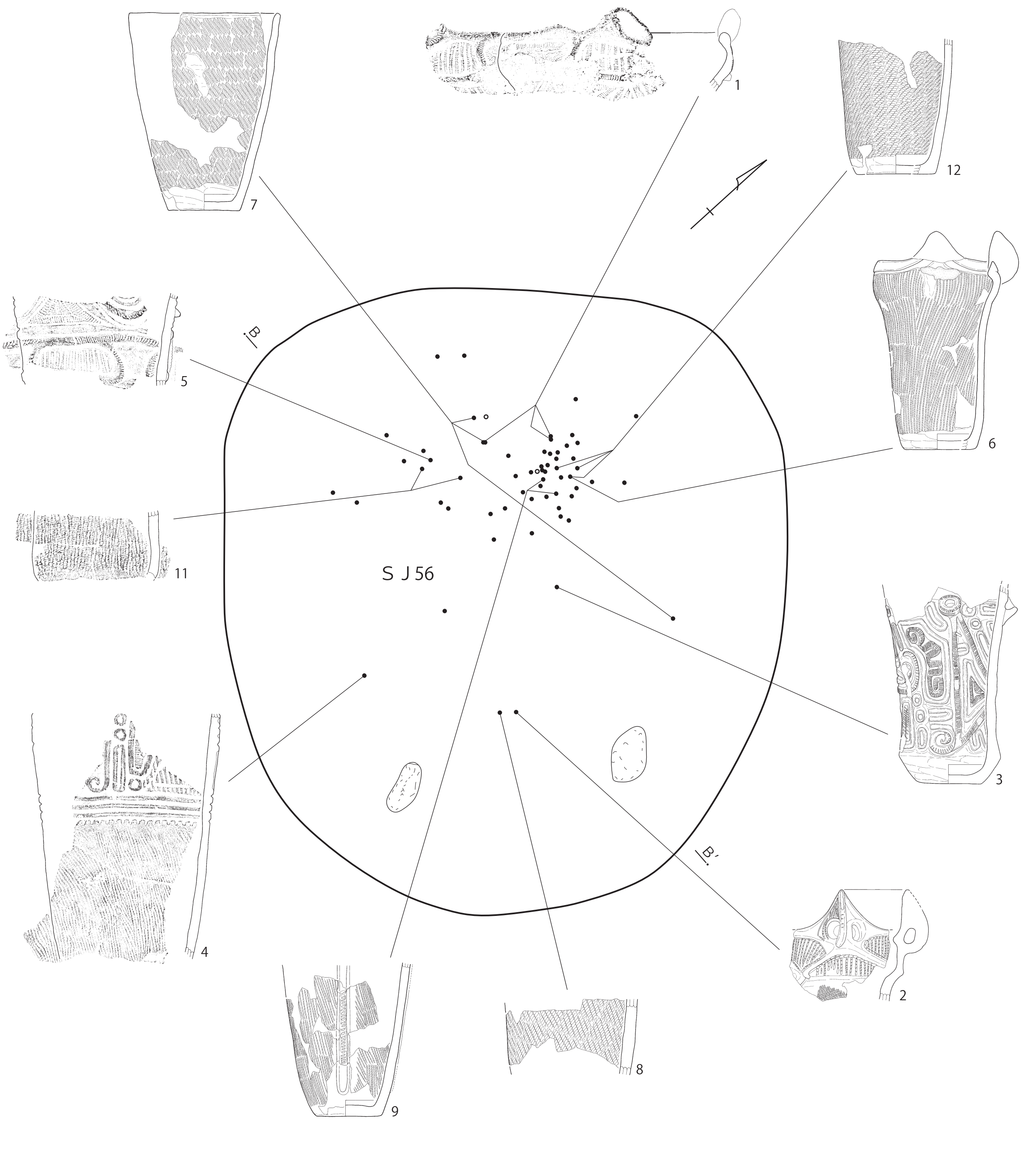
また、外側のプランの新しい住居跡より、内側の壁溝を有する住居跡の方が古いことになり、住居の形状と時期的な特徴とに相違が見られることから、本住居跡の壁溝は間仕切り的な可能性も考慮する必要が生じよう。

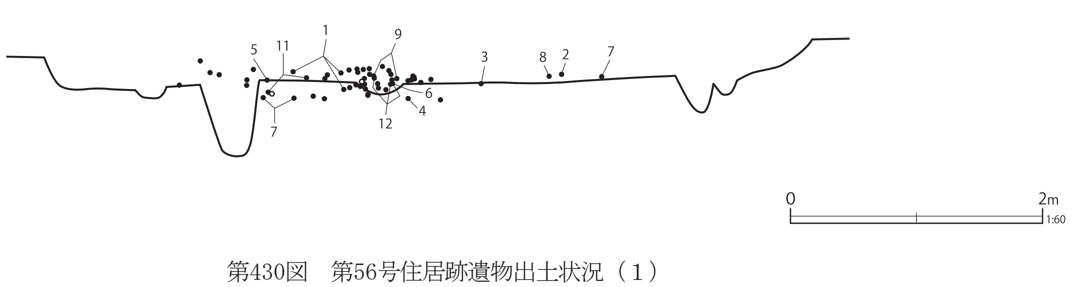
遺物は第432図１～第436図69の土器類、石器類が出土した。

土器は１～58である。

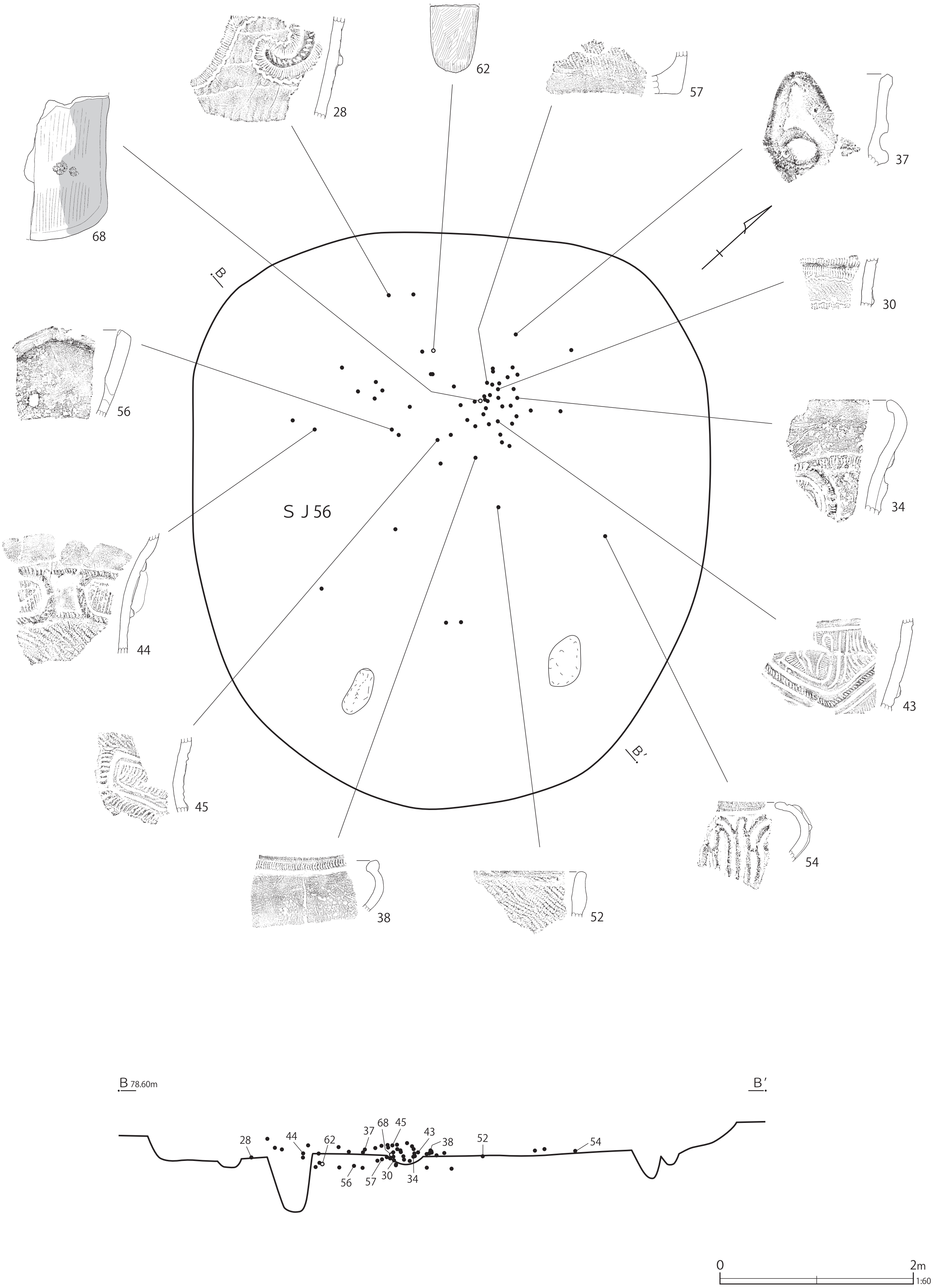
13、14はＰ１、15はＰ２、16はＰ３、17はＰ４、18はＰ６、19はＰ８、20はＰ11からの出土である。

１、２は口縁部文様帯を有するキャリパー形深鉢で、口唇部に１は耳状把手を、２は山形眼鏡状把手を付けている。１は区画内に刻みを挟む並行沈線を充填施文する。また、半月形区画内では隆帯に沿って沈線と爪形文を施文し、小波状沈線を

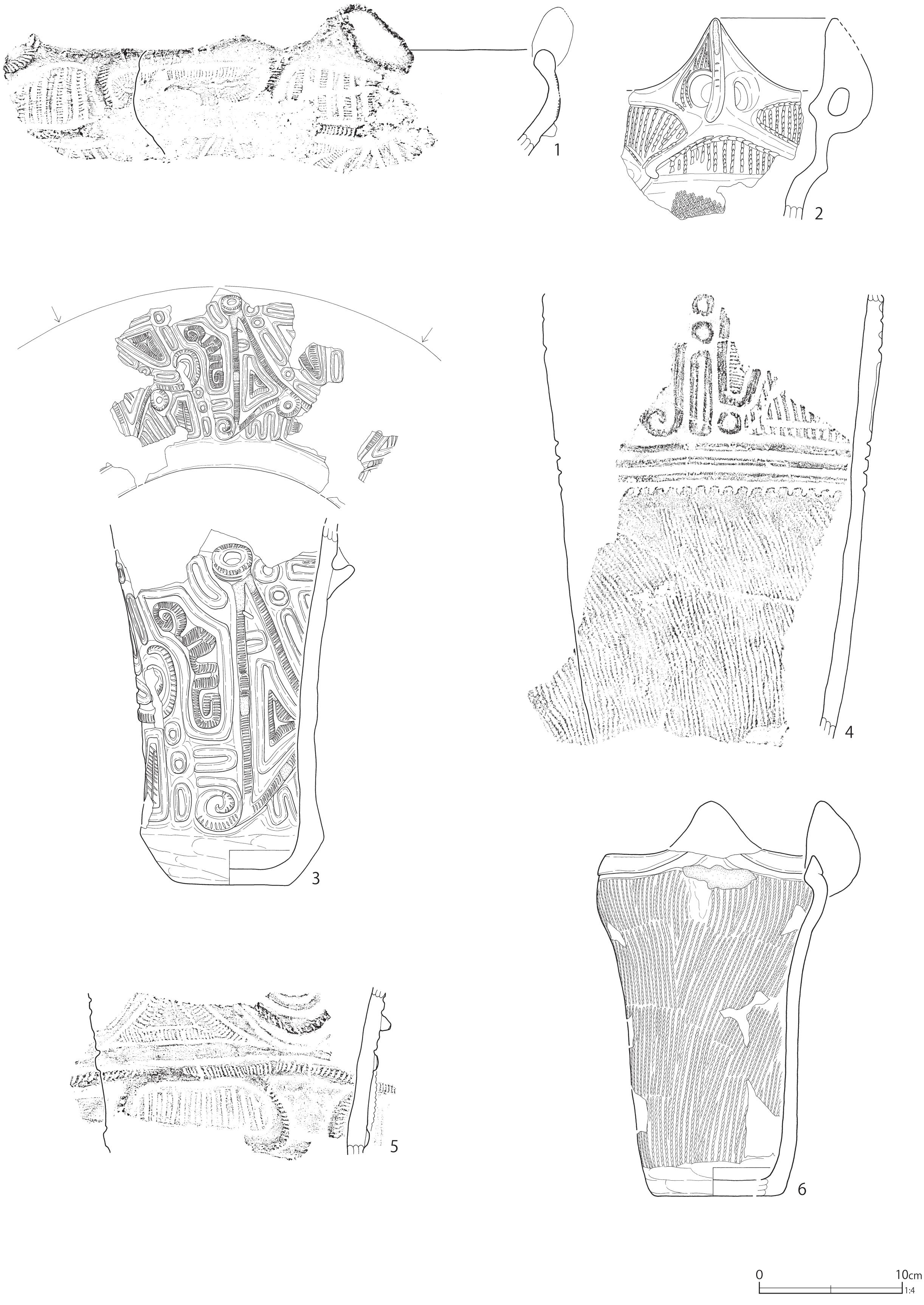




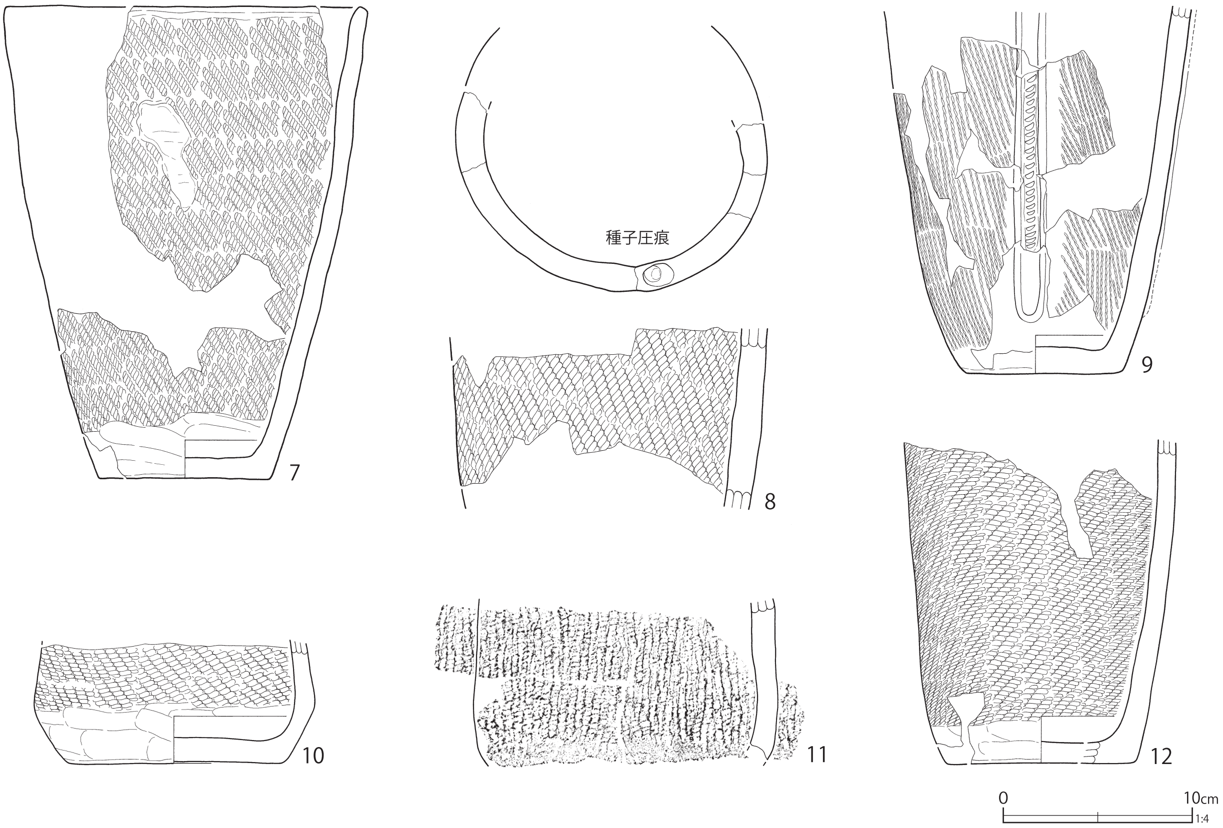
第430図　第56号住居跡遺物出土状況（１）



第431図　第56号住居跡遺物出土状況（2）



第432図　第56号住居跡出土遺物（1）



第433図　第56号住居跡出土遺物（2）

第176表　第56号住居跡出土復元土器観察表（第432・433図）

番号	器高(cm)	口径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	備　考
432-1	[10.4]	(27.4)	-	-	10%
2	[14.1]	-	-	-	10%
3	[24.9]	-	(15.6)	7.8	70%
4	[30.9]	(23.5)	-	-	10%
5	[11.7]	(20.7)	-	-	20%
6	[24.3]	14.4	-	(8.6)	70%
433-7	25.0	(19.1)	-	(8.9)	50%
8	[9.5]	-	(16.8)	-	20%
9	[17.8]	(16.2)	-	8.2	40%
10	[6.3]	(13.9)	-	11.2	10%
11	[8.9]	(15.4)	-	-	20%
12	[17.1]	-	14.3	(9.8)	40%

施文している。２は口縁部の隆帯区画に沿って結節刺突文を施文し、集合結節沈線を充填する。

３は、胴部に半肉彫状隆帯でモチーフを描くもので、刻み隆帯を垂下させて胴部を区画し、派生する渦巻文や三角形状の区画文を連結するモチーフを構成して、余白部分に半肉彫状隆帯の単位文的な文様を施文している。

４は半截竹管状工具による平行沈線でパネル状区画文を施す円筒形土器で、半肉彫状隆帯の円形や長方形状の単位文的区画文を連ねた区画要素で文様帯を分割している。胴部区画線の下端には、刻みを施している。胴部の地文は撚糸文Ｌである。

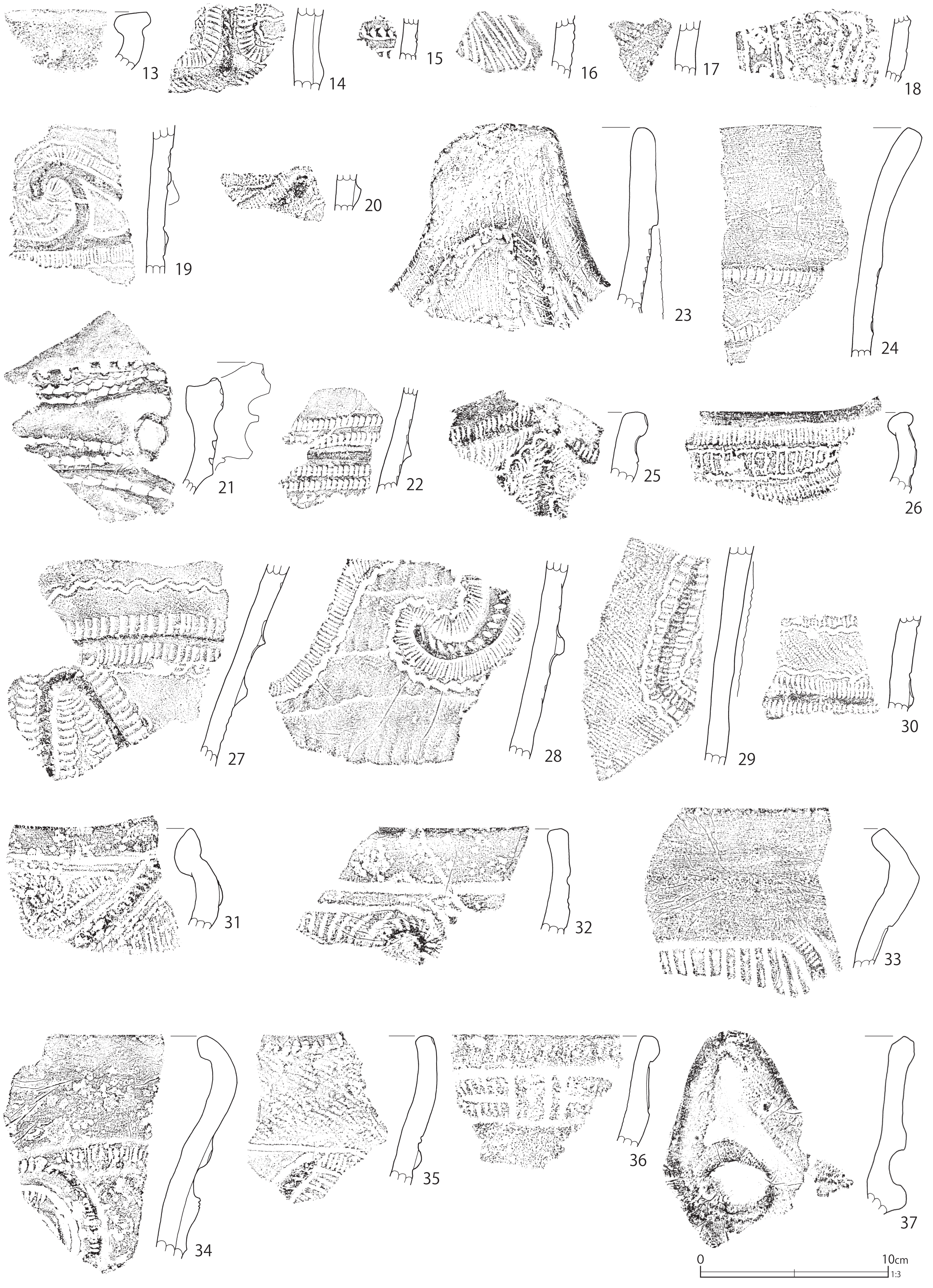
５は胴部上半の文様帯に刻み隆帯で渦巻文を中心とした文様を描き、底部文様帯と思われる下半の文様帯に楕円区画文を配している。

６は口縁部に大きな把手を１箇所に付け、地文のみ施文する土器である。やや内湾して開く口縁部を沈線で区画し、地文に撚糸文Ｌを施文する。

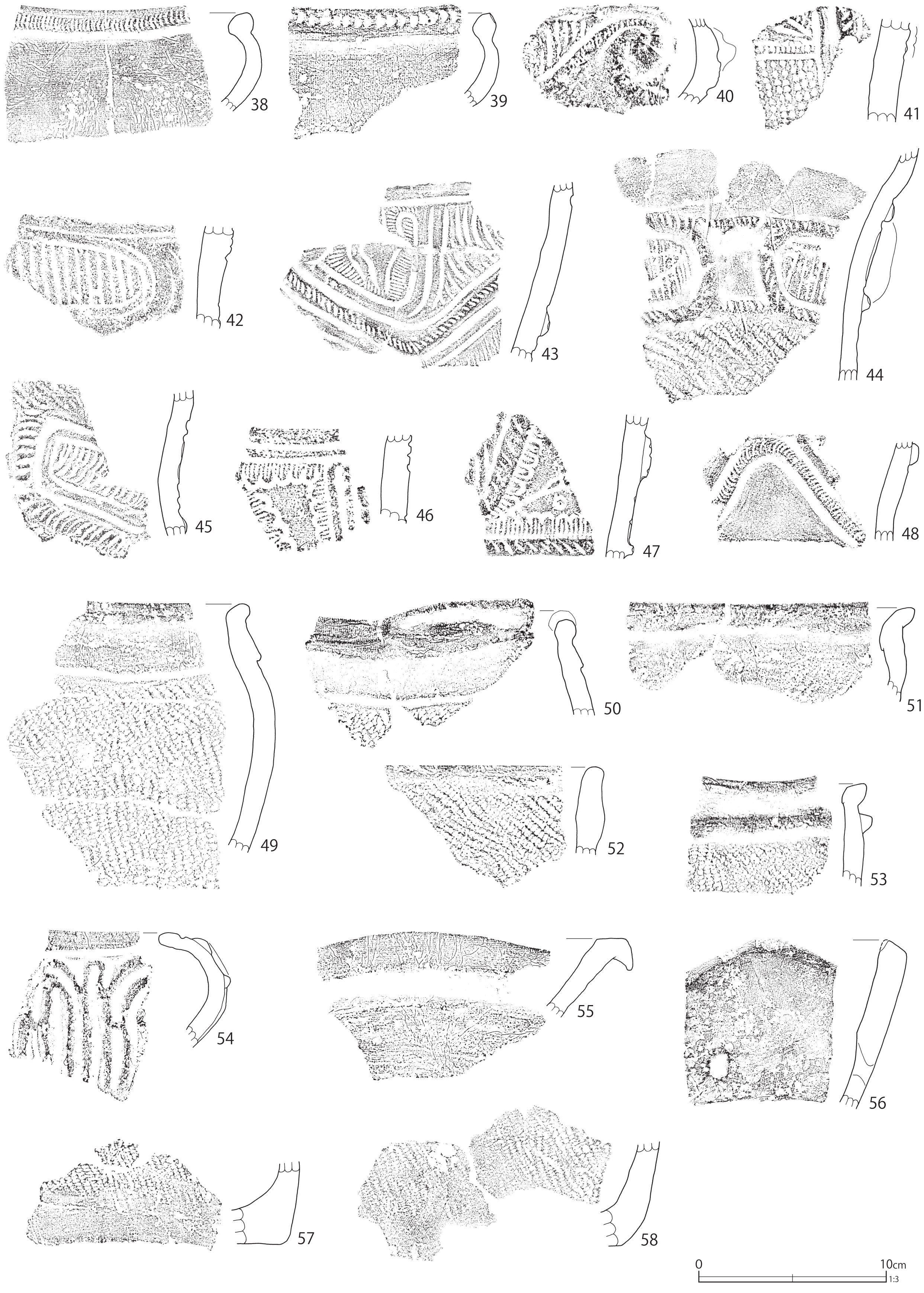
７は口縁部が直線的に開く深鉢で、地文に単節ＲＬ縄文を横位施文する。

８は単節ＲＬ縄文を横位施文する胴部破片で、輪積痕の中に大形の種子圧痕が残る。どんぐり類であろうか。

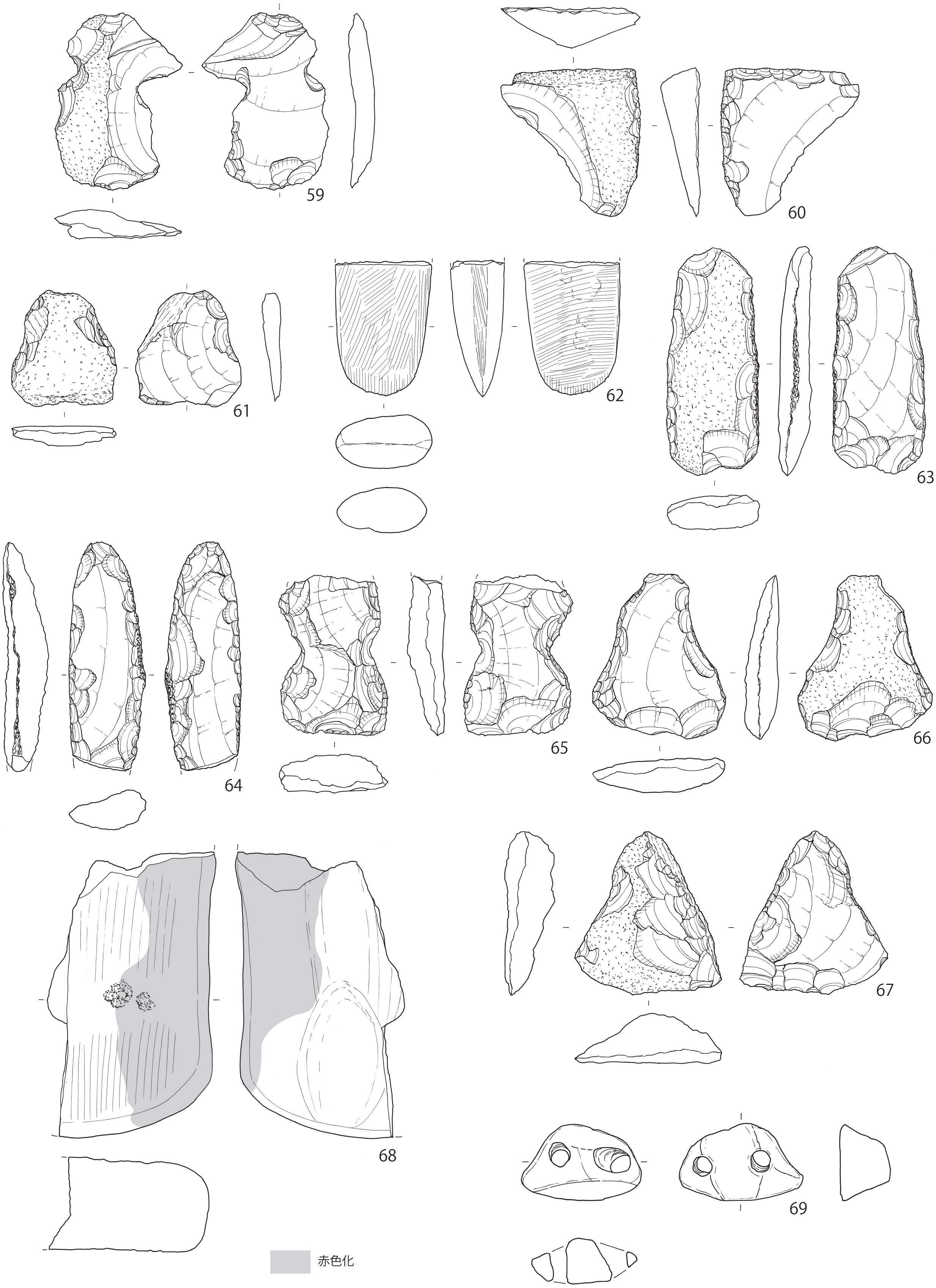
９は地文撚糸文Ｒ上に刻みを施す隆帯を垂下



第434図　第56号住居跡出土遺物（3）



第435図　第56号住居跡出土遺物（４）



第436図　第56号住居跡出土遺物（5）

第177表　第56号住居跡出土石器観察表（第436図）

番　号	器　種	分類	石　材	長さ(㎝)	幅(㎝)	厚さ(㎝)	重量(ｇ)	備　考
436 － 59	大形粗製石匙	Ⅱ2①ア	ホルンフェルス	9.2	6.6	1.5	62.8	
60	スクレイパー	Ⅱ2①イ	ホルンフェルス	8.3	7.1	2.1	88.0	
61	スクレイパー	Ⅱ②イ	ホルンフェルス	6.1	[5.5]	1.1	34.3	
62	磨製石斧	Ⅰ②イ	安山岩	[7.0]	5.0	2.8	142.6	
63	打製石斧	Ⅱ2①イ	砂岩	11.9	4.8	1.8	141.9	
64	打製石斧	Ⅰ②イ	安山岩	[11.9]	4.0	2.4	130.5	
65	打製石斧	Ⅳ②イ	頁岩	[8.3]	5.6	2.0	11.0	
66	打製石斧	Ⅲ1①イ	砂岩	8.6	6.9	1.8	104.2	
67	打製石斧	Ⅲ2①イ	ホルンフェルス	8.5	7.7	2.6	133.6	
68	石皿	Ⅳ②ア	砂岩	[14.9]	[8.8]	5.8	1046.8	表裏面一部赤色化
69	垂飾	①イ	安山岩	2.0	3.2	1.4	7.8	

させる。

10 ～ 12は底部で、10、12は単節ＲＬの縦位施文、11は０段多条ＲＬの縦走縄文を施文する。

21 ～ 24は阿玉台式系土器で、21は口縁部に扇状把手の一部が残り、縦位に垂下する隆帯に強い押圧が加えられている。口縁部は２本対の三角押文で区画し、頸部に襞状整形を施す。雲母を含む。

22は隆帯脇に２列の角押文状の押引文を施文し、押引状の刺突文を沿わせる。雲母は含まない。

23は大きな山形把手で、地文に条線状の沈線文を施文する。波頂部から隆帯が垂下し、渦を巻くものと思われるが、隆帯脇に１列の角押文状の押引文を施文する。雲母は含まない。

24は角頭状の外反する無文の口縁部を、押引の爪形文で区画する。爪形文を波状沈線が縁取る。

25 ～ 30は隆帯脇に幅広な爪形文を施文するもので、28は隆帯脇のキャタピラ文をペン先状の三角押文の鋸歯状文で縁取っている。胴部の整形に襞状風の整形を施しており、新道式に比定される。

27、29、30は隆帯脇の爪形文に小波状沈線を沿わせ、27は蓮華状文を施文する。29、30には単節ＲＬ縄文を施文する。藤内式に比定される。

31 ～ 48は刻み隆帯や沈線でモチーフを描くもので、31 ～ 35は口縁部に渦巻文や楕円区画文を施し、隆帯脇に沈線を施文する。区画内には爪形文を伴う三叉文や集合沈線文を施文する。36は口縁部に沈線区画を施し、37は山形の把手を有する。38、39は口唇部に刻みを施す無文の口縁部である。40は口縁部に隆帯の渦巻文を施文し、41は胴部の区画文内に結節沈線文を施文する。44は楕円区画文内に沈線文を施文し、地文に０段多条ＲＬ縄文を横位施文する。勝坂式新段階の土器群であろう。

42、43、45、46は刻み隆帯と半截竹管状工具の平行沈線でモチーフを描く、勝坂式中段階から新段階にかけての土器群である。46、47は蓮華状文を施文し、48は蛇行隆帯に爪形文状の細かな刻みを施文する。

49 ～ 53は縄文を施文する口縁部破片で、49は折返し状口縁で地文に単節ＲＬ縄文を施文する。50は内湾する口縁部に把手の付くもので、地文は単節ＲＬの横位施文である。51は単節ＬＲ、52は単節ＲＬ、53は口縁部に隆帯を巡らせ、地文に複節ＲＬＲを横位施文する。

54は口縁部の内湾の強い信州系のキャリパー形土器で、隆帯の褶曲文状モチーフを施文する。

57、58は深鉢の底部で、57は単節ＬＲ縄文の縦位施文、58は単節ＲＬ縄文の横位施文である。

55、56は浅鉢の口縁部破片で、55は口唇部が外折する。56は波状口縁の浅鉢である。

石器は59 ～ 69が出土した。

59は粗粒の石材を素材として用いた大形粗製石匙で、刃部が縦に付く。

60、61はスクレイパーで、粗粒の石材を素材

としている。

62は乳棒状磨製石斧の刃部片である。

63～67は打製石斧である。63、64が短冊形を、65が分銅形を、66、67は撥形を呈する。刃部を欠く64を除き、刃部は全て両刃である。

68は石皿の破片で、正面に凹痕を有する。

69は垂飾である。平面形は台形を呈し、２個１対の穿孔を有する。穿孔は両面から穿たれている。

第57号住居跡（第437図～第442図）

Ｉ・Ｊ－20・21区に位置する。西壁の中央部付近で第63号集石土壙と重複するが、集石の方が新しい。平面形は北方向に細長い楕円形で、規模は長径5.70m、短径5.20m、深さ0.47mである。

壁溝は検出されなかった。住居跡の壁は、床面から皿状に緩く立ち上がる。

柱穴は、合計26基検出された。重複する柱穴があるものの、比較的散在しており、対応する柱穴を抽出するのが難しい状況である。覆土や切り合い関係、配置等から新旧２組の組み合わせが想定される。

一番新しく、最後の住居跡の柱穴は、Ｐ１、３、４、５、９の５基で、長軸方向とはややずれるものの５本主柱の住居跡の存在が推定される。

古い住居跡の柱穴は、Ｐ14、15、12、17、19の５基で、やや形が整わないが５本主柱の住居跡が推定される。住居跡の主軸方向とずれる部分があり、あるいは建て替えに伴って、主軸方向を変えている可能性もある。

また、それら以外にも整然と組み合わないが、多くの柱穴があり、合計では少なくとも２回以上の建て替えが行われたものと判断される。

主柱穴の深さは、Ｐ１＝51㎝、Ｐ３＝64㎝、Ｐ４＝62㎝、Ｐ５＝68㎝、Ｐ７＝43㎝、Ｐ９＝50㎝、Ｐ11＝53㎝、Ｐ12=63㎝、Ｐ13=54㎝、Ｐ15＝48㎝、Ｐ19＝36㎝、Ｐ20＝41㎝である。

炉跡は中央部北寄りに、埋甕炉が２基検出された。炉跡１の方が新しく、炉跡２を壊して作られていた。炉跡１の埋甕炉は、底部を抜いた浅鉢が使用されており、炉跡２の埋甕は深鉢の胴部のみ現存していた。規模は炉跡１が長径0.61m、短径0.53m、深さ0.20mである。炉跡２は径0.35mで、深さ0.12mである。

埋甕は検出されなかった。

住居跡は炉跡の切り合いから２軒が、柱穴の配置から少なくとも２軒以上の住居跡が重複していたものと思われる。住居跡の時期は炉体土器から、勝坂式中～新段階の所産であると判断される。

遺物は第439図１～第442図63の土器類、石器類が出土した。

土器は１～53である。

13はＰ１、14、15はＰ３、16はＰ４、17、18はＰ５、19はＰ６、20はＰ９、21はＰ12、22はＰ13、23、24はＰ17からの出土である。また、Ｐ12から12の人面付き土器の顔部分が出土した。

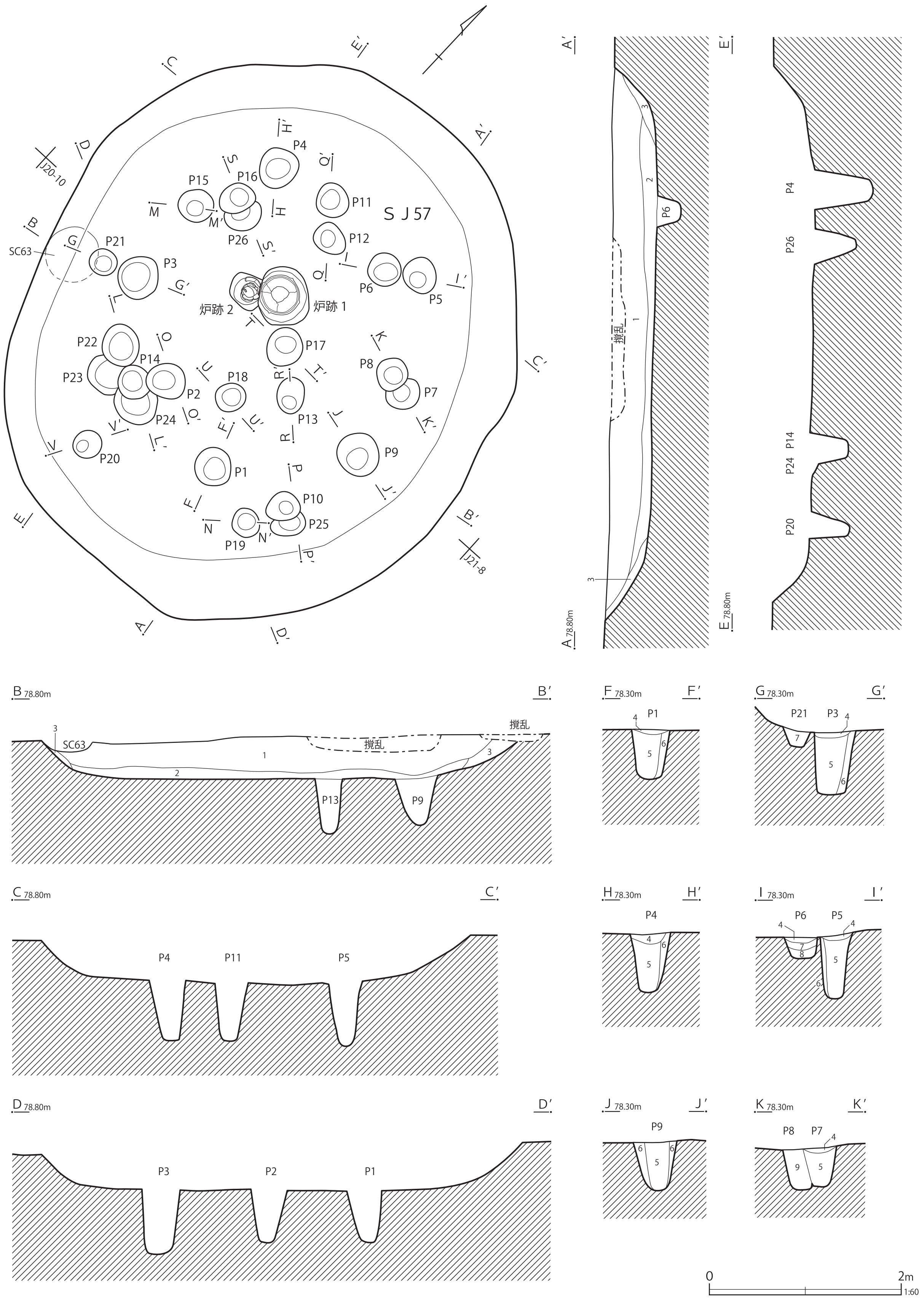
１は炉跡１の炉体土器である。口縁部が「く」字状に内折し、口縁部に低平隆帯で区画文と渦巻文を施文する。底部を欠いている。勝坂式中～新段階のものであろう。

２は炉跡２の炉体土器である。胴部のみ現存するもので、口縁部を欠損する。新しい炉を構築する際に壊されたものであろう。刻み隆帯で胴部に渦巻文を連結するモチーフを施文する。勝坂式中～新段階のキャリパー形深鉢の胴部である。

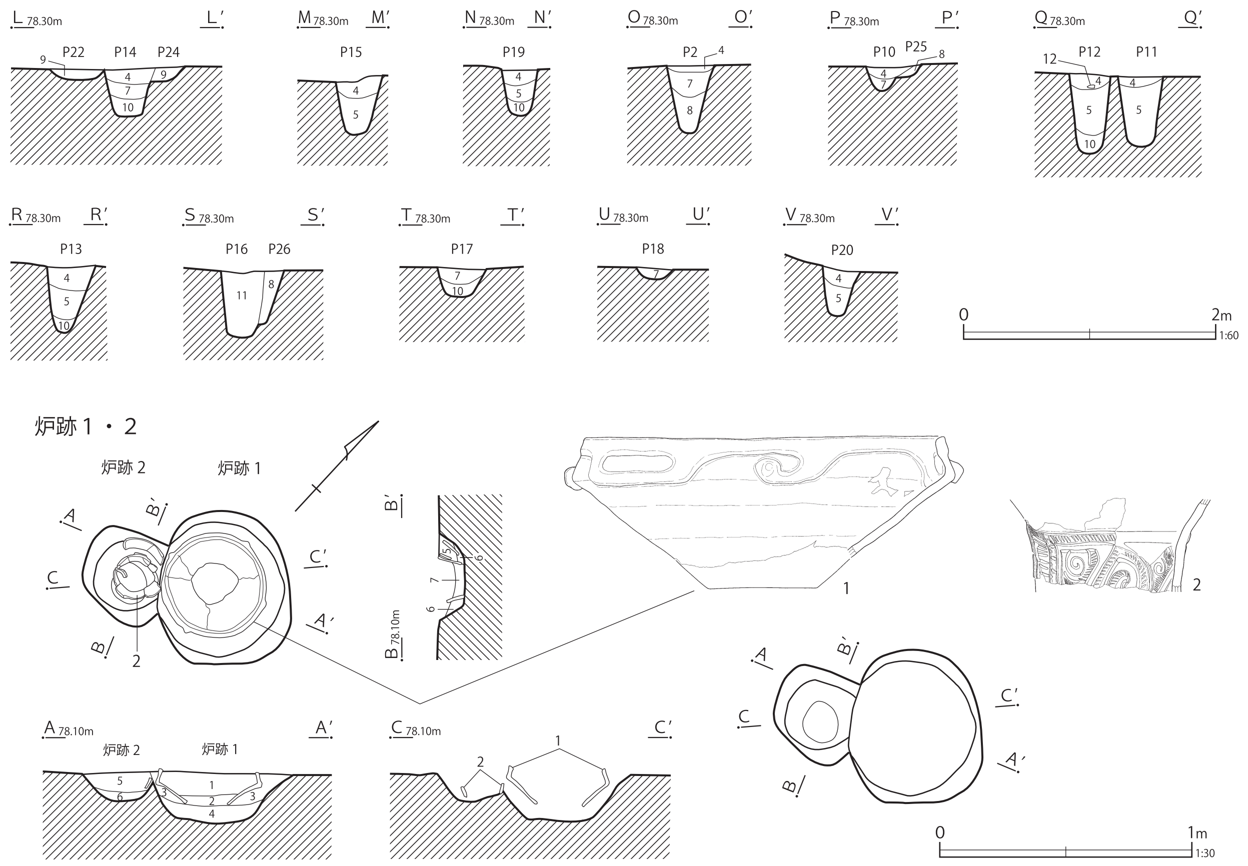
３は口縁の幅広無文部が立ち、内湾する口縁部が開くキャリパー形の深鉢である。口唇部に大きな耳状把手を有し、口縁部に縦位の集合沈線を、頸部の楕円区画文内にも集合沈線を施文する、地文は撚糸文Ｒである。

４は山形の大きな眼鏡状把手で、正面の耳状把手部分から刻みを施す蛇行隆帯を垂下する。

５は縦位の区画隆帯を垂下する胴部破片で、隆帯脇の沈線に沿って爪形文と波状沈線文を施文する。



第437図　第57号住居跡（1）



ＳＪ57
1　暗褐色土　ローム粒子・炭化物少量
　　　　　　焼土粒子・ローム小ブロック微量
2　暗褐色土　ローム粒子多量　炭化物・焼土粒子微量
　　　　　　ローム小ブロック少量
3　褐色土　ローム粒子多量　ソフトローム多量

ＳＪ57 ピット
4　暗褐色土　ローム粒子・炭化物粒子を少量
5　暗褐色土　ローム粒子・ローム小ブロック少量　緻密な層
6　暗黄褐色土　ローム粒子多量
7　暗黄褐色土　ロームブロック少量
8　黄褐色土　ローム粒子・ロームブロック多量
9　暗黄褐色土　ローム粒子多量　緻密な層
10　暗褐色土　ローム粒子多量　緻密で粘性強い
11　黄褐色土　ロームブロックを多量に充填

ＳＪ57 炉跡１
1　暗褐色土　ローム粒子多量　焼土粒子少量　炭化物微量
2　暗褐色土　ローム粒子多量　焼土粒子・炭化物微量
　　　　　　ローム小ブロック微量
3　暗褐色土　ローム粒子・炭化物少量　焼土粒子微量
　　　　　　しまり非常に良い　炉体土器の埋め戻し土
4　褐色土　ローム粒子少量　炭化物微量　ローム小ブロック少量
　　　　　　ソフトローム多量　しまり非常に良い

ＳＪ57 炉跡２
5　暗褐色土　ローム粒子多量　炭化物・ローム小ブロック少量
　　　　　　しまり非常に良い　ソフトローム少量
6　褐色土　ソフトローム主体　ローム粒子多量　しまり非常に良い
7　暗褐色土　ローム粒子多量　ローム小ブロック少量
　　　　　　焼土粒子・炭化物少量　焼土小ブロック微量

第438図　第57号住居跡（２）

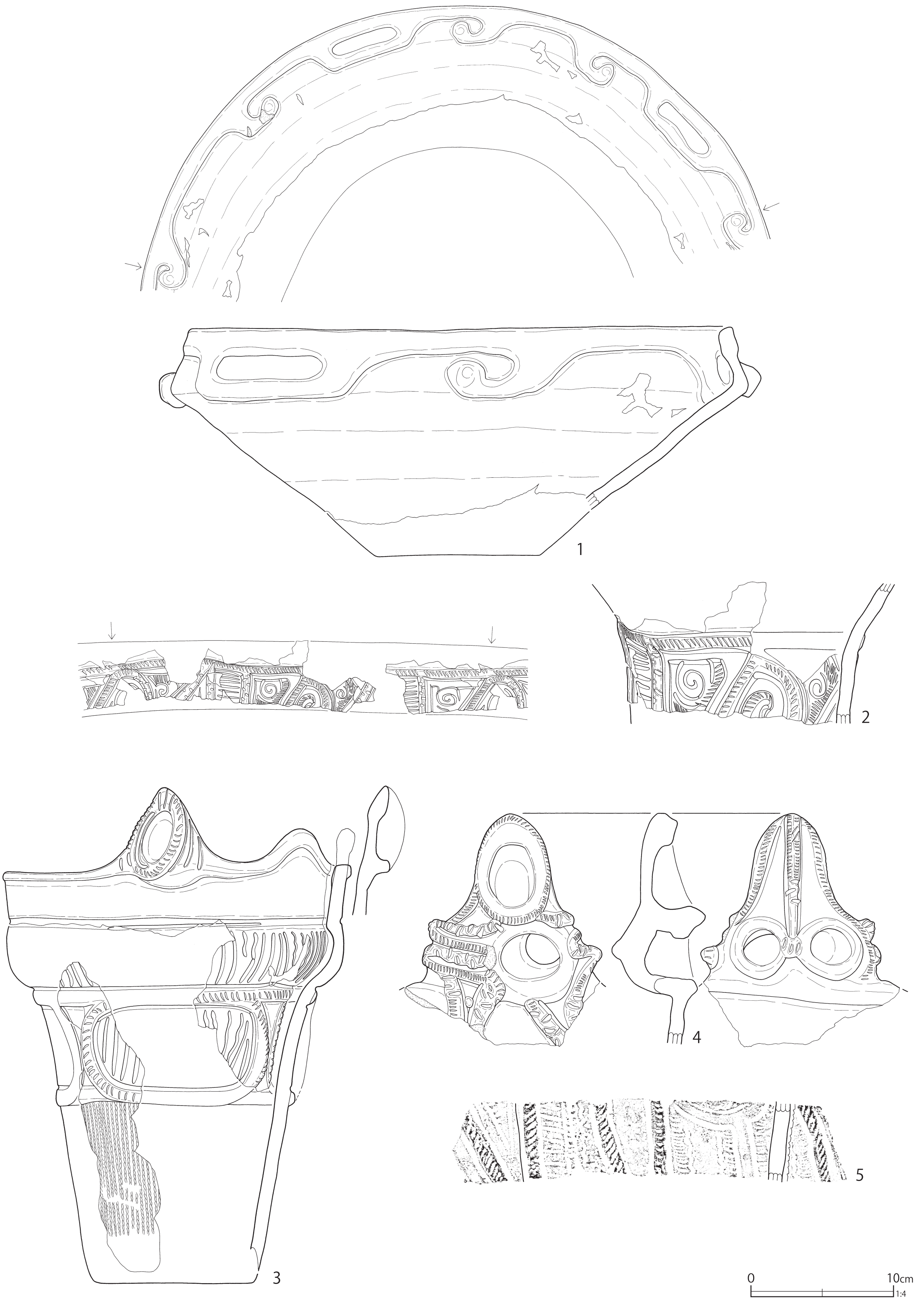
第178表　第57号住居跡柱穴計測表（第437・438図）

ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)
Ｐ１	40.0	51.0	Ｐ２	39.0	54.0	Ｐ３	45.0	64.0	Ｐ４	41.0	62.0	Ｐ５	37.0	68.0
Ｐ６	34.0	22.0	Ｐ７	37.0	43.0	Ｐ８	34.0	43.0	Ｐ９	46.0	50.0	Ｐ10	35.0	20.0
Ｐ11	35.0	53.0	Ｐ12	36.0	63.0	Ｐ13	38.0	54.0	Ｐ14	37.0	39.0	Ｐ15	35.0	48.0
Ｐ16	39.0	53.0	Ｐ17	40.0	24.0	Ｐ18	31.0	11.0	Ｐ19	30.0	36.0	Ｐ20	29.0	41.0
Ｐ21	28.0	20.0	Ｐ22	44.0	9.0	Ｐ23	(43.0)	8.0	Ｐ24	44.0	12.0	Ｐ25	36.0	10.0
Ｐ26	38.0	44.0												

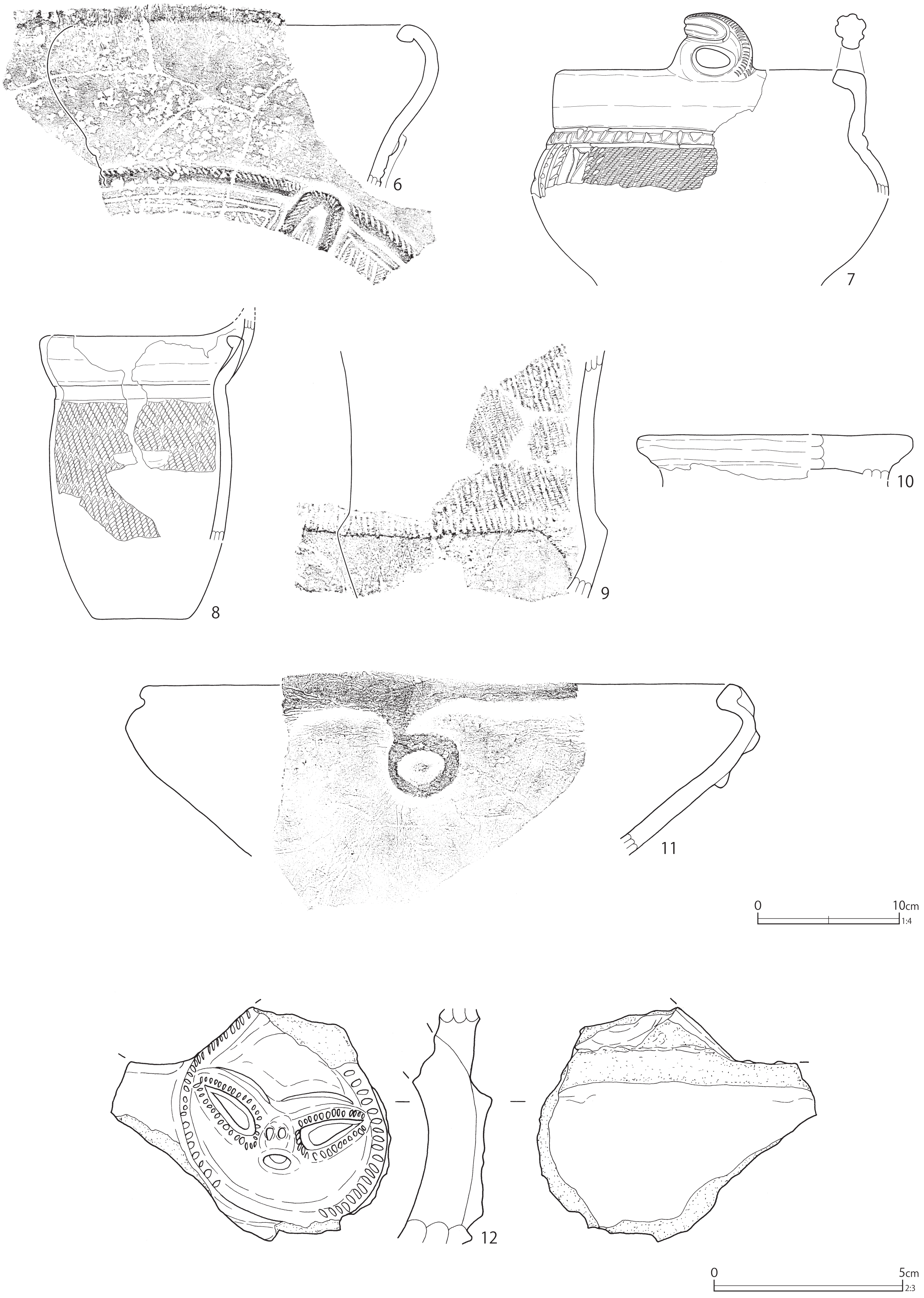
６は無文の口縁部が内湾して開く器形で、垂下する逆「Ｕ」字状隆帯で胴部を区画し、沈線の区画文を施文する。

７は口縁の無文部が立ち口縁部が下膨れ状に膨らむ器形で、口唇部に左向きの蛇頭把手が付く。地文に０段多条ＲＬ縄文を縦位施文する。

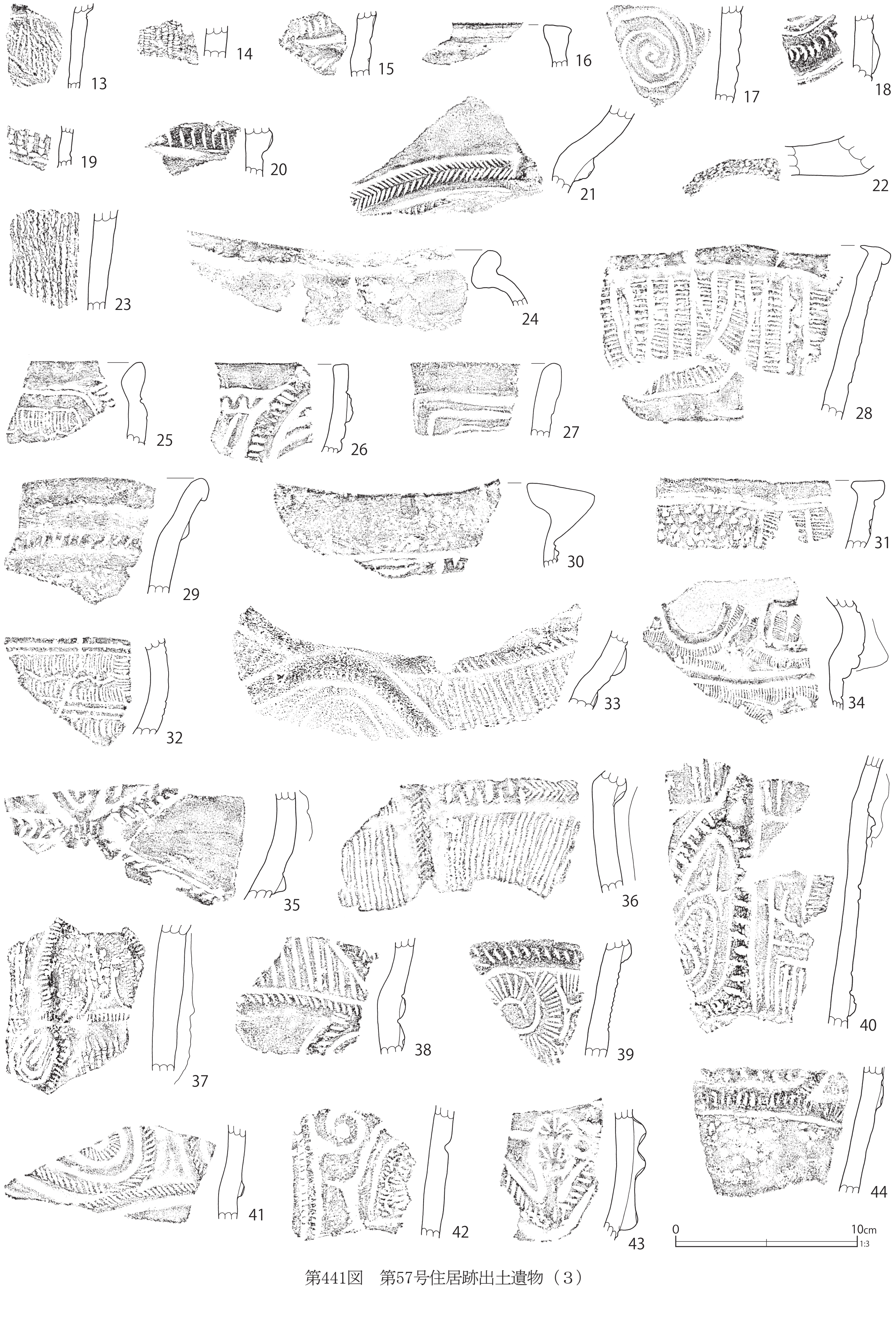
８は頸部で括れ、口縁部と胴部が張る器形の深鉢で、胴部に単節ＲＬ縄文を横位施文する。



第439図　第57号住居跡出土遺物（1）



第440図　第57号住居跡出土遺物（2）



第441図　第57号住居跡出土遺物（3）

第442図　第57号住居跡出土遺物（4）

第179表　第57号住居跡出土復元土器観察表（第439・440図）

番号	器高(cm)	口径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	備考
439-1	[12.8]	37.9	40.4	-	80%
2	[9.8]	-	(21.2)	-	30%
3	[34.8]	24.3	-	-	40%
4	[16.3]	-	-	-	10%
5	[5.5]	(19.2)	-	-	10%
440-6	[11.4]	(23.2)	-	-	20%
440-7	[13.0]	(18.4)	(25.2)	-	20%
8	[15.5]	(14.4)	-	-	60%
9	[17.5]	(18.6)	-	-	20%
10	[3.2]	(19.8)	-	-	20%
11	[12.1]	(41.0)	-	-	20%

第180表　第57号住居跡出土石器観察表（第442図）

番　号	器　種	分類	石　材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備　考
442 - 54	石鏃	Ⅰ2②	頁岩	[2.5]	[1.5]	0.4	0.3	
55	スクレイパー	Ⅰ1①イ	チャート	5.4	5.8	1.4	38.1	
56	打製石斧	Ⅲ2①イ	ホルンフェルス	14.0	4.8	1.9	119.2	
57	打製石斧	Ⅲ2①イ	ホルンフェルス	10.8	5.2	2.7	156.0	
58	打製石斧	Ⅱ2①イ	ホルンフェルス	7.4	3.4	1.8	65.3	
59	打製石斧	Ⅲ2①イ	ホルンフェルス	8.5	5.6	2.0	112.8	
60	打製石斧	Ⅲ1①イ	ホルンフェルス	9.0	6.9	2.1	118.9	
61	打製石斧	Ⅲ1①イ	ホルンフェルス	9.2	6.7	1.9	112.9	
62	打製石斧	Ⅲ2①イ	砂岩	8.9	4.6	1.8	70.6	
63	磨石	Ⅴ②イ	安山岩	[5.7]	[7.7]	3.6	238.7	

９は括れる胴部から張り出す底部で、地文に０段多条ＲＬの縦走縄文を施文する。

10は台形土器で、現存する上面部である。

11は口縁部が短く内湾して開く浅鉢で、胴部に低平隆帯で円形文を施文する。

破片では、25、26、30、33 ～ 36はキャリパー形深鉢形土器で、口縁部に刻み隆帯で楕円区画や渦巻文を構成するもので、30は幅広の口唇部を有する。32、34は沈線区画に沿って爪形文を施文し、32は波状沈線、34は三叉文を施文する。

27 ～ 29、37 ～ 44は円筒形深鉢で、28は短沈線を挟む並行沈線で「Ｕ」字状文を描き、31は胴部の区画内に刺突文を充填施文する。他は刻み隆帯で区画やモチーフを描き、余白に沈線の渦巻文や三叉文等を施文する。37は胴部に垂下する意匠文の末端であり、細かな２列の押引刺突文と、隆帯脇に刻みを施している。地文は０段多条ＲＬの縦走縄文である。42は半肉彫状の隆帯でモチーフを施文するものであり、37と合わせて、勝坂式中段階から新段階にかけてのものと思われる。他は勝坂式新段階のものであろう。

45、46は加曽利Ｅ式キャリパー形土器で、45は口縁部破片、46は２本隆帯でモチーフを描く胴部破片で、地文に撚糸文Ｌを施文する。加曽利ＥⅠ式の後半段階に比定されよう。

47 ～ 50は口縁部の内湾する浅鉢で、47、50は低平隆帯で渦巻文や円形文を施文する。

51 ～ 53は底部破片で、51は撚糸文Ｌ、52は単節ＲＬ縦走縄文を施文する深鉢の底部である。53は浅鉢の底部と思われる。

第440図12はＰ12から出土した、人面付き土器の顔である。口縁部の表に付く顔と思われ、頭部が突起状に尖るものと思われる。顔の輪郭である隆帯の縁に細かな刻みを施し、切れ上がった目、刺突文を施した低い鼻、丸い口、勝坂式期の特徴を良く表しているものと思われる。

石器類は54 ～ 63が出土した。

54は石鏃で、両脚部を根元から欠いている。

55は粗粒の石材を素材として用いたスクレイパーである。上部が抉れているようにも見受けられるが、抉りが浅く摘まみ部と判断し難いため、スクレイパーとした。

56～62は打製石斧である。56～58が短冊形を呈し、その他は撥形を呈する。56の片刃を除き、刃部は全て両刃である。

63は磨石の破片である。

第58号住居跡（第443図～第463図）

Ｉ－17・18区に位置する。第116号土壙、第129号土壙と重複するが、第116号土壙の方が古い。第129号土壙との関係は不明である。住居跡の平面形は南北にやや細長い楕円形で、規模は長径5.00m、短径4.70m、深さ0.25mである。

壁溝は検出されなかった。

柱穴は９基検出された。いずれも浅く、主柱穴になり得るか疑問が残る。主柱穴を抽出すると、Ｐ１、２、４、５、８の５基が想定され、５本主柱の住居跡になるものと思われる。

主柱穴の深さは、Ｐ１＝12㎝、Ｐ２＝30㎝、Ｐ４=20㎝、Ｐ５＝15㎝、Ｐ８＝12㎝である。

炉跡及び埋甕は検出されなかった。

本遺構は、当初吹上パターン状に多量の遺物が出土する住居跡とした調査を始めた。表土除去の段階から、この遺構の周辺で多量の遺物が出土していた。表土のすぐ下層の包含層から遺物が多量に出土することから、表土の掘削を浅くして盛土状に残して調査を行った。上部から破片等の遺物を整理し、復元可能な土器群が累々と出土する状況になってから、改めてその分布範囲や、下部の遺構について精査を行った。その結果、本住居跡としたプランを確認したが、地山との境界も不明瞭で深い掘り込みもないものであった。中央部付近に炉の存在を期待しつつ調査を進めたが、結果的に炉や周溝等の住居跡付属施設を検出できなかった。

本来ならば住居跡としての扱いを止めるべきであったが、多量の遺物がまとまって出土しており、下部に浅い掘り込みが確認されたことから、住居跡としたままで調査を行った。

土器を中心とした遺物は、いわゆる吹上パターンとは逆の状態で、器形の復元できる土器群が盛り上がって集積している状態であった。換言すれば土器塚のような出土状態であった。これらの土器群はみな被熱しており、表面が荒れて風化しているものであった。さらに、これらの土器群の上に多くの浅鉢を逆位に被せて、蓋をしているような出土状況であった。

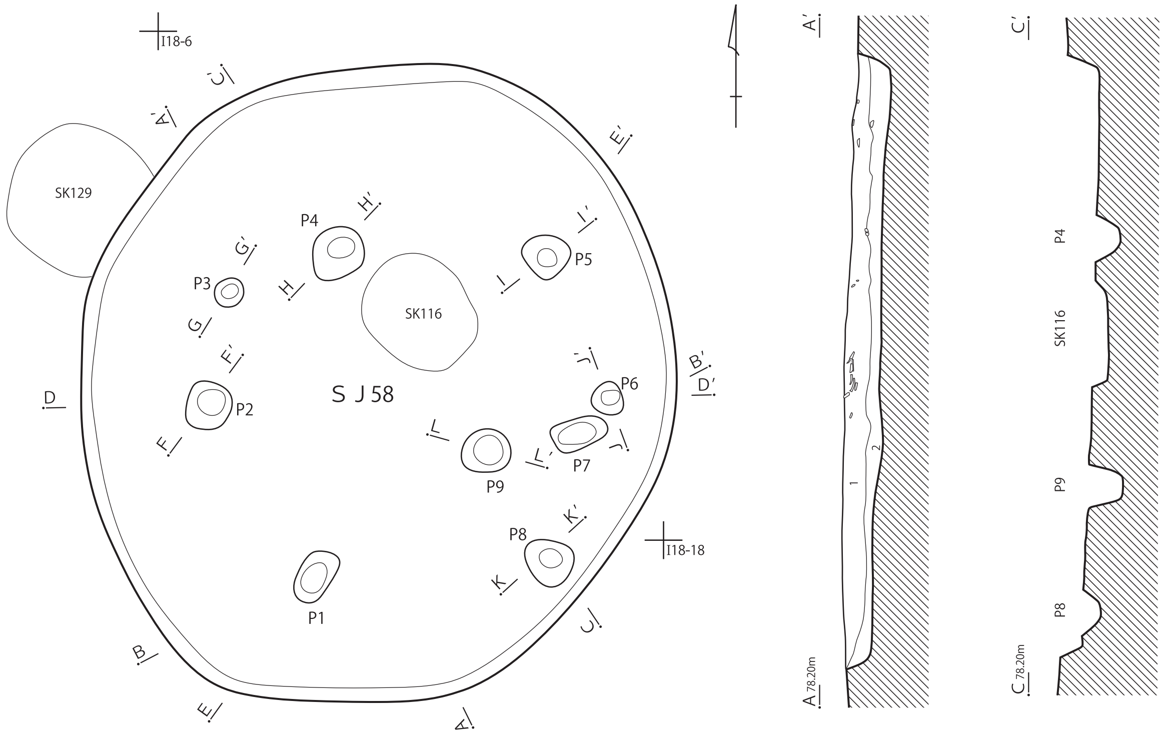
復元された土器群は、通常の住居跡から出土するものと趣を異にしており、深鉢形土器や浅鉢形土器にしても大形のものが多い。この場所が饗宴の場所か、もしくは使用した土器群の廃棄の場所であったかは定かではないが、通常使用するものより桁外れに大きい土器を使用して、何らかの儀式または祭祀を行っていた可能性は高い。

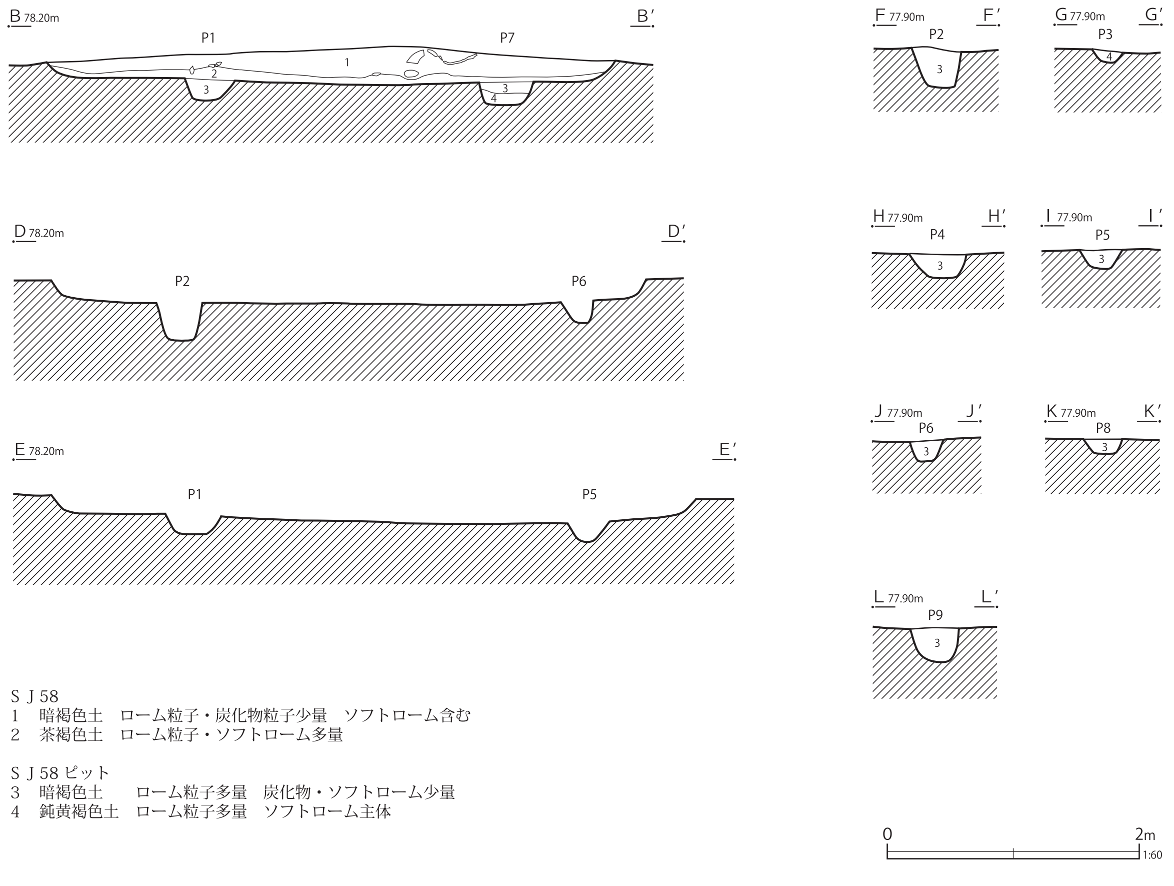
本遺構の時期は、出土遺物から勝坂式中段階から新段階にかけての時期に比定されるものと思われる。

遺物は第448図１～第463図121の土器類、石器類が出土した。土器類はほとんどが強く被熱しており、表面がとろけているものが多い。

１～８は口縁部文様帯を有するキャリパー形の深鉢である。１は本遺跡出土最大の深鉢で、底部と裏側半分程を欠損するが、把手まで含めて推定80数㎝を測る。口縁部文様帯、頸部無文帯、胴部文様帯、胴部無文帯、底部文様帯の横帯５帯構成で、胴部はさらに２帯に区分されており、合計６帯の横帯構成と認識される。

口唇部に山形の眼鏡状把手を有し、口縁部文様帯に全体構成は不明瞭であるが、刻み隆帯の渦巻文や楕円状区画文を連携するモチーフを構成し、集合沈線を充填施文する。山形の眼鏡状把手には、向かって右側に蛇体の蛇行隆帯を垂下している。頸部無文帯は幅狭に区画されており、その下部に幅広の胴部文様帯を設置するが、その上部に区画される幅狭楕円区画文帯が、本来の頸部文様帯に相当するものと考えられる。胴部の幅広な文様帯

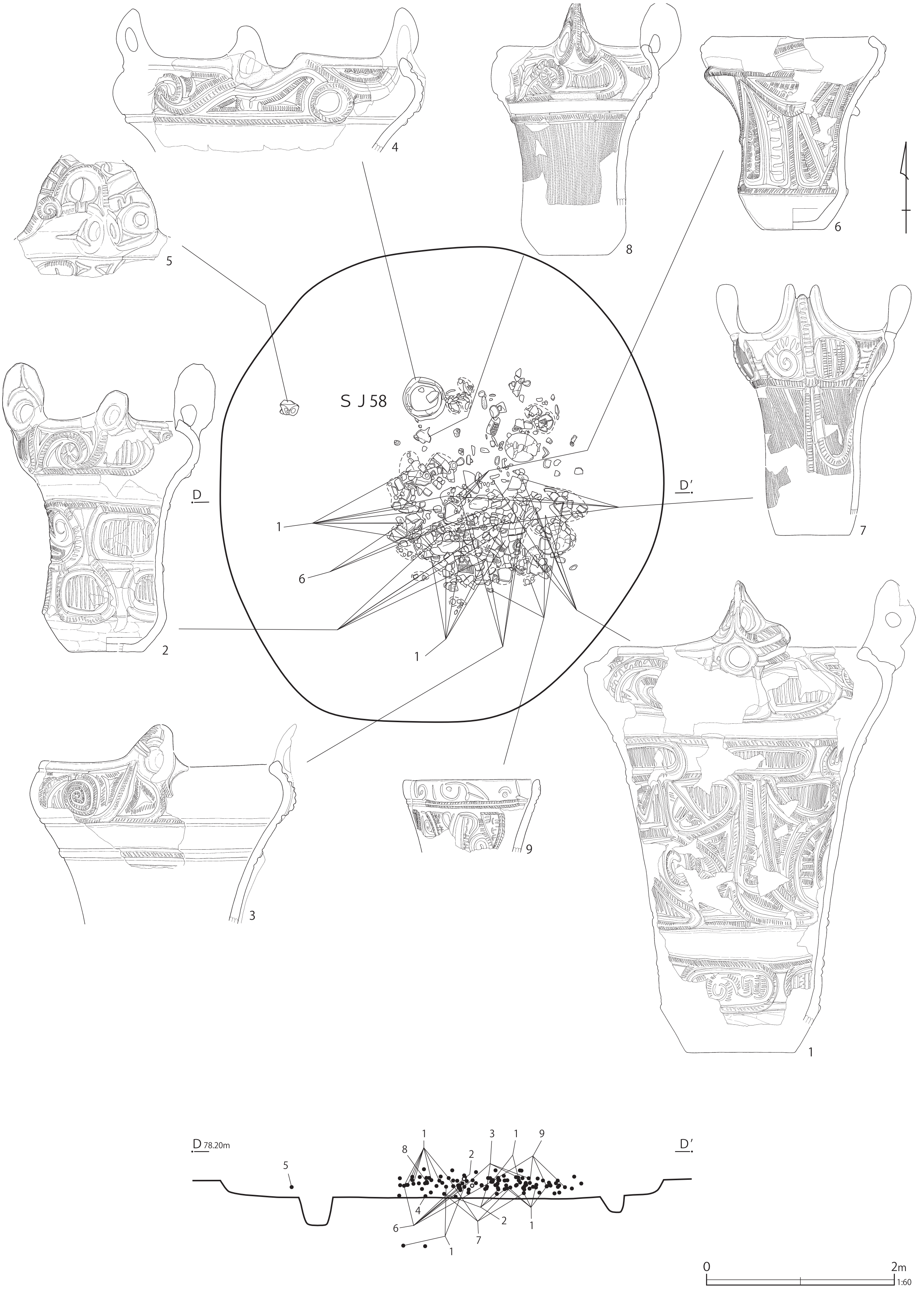




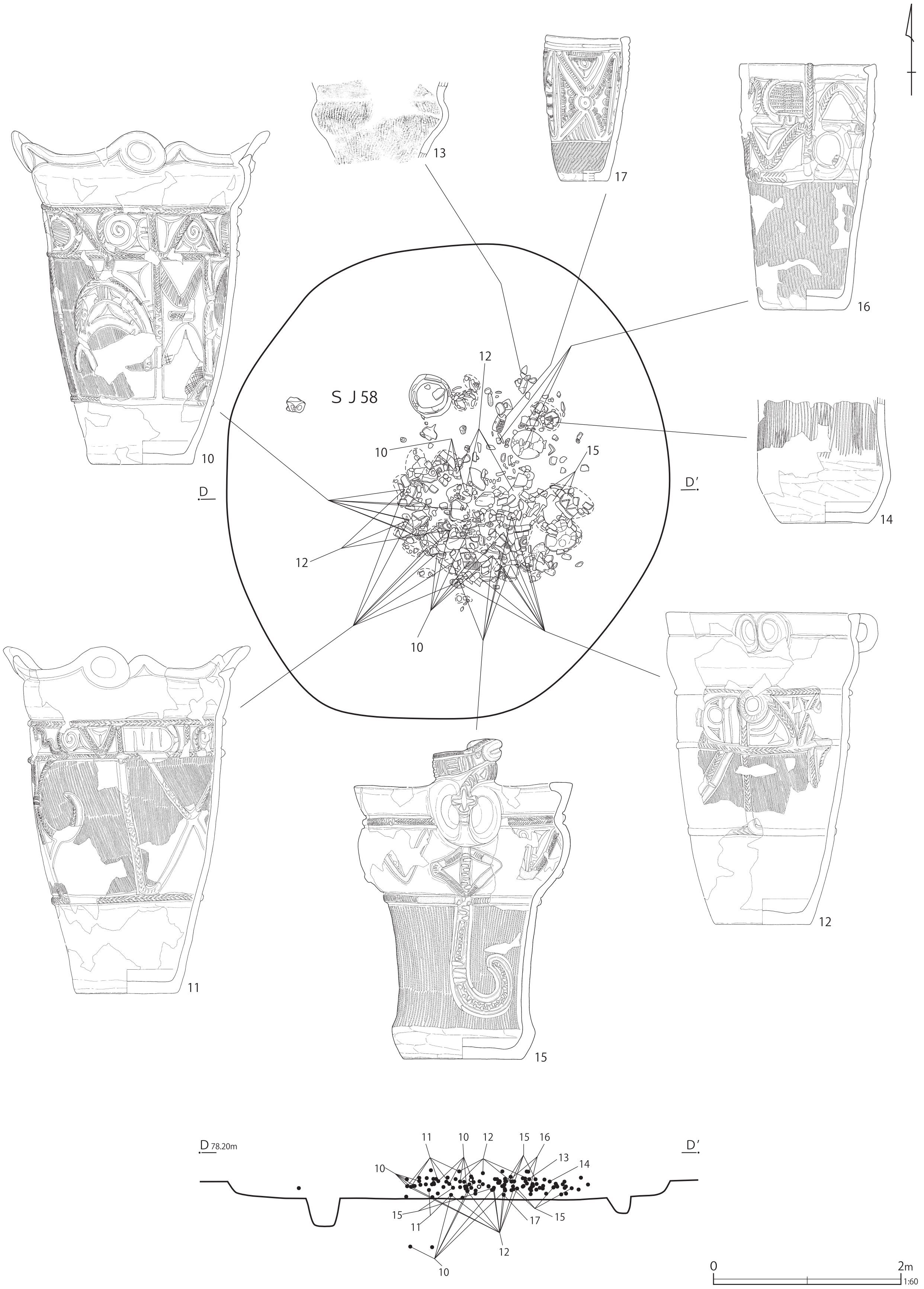
S J 58
1　暗褐色土　ローム粒子・炭化物粒子少量　ソフトローム含む
2　茶褐色土　ローム粒子・ソフトローム多量

S J 58 ピット
3　暗褐色土　　ローム粒子多量　炭化物・ソフトローム少量
4　鈍黄褐色土　ローム粒子多量　ソフトローム主体

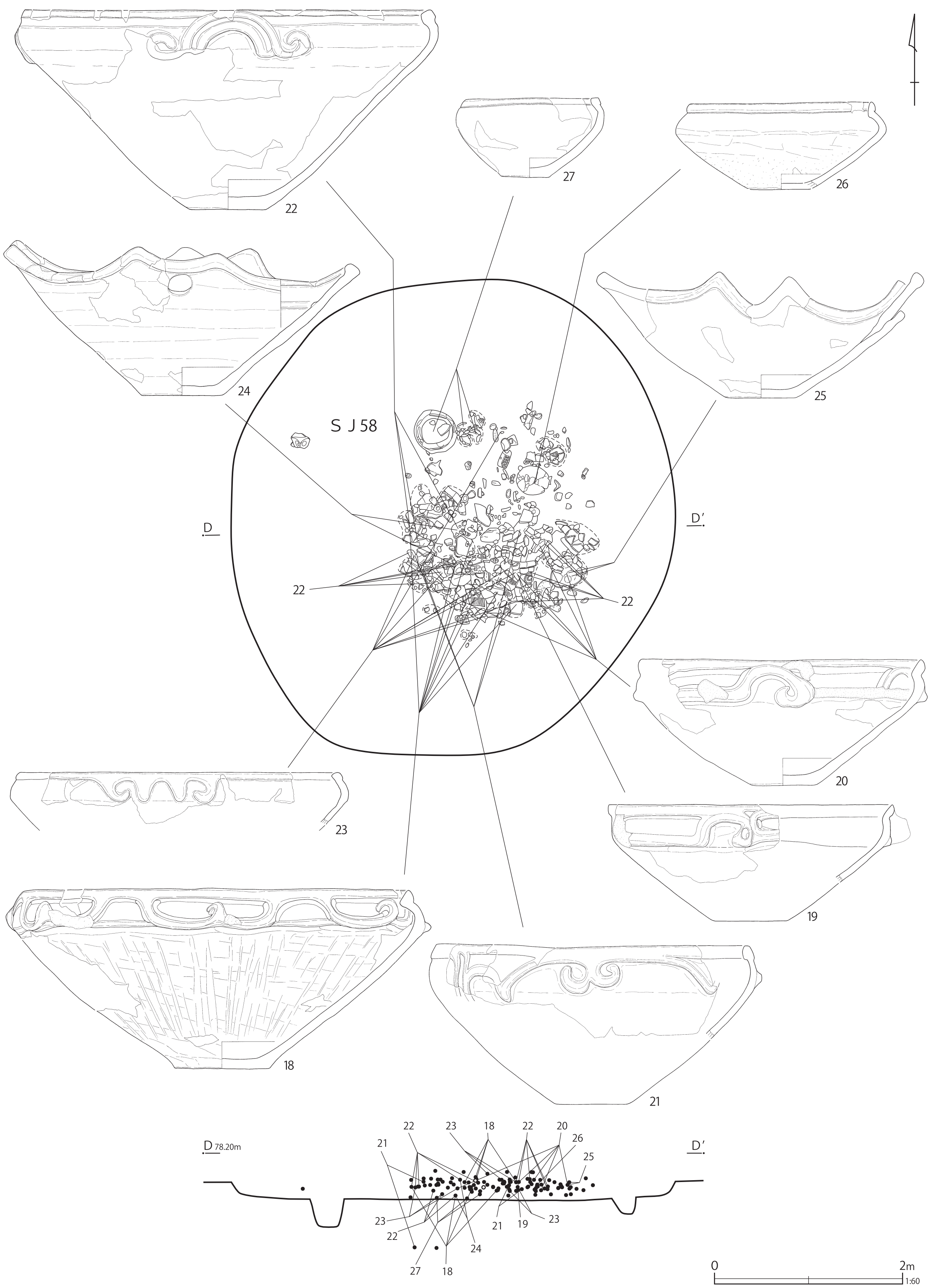
第443図　第58号住居跡



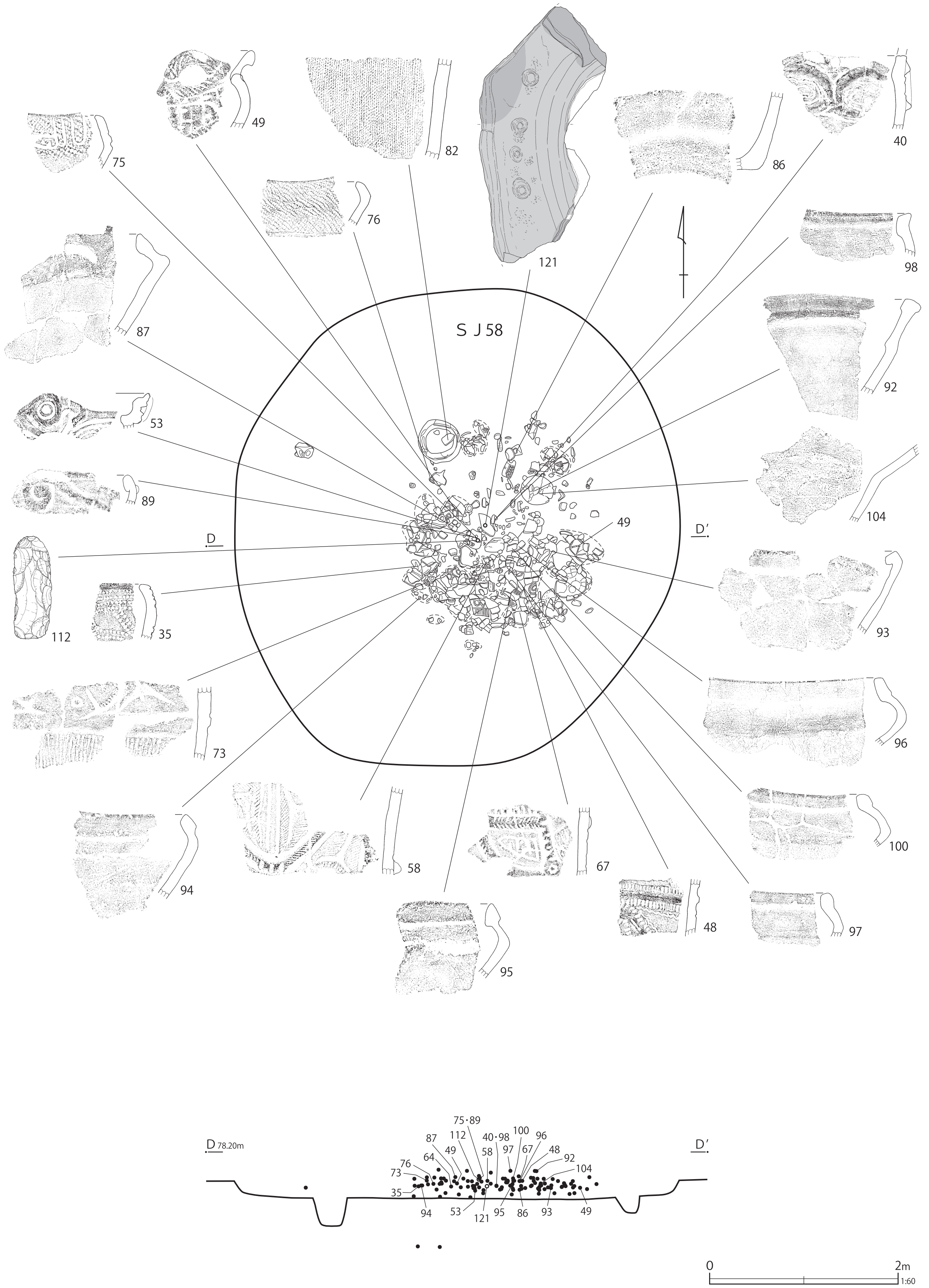
第444図　第58号住居跡遺物出土状況（１）



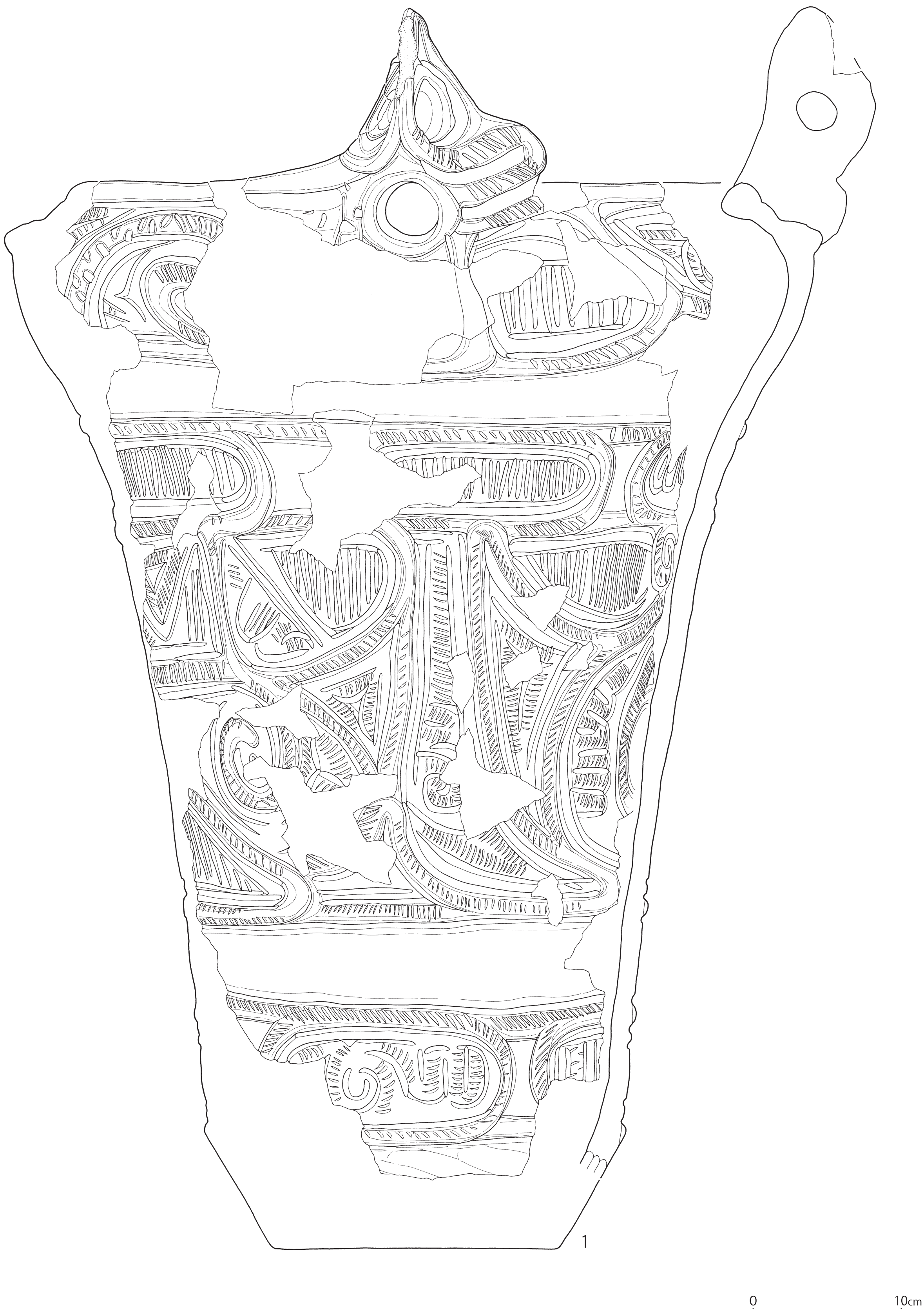
第445図　第58号住居跡遺物出土状況（2）



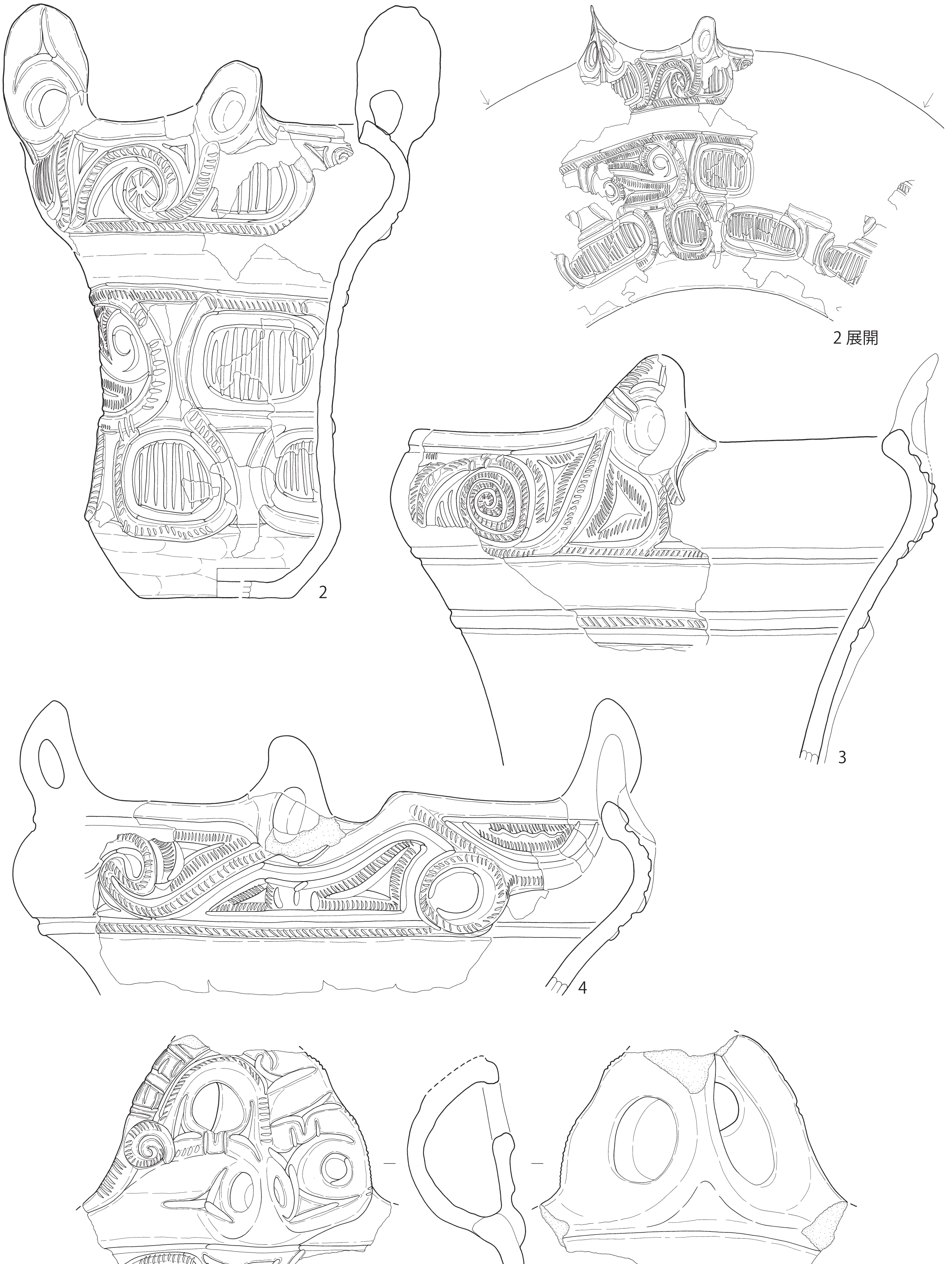
第446図　第58号住居跡遺物出土状況（3）



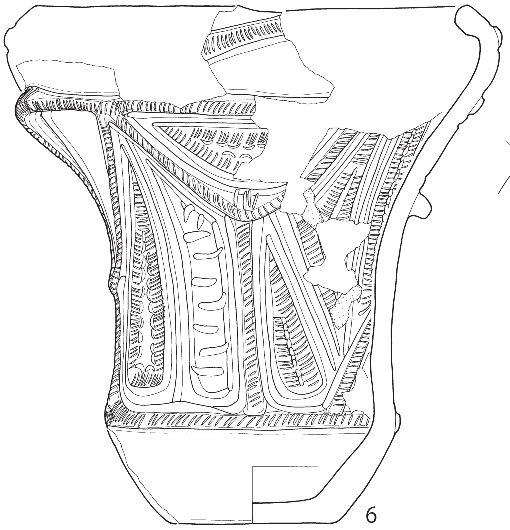
第447図　第58号住居跡遺物出土状況（４）



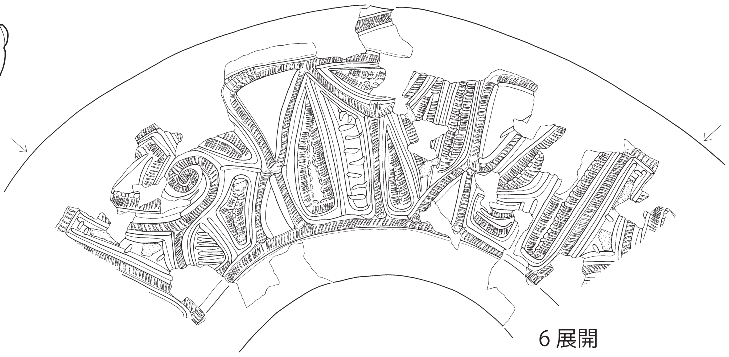
第448図　第58号住居跡出土遺物（1）



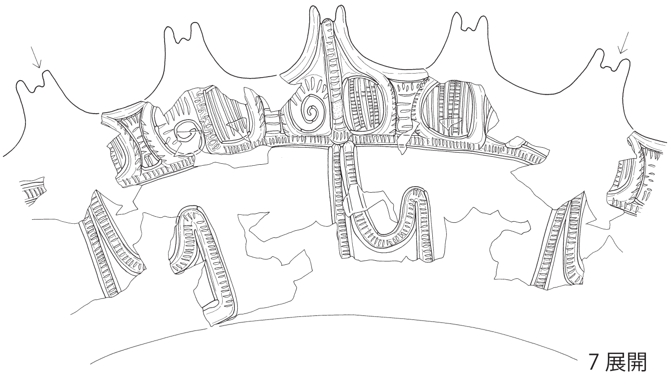
第449図　第58号住居跡出土遺物（2）



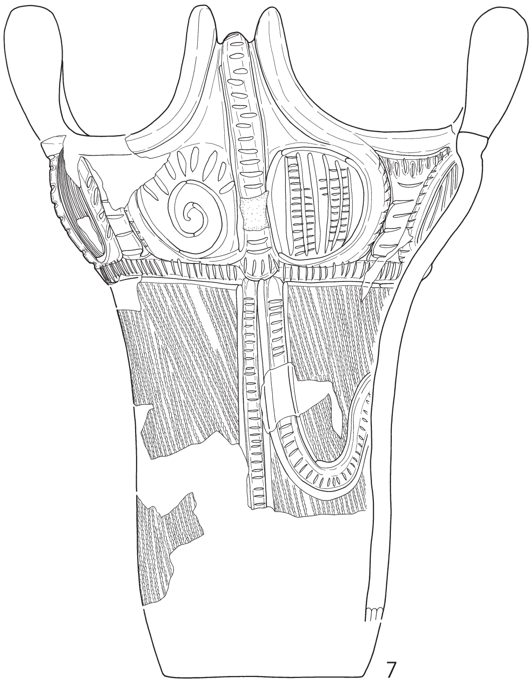
6



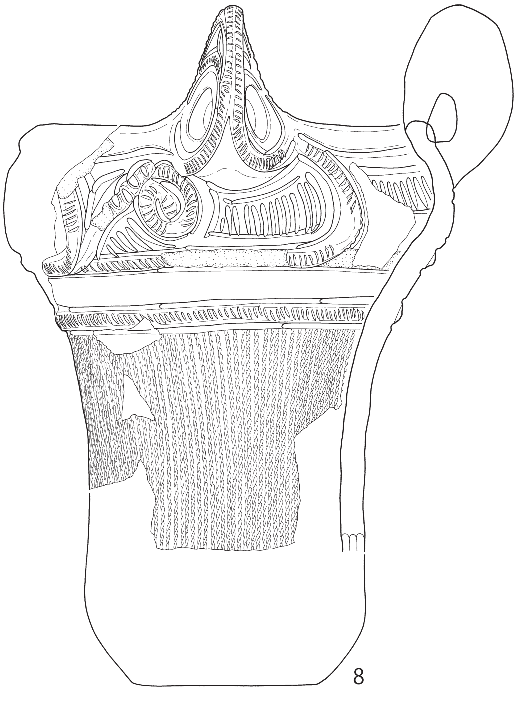
6 展開



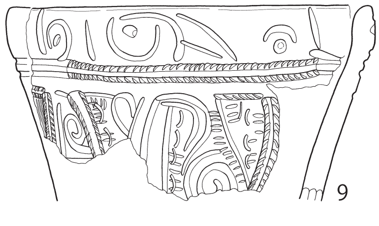
7 展開



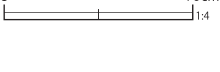
7



8

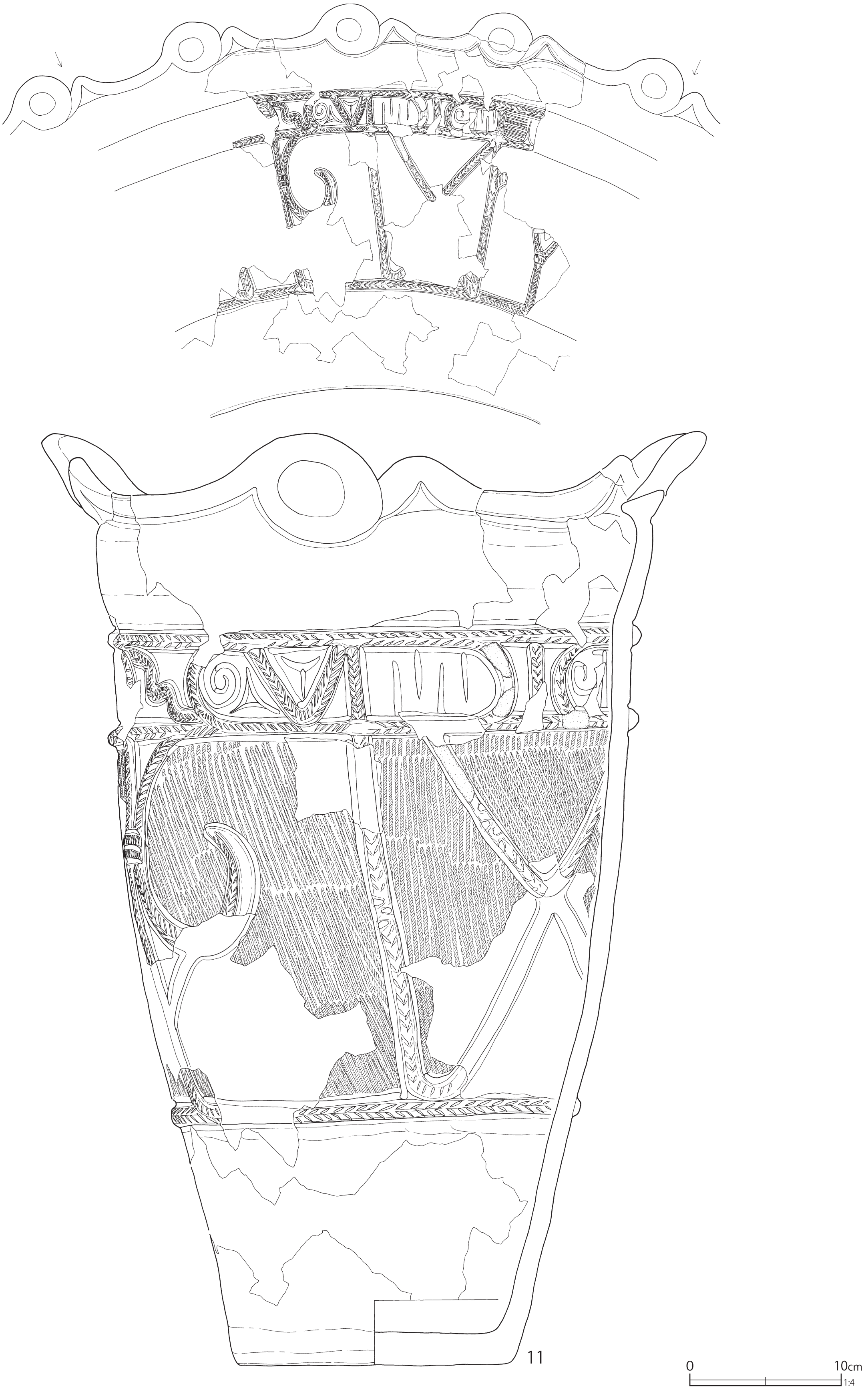


9



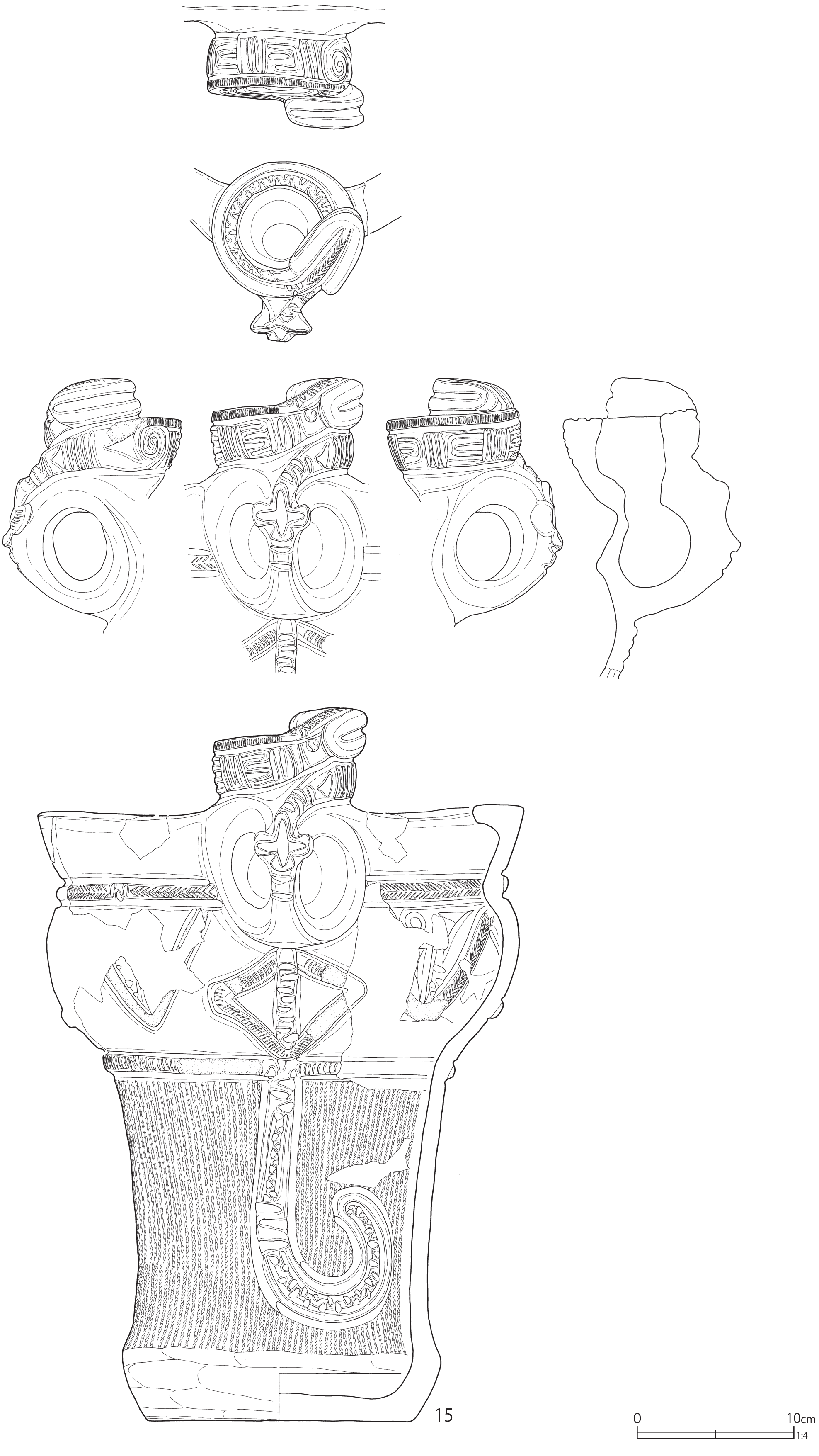
第450図　第58号住居跡出土遺物（3）

第451図　第58号住居跡出土遺物（４）

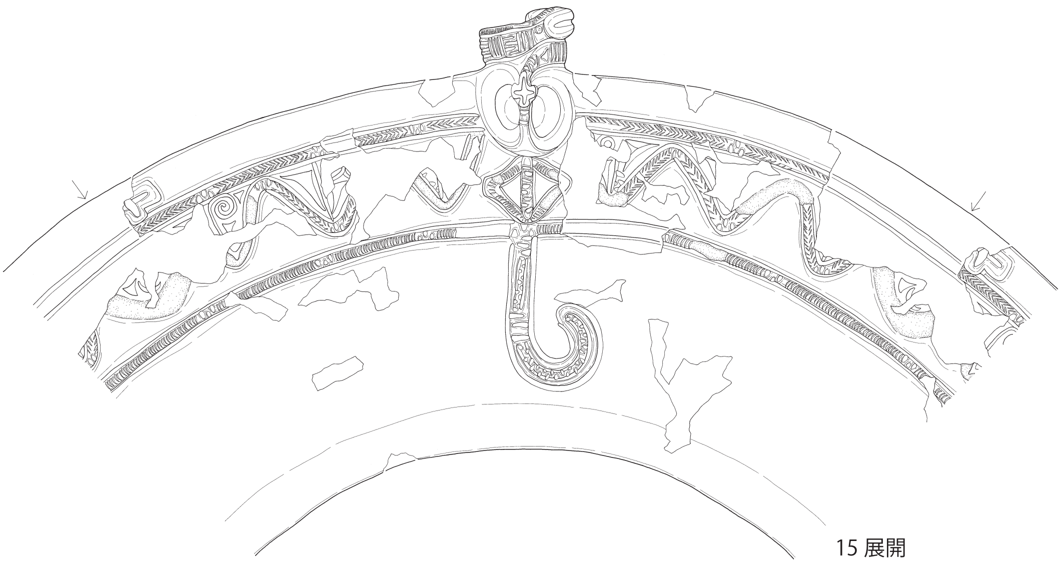


第452図　第58号住居跡出土遺物（5）

第453図　第58号住居跡出土遺物（6）



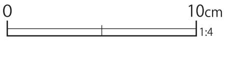
第454図　第58号住居跡出土遺物（７）



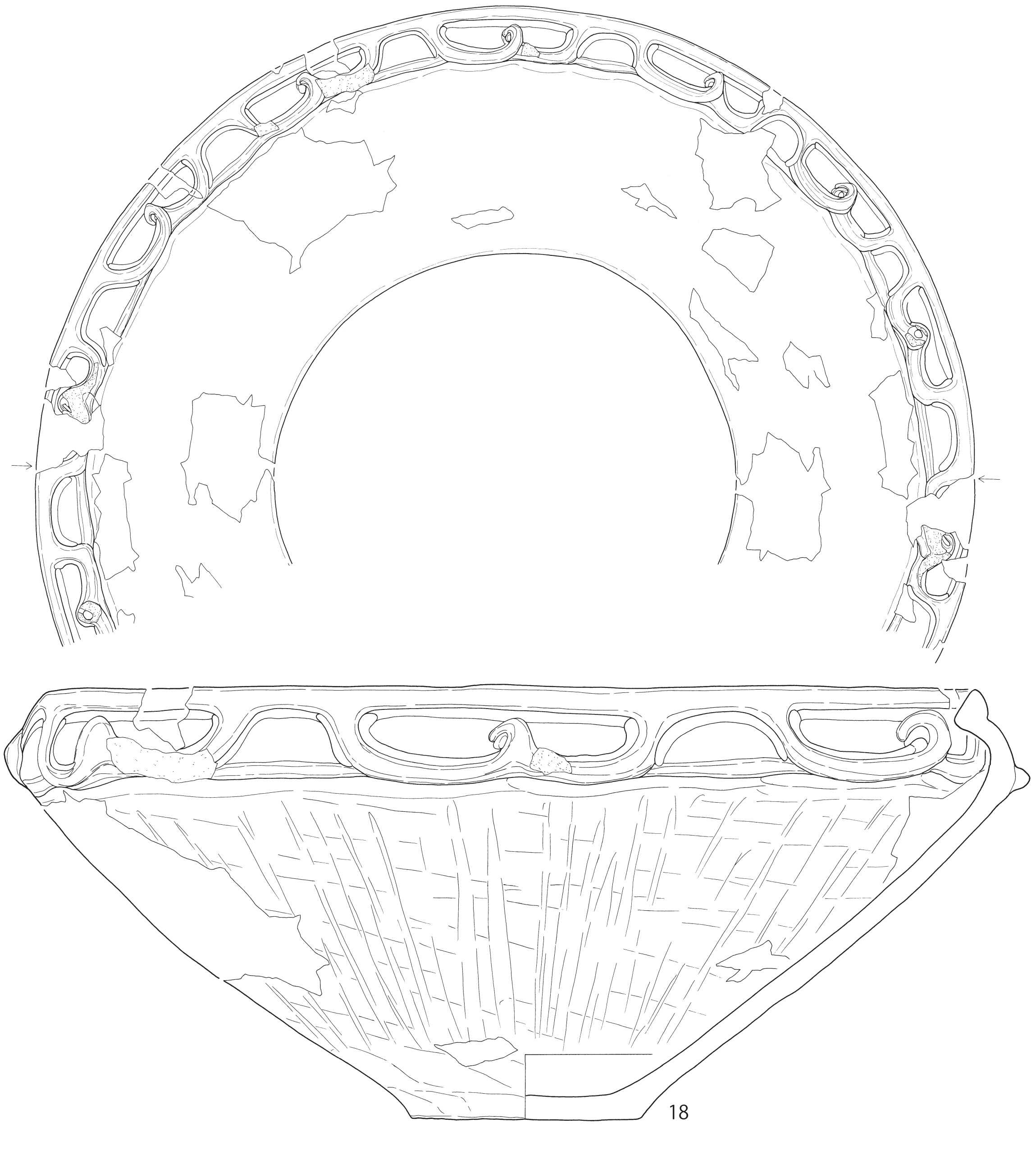
15 展開

16

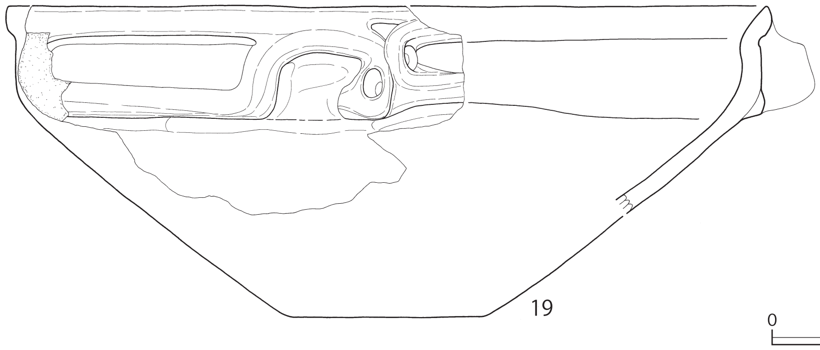
17



第455図　第58号住居跡出土遺物（8）



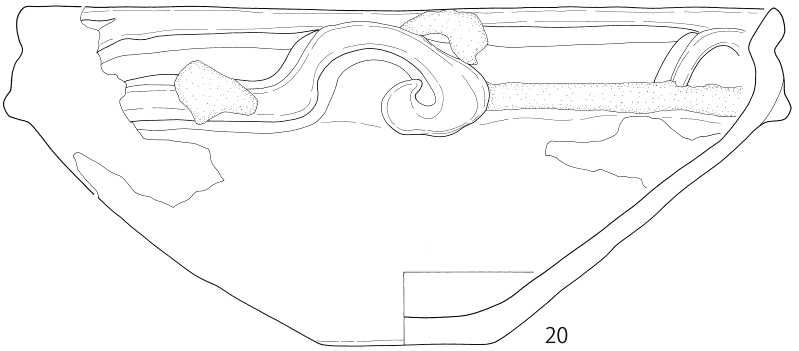
18



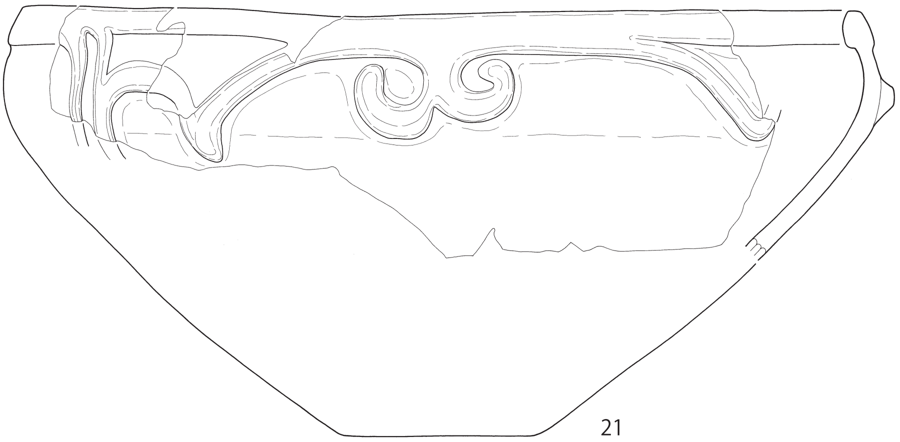
19

0 10cm 1:4

第456図　第58号住居跡出土遺物（9）



20

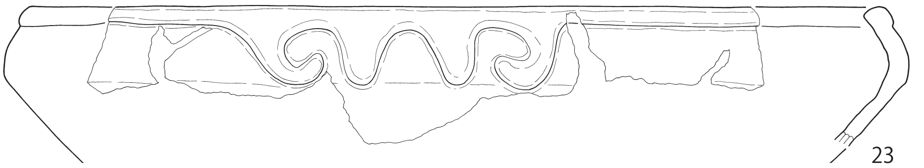


21

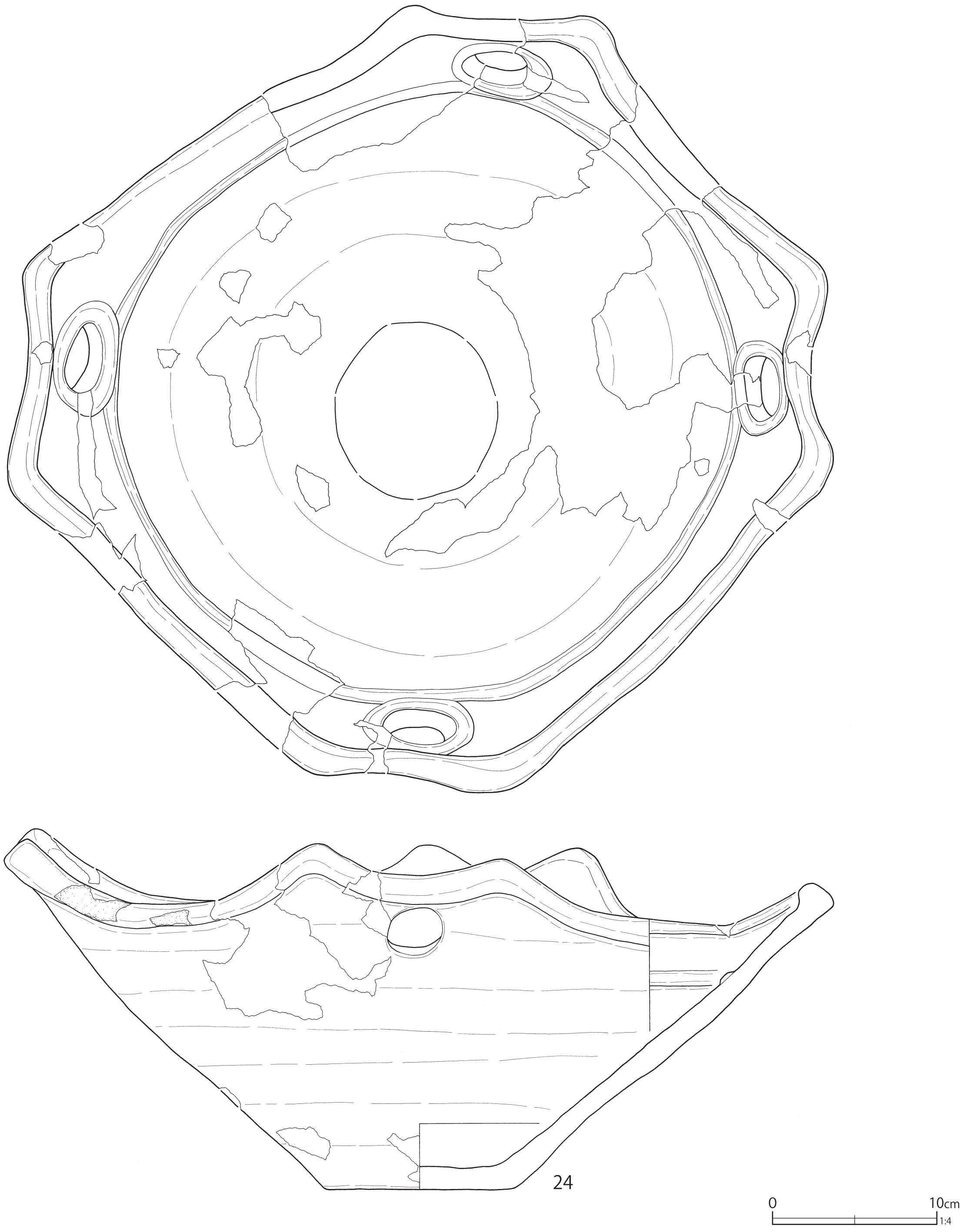
22

0　10cm
1:4

第457図　第58号住居跡出土遺物（10）

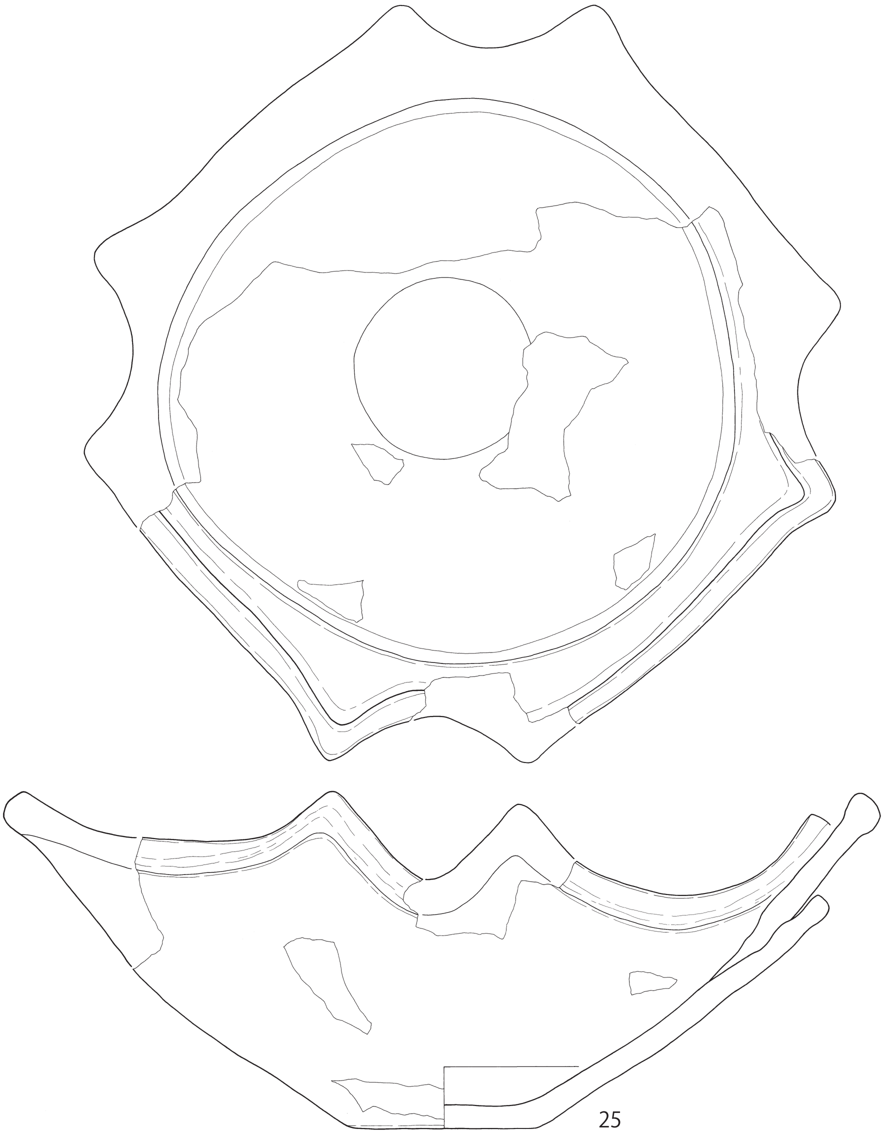


23

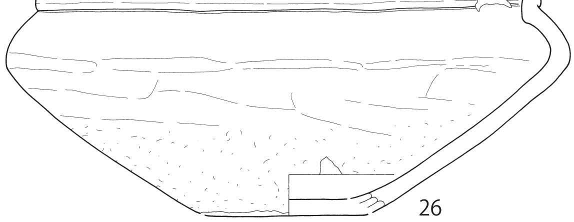


24

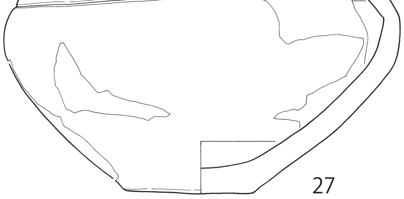
第458図　第58号住居跡出土遺物（11）



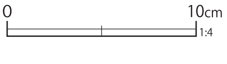
25



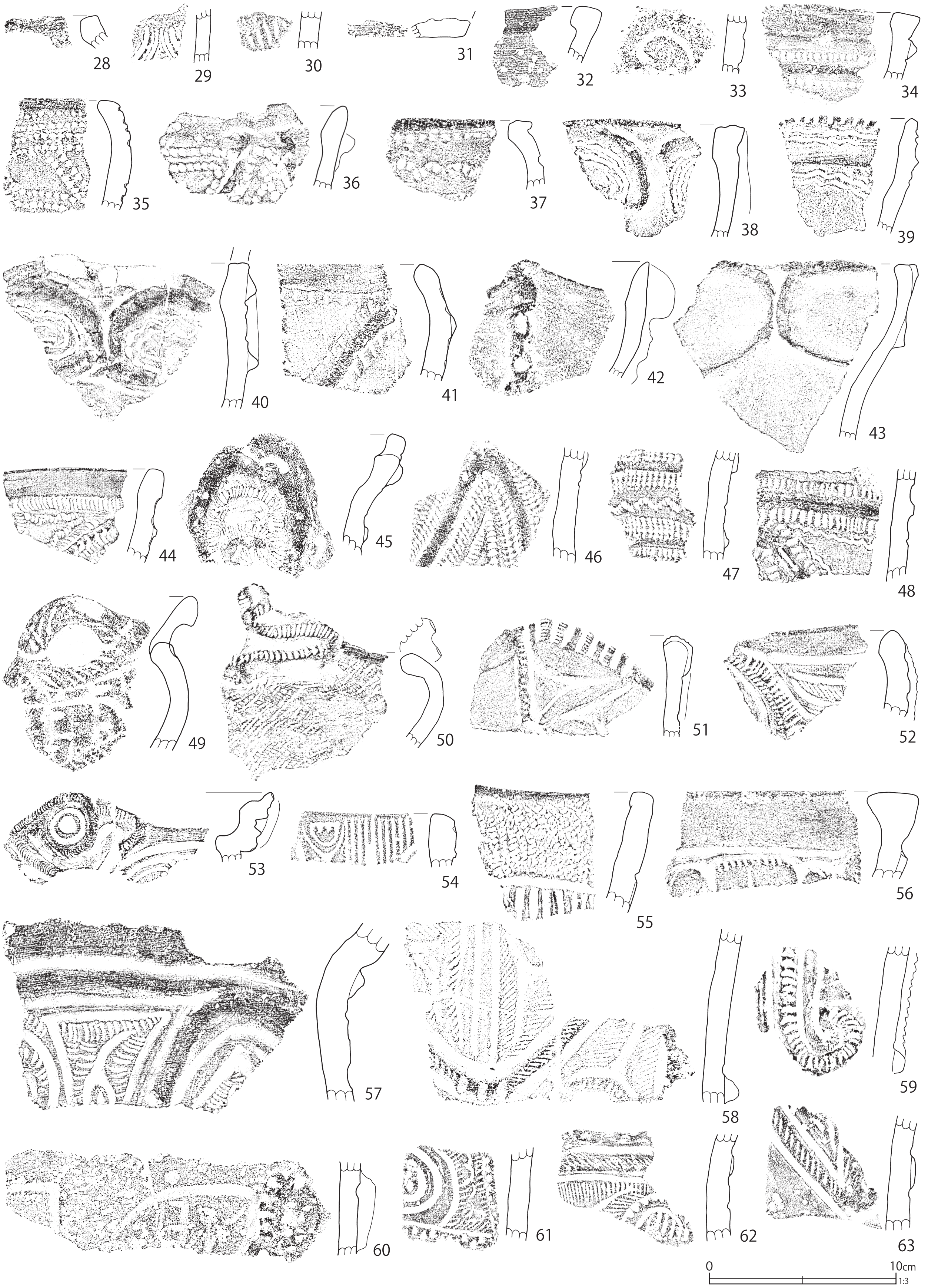
26



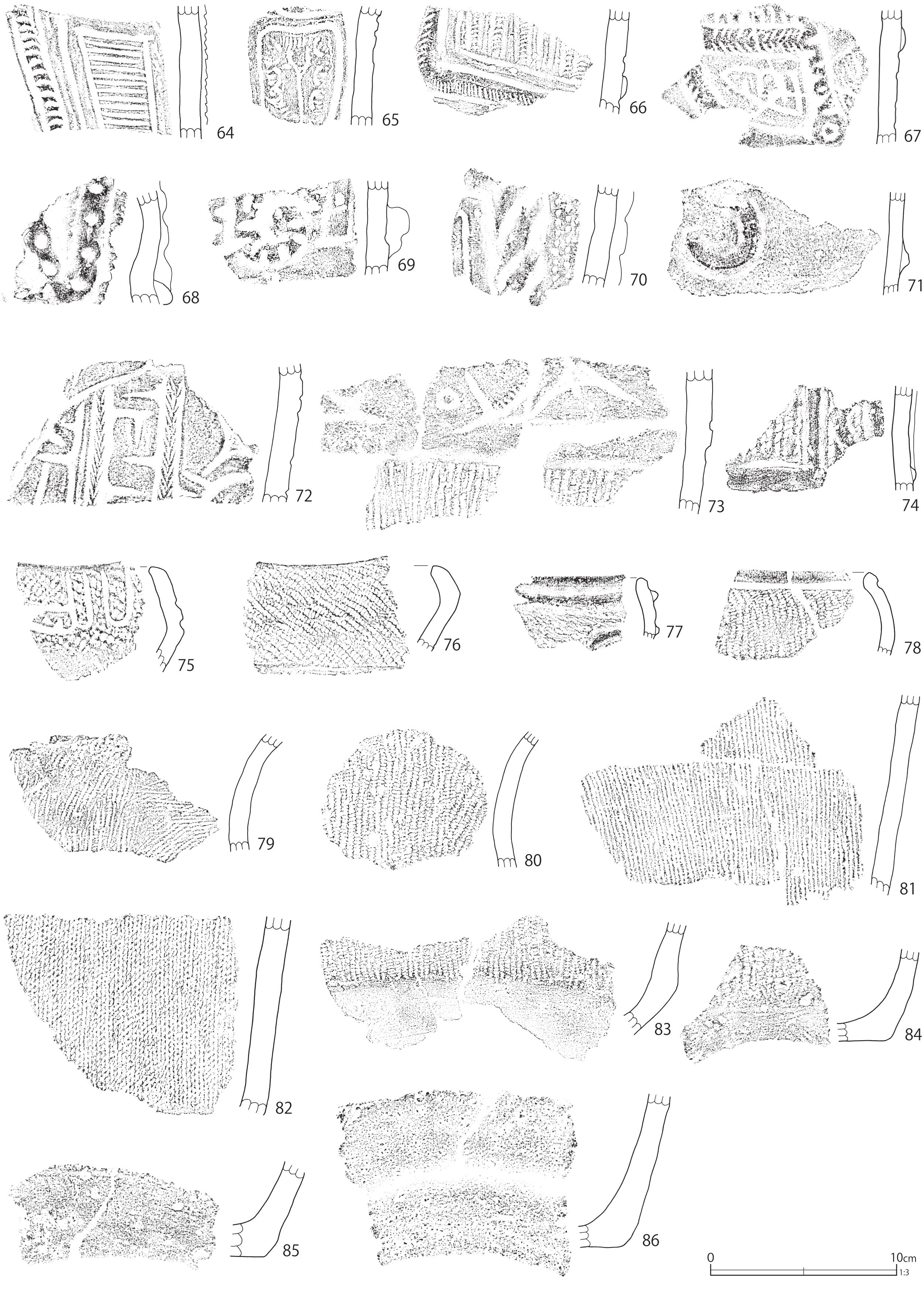
27



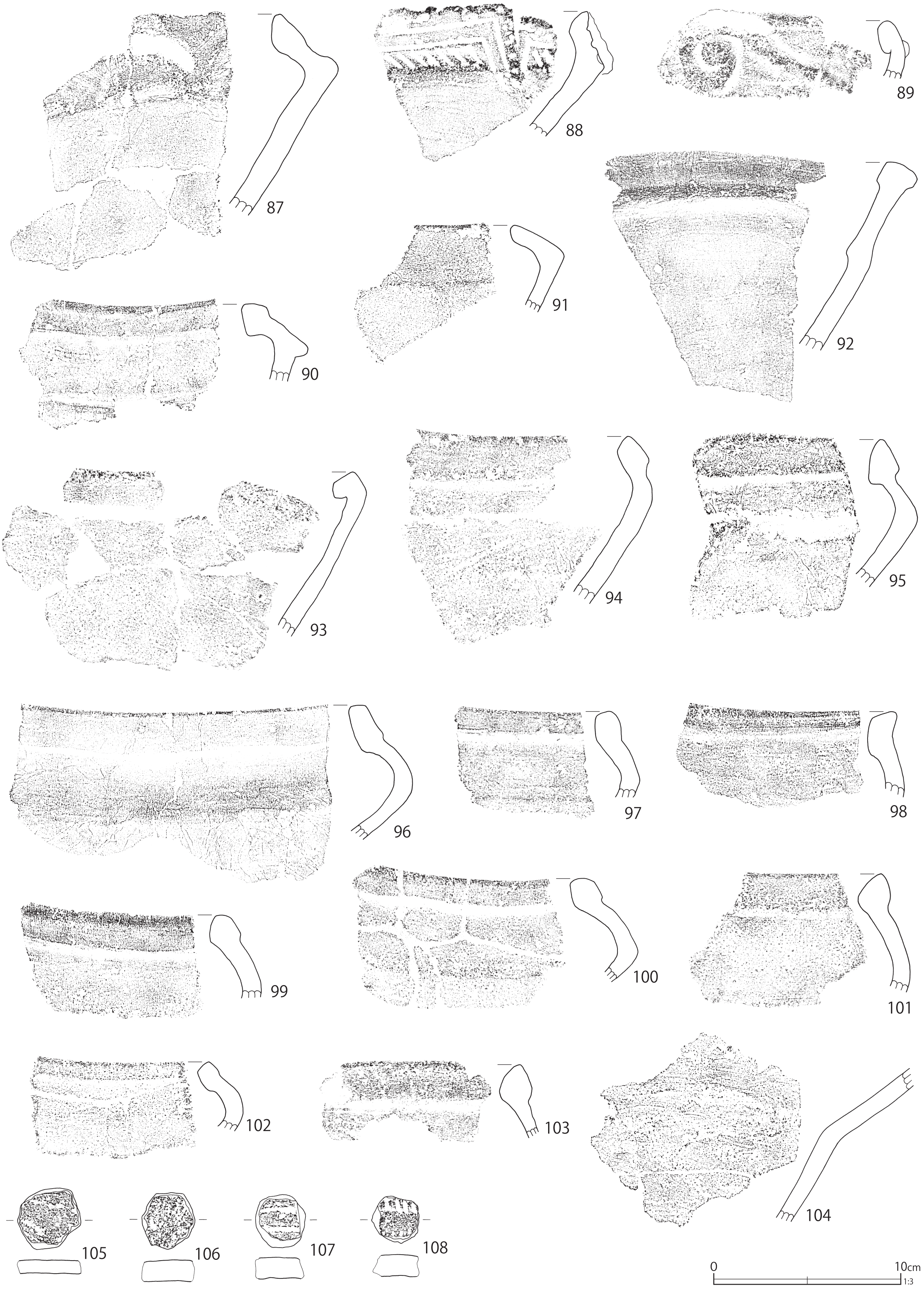
第459図　第58号住居跡出土遺物（12）



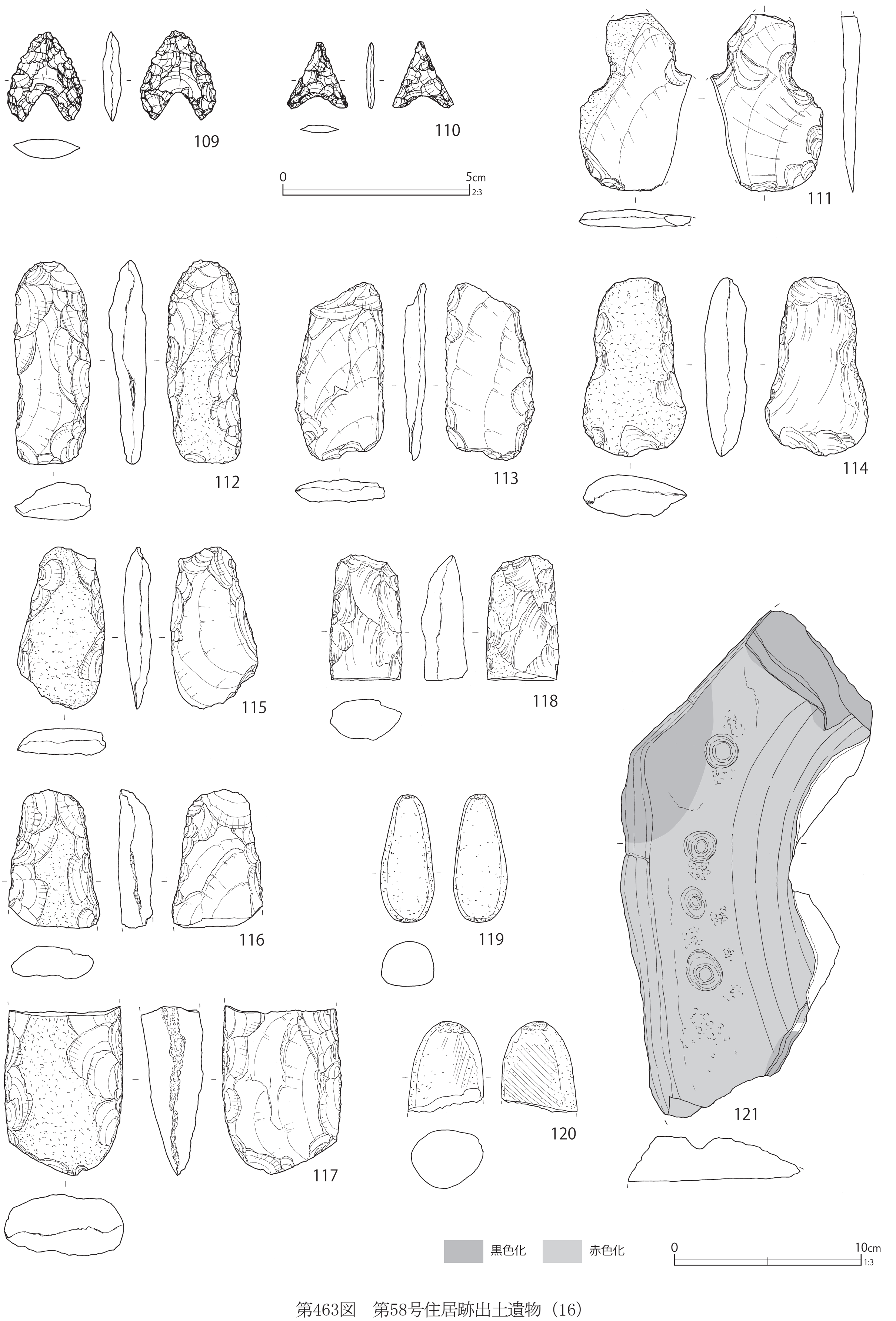
第460図　第58号住居跡出土遺物（13）



第461図　第58号住居跡出土遺物（14）



第462図　第58号住居跡出土遺物（15）



第463図　第58号住居跡出土遺物（16）

第181表　第58号住居跡柱穴計測表（第443図）

ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)
Ｐ１	45.0	12.0	Ｐ２	40.0	30.0	Ｐ３	25.0	10.0	Ｐ４	48.0	20.0	Ｐ５	40.0	15.0
Ｐ６	26.0	16.0	Ｐ７	45.0	20.0	Ｐ８	40.0	12.0	Ｐ９	40.0	26.0			

第182表　第58号住居跡出土復元土器観察表（第448 ～ 459図）

番号	器高(cm)	口径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	備考
448-1	[79.1]	(44.6)	-	-	50%
449-2	[40.9]	(20.4)	(25.8)	10.5	60%
3	[20.4]	(33.6)	-	-	50%
4	[13.9]	(39.2)	-	-	20%
5	[15.6]	-	-	-	10%
450-6	27.4	-	(26.4)	8.3	70%
7	[31.8]	(23.5)	-	-	70%
8	[28.9]	(19.6)	(23.8)	-	60%
9	[10.3]	(19.4)	-	-	30%
451-10	59.1	46.0	-	18.1	80%
452-11	[59.3]	(38.2)	-	17.8	50%
453-12	(55.0)	(34.2)	-	16.8	50%
13	[10.6]	(19.3)	-	-	20%
14	[17.8]	-	18.9	12.4	40%

番号	器高(cm)	口径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	備考
454･455-15	45.6	30.9	-	16.8	80%
455-16	35.0	18.9	-	11.3	70%
17	20.8	11.2	-	6.6	80%
456-18	25.6	54.6	-	13.4	80%
19	[11.0]	(40.4)	-	-	30%
457-20	17.8	39.6	-	9.0	60%
21	[13.1]	(44.2)	-	-	40%
22	28.3	57.6	-	10.6	50%
458-23	[72.0]	(44.8)	-	-	50%
24	21.9	47.6	50.3	11.4	70%
459-25	17.8	(39.8)	-	9.8	40%
26	[12.0]	25.8	-	-	70%
27	11.3	18.8	-	6.7	80%

第183表　第58号住居跡出土石器観察表（第463図）

番　号	器　種	分類	石　材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(ｇ)	備　考
463 － 109	石鏃	Ⅰ2①	黒曜石	2.4	2.1	0.5	1.8	
110	石鏃	Ⅰ2①	チャート	1.7	1.7	0.2	0.5	
111	大形粗製石匙	Ⅰ1②イ	ホルンフェルス	9.4	6.0	1.0	60.5	
112	打製石斧	Ⅱ2①イ	ホルンフェルス	10.8	4.1	2.0	96.0	
113	打製石斧	Ⅱ2①イ	頁岩	9.5	4.8	1.2	64.5	
114	打製石斧	Ⅲ2①イ	ホルンフェルス	9.5	5.5	2.2	147.5	
115	打製石斧	Ⅲ2①イ	砂岩	8.6	4.7	1.4	68.0	
116	打製石斧	Ⅲ2②イ	砂岩	[7.4]	4.9	1.9	87.6	
117	打製石斧	Ⅴ②イ	砂岩	[9.0]	6.3	[3.3]	229.4	
118	打製石斧	Ⅱ2②イ	ホルンフェルス	[6.7]	3.9	2.5	82.9	
119	敲石	Ⅲ3①イ	砂岩	6.9	2.9	2.4	57.9	
120	敲石	Ⅲ1②イ	砂岩	[4.8]	[4.0]	[3.4]	77.3	
121	石皿	Ⅳ②ア	緑泥片岩	[27.0]	[13.5]	[2.7]	966.4	一部赤色・黒色化

には縦位区画文と渦巻文をパネル状文風に入り組ませて区画しており、区画内に爪形文を伴う三叉文、集合沈線文、爪形文を伴う交互差し切り文等を充填施文する。土器が大きいため、文様も大振りな構成となっている。底部文様帯は楕円区画文帯となり、区画内に渦巻文と連結する蛇行爪形文などを施文している。

２は口唇部に大きな山形眼鏡状把手と小さな耳状把手を有し、口縁部文様帯、頸部無文帯、胴部文様帯の構成であり、口縁部文様帯には１と同様な刻み隆帯による渦巻文と楕円区画文等を繋ぐモチーフを施文する。区画内の充填文は集合沈線文と、三叉文である。胴部はやや幅広な楕円区画文の２帯構成であり、上段では２本沈線で描く渦巻文と、爪形文を伴う三叉文を対向に施文して余白を埋める区画がある。下段には円形状区画１箇所と、長楕円区画２箇所の３単位構成の区画文を施文している。これらも、対称性を崩す構成となろう。

３、４も口唇部に耳状把手を有し、口縁部に隆帯の渦巻文と区画文を繋げるモチーフを施文して

いる。規格性の強いモチーフ構成である。

５は非常に大きな山形の眼鏡状把手であり、正面の眼鏡状把手の右脇に、デフォルメした蛇行隆帯文を垂下している。

６は口縁部文様帯と胴部文様帯の２帯構成で、口縁に斜行する隆帯文が見られるが、構成は不明である。幅広な胴部文様帯には隆帯の渦巻文のモチーフ構成の間に、縦位のパネル状区画文を嵌め込んで一体化したようなモチーフが描かれている。縦位区画文内には蓮華状文や刺突文列、細長い三叉文等を施文する。区画文内を無文にする部分もあり、それに対峙させて無文部とする部分もある。

７は４単位の双頭山形把手を有する波状口縁土器で、把手の中央から頸部区画隆帯までやや太い刻み隆帯を垂下し、波底部と合わせて口縁部を８単位に分割している。把手下に区画した左右対峙する楕円状の区画内には、渦巻文や横位の短沈線を挟む並行沈線を、モチーフを変えたり、配置を変えたりして対称性を崩しながら施文している。胴部には、口縁部からの垂下隆帯の下部に、２本隆帯を組にして垂下し、１本を蛇行垂下させている。この２本隆帯は２単位に施文されており、胴部は２単位構成となっている。地文は細かな撚糸文Ｌである。

８は口縁部文様帯、幅狭の頸部無文帯、胴部文様帯の３文様帯構成である。口唇部に山形眼鏡状把手を有し、把手から下がる隆帯と隆帯の渦巻文で構成するモチーフを施文するが、このモチーフは１～４との共通性が高い。地文は撚糸文Ｌである。

９はやや内湾する口縁部が開く器形で、口縁部に継ぎ足し状沈線の渦巻文を施文する。頸部は半截竹管状工具の平行結節沈線で区画しており、胴部にも同種の結節沈線で区画文を施している。区画内には沈線の渦巻文や蓮華状文を施文する。

10、11は11の方が若干大きいが、双子のような土器である。内湾する無文の口縁部が開き、頸部で括れ、胴部がやや張る器形を呈する。口唇部に円形と山形が組む非対称な把手を４単位に配置し、把手下の頸部から胴部にかけて隆帯を垂下して、胴部も大きく４単位に区画している。

10の頸部文様帯は展開図左端区画から「山形文＋渦巻文」、「半楕円文（楕円文）＋半楕円文（＋渦巻文)」、「山形文＋渦巻文（＋半山形文)」、「半楕円文（＋渦巻文）＋半楕円文」の構成となり、1単位飛ばして類似する構成をとるが、区画内の充填文要素をそれぞれ変えている。胴部は鈎状隆帯が垂下する区画に幅狭な縦位区画を設けており、１区画飛ばした類似モチーフを構成する区画にも幅狭な縦位区画を設けている。この縦位の幅狭区画線は、頸部文様帯まで貫通せず、胴部文様帯の文様区画の１つとして認識される。この幅狭区画には上下に対向する弧状文のモチーフを描き、無文とする左端の区画文との違いを際立たせている。さらに、上下対向弧状文の構成は、右端の区画文に描かれるバンザイ形のモチーフと相似形となっており、特に上側の「Ｖ」字状文は、バンザイ文の上側に類似する。左から２番目の区画内にはいわゆるサンショウウオ文状のモチーフを描いており、この形状は上下対弧状文の下段部分と相似形を成している。また、右端区画のバンザイ文の下半分は、サンショウウオ文状のモチーフ構成となっている。このように、対応する区画に対称性を崩す工夫がなされているだけではなく、さらに、交互の入れ子状態に関係性を示す構造が組み込まれていることが看取される。地文は施文する部分と施文しない部分があるが、０段多条Ｌの撚糸文を施文する。

11も同様な文様構成と思われるが、遺存部分が少なく、全体構成を読み解くことはできない。頸部文様帯の構成や、胴部の鈎状文やバンザイ文（「Ｘ」字状文）は類似モチーフを施文している。また、鈎状文を施文する区画では、幅狭な縦位区画を設けているようである。地文は同様に０段多

条撚糸文Ｌである。

12も同様な器形と文様帯構成であるが、残存部が少なく、不明な部分が多い。口縁部には大きな眼鏡状把手を有し、頸部文様帯に相当する胴部文様帯の上半部を幅広に設定し、下半部をやや幅狭に設定している。地文には０段多条撚糸文Ｌを施文する。

13は胴上半部が膨れる器形で、０段多条ＲＬの縦走縄文を施文する。14は張り出した底部の上まで条線文を施文する。

15は幅狭な無文の口縁部が内折して立つキャリパー形深鉢であり、頸部で括れて、底部が小さく張り出す。口縁部に蛇がとぐろを巻いた大きな筒状の把手を付け、把手から蛇体隆帯を垂下する。把手の上部には、リアルな蛇の頭を表現している。隆帯は眼鏡状把手の上を這い、口縁部を通して胴部に至り、鉤状に垂下する。隆帯は眼鏡状把手の上で「十」字状のスタンプ状を呈し、口縁部では蛙の脚状に開いて菱形状を呈し、胴部に至っている。垂下隆帯には交互刺突文を施している。口縁部文様帯は被熱が著しく、文様がとろけていて解読不可能な部分が多い。基本的には蛇行隆帯の区画文を構成するものと思われる。胴部地文には撚糸文Ｌを施文する。

16、17は円筒形土器で、16は胴上半部を横位の２帯に分帯し、10、11の頸部文様帯と同様の山形文や半楕円文、円形文等を施文する。また、上下左右の区画でモチーフを交互に変えている。胴部の地文は０段多条ＲＬの縦走縄文である。

17は小形の円筒形土器で、平行沈線で胴部を縦位４単位に区画し、中央部の円形文を中心にして「Ｘ」字状文を構成する。縦位の縦長の区画に沿って蓮華状文を施文し、上部の「Ｖ」字状区画には渦巻文と三叉文、下部の区画には縦位の集合沈線を施文している。胴部は０段多条ＲＬ縄文を横位施文する。

18 ～ 27は浅鉢である。18は最大径60㎝弱の大きさで、本遺跡最大級の浅鉢である。口縁部が内湾して開く器形で、口縁部に低平隆帯で渦巻文を繋ぐ楕円形の区画文と、台形状区画を８単位に施文するものである。連結される渦巻文は捻りの加わった「α」状の突起状となっている。

19は口縁部の内湾の弱い器形で、やはり低平隆帯で渦巻文と区画文を構成する文であるが、区画隆帯の合わさる部分は、隆帯の高さを増している。

20も内湾の弱い口縁部が開き、低平隆帯で口縁部に渦巻文を施文する。

21は口縁部区画隆帯から直接隆帯渦巻文が派生するもので、縦位の区画文も見られる。

22はやや背の高い鉢状の浅鉢で、両端が「π」字状に渦を巻く低平隆帯文を施文する。

23は21同様に口縁部区画隆帯から直接低平な隆帯文が派生するもので、両端で逆巻きする左右対称形の渦巻文を施文する。

24は４単位双頭の山形波状口縁浅鉢で、波状部に円窓が空く。内面には円窓下に隆帯１本を巡らしている。

25も同様の双頭の山形波状口縁浅鉢で、内面に隆帯状の稜を有するが、円窓はない。

26、27は口縁部が内湾する無文の浅鉢で、26は被熱を強く受けており、器面が荒れている。27は器高が高く、鉢状を呈する。

破片では、28はＰ１、29はＰ４、30、31はＰ５、32、33はＰ７、34はＰ９から出土した。

35 ～ 37は勝坂式古段階の角押文を施文する土器群である。37は単独の角押文を施文し、雲母を含む。35、37は平行角押文である。

38 ～ 43は阿玉台式系土器群で、38 ～ 40は区画に沿って平行波状沈線を施文する。41は幅広の爪形文を施文する。42は垂下隆帯に押圧を施し、43は楕円区画に沿って付加施文はない。阿玉台Ⅱ式を中心とする土器群である。

44 ～ 48はキャタピラ文や爪形文を施文するもので、44、47はペン先状三角押文で小鋸歯状文

を施文している。勝坂式古段階の新道式に比定されよう。48は隆帯脇の爪形文に波状沈線を沿わせており、勝坂式中段階の藤内式段階に比定されるものと思われる。

49～66は勝坂式新段階を中心とした土器で、刻み隆帯や、半截竹管状工具の平行沈線区画文、爪形文を伴う三叉文等を施文する土器群である。モチーフを描く隆帯脇に沈線文を施文することを特徴とする。

67～74は勝坂式終末段階の土器群であろう。隆帯に交互刺突や「ハ」字状刻みを多用し、比較的簡素なモチーフを描く。爪形文等は施文されなくなり、沈線の三叉文や交互差し切り文などの単純なモチーフとなる。

75、76は口縁部が内湾して開く器形で、75は口縁部の縄文地文上に沈線の「Ｕ」字状区画文を施文し、横位に繋げるモチーフを描いている。地文縄文は単節ＲＬ縄文の横位施文である。76は口縁部の内湾がやや強く、沈線で口縁部を区画し、口縁部の地文に単節ＲＬ縄文を横位施文する。勝坂式終末期のものであろう。

77、78は加曽利Ｅ式キャリパー形深鉢で、77は地文撚糸文Ｌ上に隆帯の渦巻文を施文するものと思われ、加曽利ＥⅠ式に比定されよう。78は口縁部の内湾が強いが、口縁部を沈線で区画し、地文に単節ＲＬの縦走縄文を施文する。勝坂式終末期から加曽利ＥⅠ式に比定されよう。

79～82は地文のみの胴部破片で、79は単節ＬＲ縄文、80は単節ＲＬの縦走縄文、81、82は撚糸文Ｌである。

83～86は深鉢の底部で、83は少し張り出す底部、０段多条ＲＬの縦走縄文を施文する。84は単節ＲＬの縦走施文である。85、86は無文の底部である。

87～104は浅鉢である。87～91は口縁部が強く屈曲し、87～89は口縁部に文様を施文する。94～103は口縁部が比較的強く屈曲する無文の浅鉢である。

92は内面に稜を有し、口縁部が大きく開く浅鉢である。104も同様な器形になろう。

土製品としては、105～108の土器片を利用した土製円盤が出土した。

石器は109～121が出土した。

109、110が石鏃で、特に109は両側縁が鋸歯状である。

111は粗粒の石材を素材として用いた大形粗製石匙で、刃部が縦に付く。

112～118は打製石斧である。112、113は両刃で、短冊形を呈する。114、115が撥形を呈し、刃部は114が両刃、115が片刃である。この他、116、117が基部片、刃部片の118は両刃である。

119、120は敲石で、端部に敲打痕を有する。

121は石皿の破片で、正面のみが残存している。皿部の周縁に凹痕を有する。

第59号住居跡（第464図～第472図）

Ｉ・Ｊ－18区に位置する。北東側で第60号住居跡と重複しているが、本住居跡の方が新しい。平面形は南北方向にやや長い楕円形で、規模は長径5.40ｍ、短径5.00ｍ、深さ0.35ｍである。

壁溝は検出されなかった。壁は皿状に緩やかに立ち上がる。

柱穴は13基が検出された。うち３基が重複している。この３基を基準にして、重複関係、覆土、配置等から柱穴を推定すると、新しい住居跡の柱穴としてＰ８、１、２、３、５の５基が抽出され、５本主柱の住居構造が推定される。

また、古い住居跡の柱穴としてＰ10、11、４、７とＰ８が兼ねるとしてこの５基が想定され、新しい住居跡とほぼ同じところに柱を大きく移動せずに５本主柱の住居跡が構築されていたものと判断される。

主柱穴の深さは、Ｐ１＝40㎝、Ｐ２＝45㎝、Ｐ３＝53㎝、Ｐ４＝45㎝、Ｐ５＝58㎝、Ｐ７＝

41㎝、Ｐ８＝53㎝、Ｐ10＝（28）㎝、Ｐ11＝45㎝である。

炉跡は中央部やや北西寄りに位置し、埋甕炉であるが、３基の炉床が確認された。炉体土器が残っていた一番新しい炉跡１は長径56㎝、短径52㎝、深さ27㎝である。北側の炉跡２は径43㎝で、深さ11㎝である。南側の炉跡３は径45㎝で、深さ14㎝である。炉跡１が最も新しく、炉跡２と炉跡３を壊して作られているが、炉跡２と炉跡３の新旧関係は不明である。

埋甕は検出されなかった。

本住居跡は、炉跡からでは３回の作り替えが、柱穴からは１回の建て替えが把握されており、上屋構造の変化を建て替えと認識すると、本住居跡は２軒が重なった痕跡と判断される。そのいずれかの期間の中で、建て替えに伴うのではなく、炉の作り替えが１回行われたと理解される。

新しい住居跡の時期は、炉体土器から勝坂式新段階の所産と判断される。

遺物は第467図１～472図77の土器類、石器類が出土した。

14はＰ１、15はＰ２、16はＰ３、17はＰ４、18、19はＰ７から出土した。

１は炉体土器である。キャリパー形深鉢土器の胴上半部が炉体土器として埋設されていたものである。口唇部が幅広く立ち、耳状の大きな把手を付け、沈線の横位区画と充填の沈線文を施文するが、一部しか残存していない。湾曲する口縁部には隆帯の渦巻文とそれに続く区画文を連結するモチーフを施文している。渦巻文は４単位を構成し、上下区画に接しながら連結するが、耳状把手下において横位の隆帯で連結している。モチーフの余白には爪形文を伴う三叉文を施文しており、区画内には集合沈線を施文する。頸部には縦横の沈線で５単位の区画文を施し、蛇行爪形文や上下差し切り沈線文等を充填している。胴部は垂下隆帯で６単位に区画しており、幅狭で円形モチーフを施文する１単位、「Ｍ」字状区画で下部に円形区画文を有する区画２単位、三角形区画を組み合わせた「Ｋ」字状区画３単位を、間に異種区画を挟むように配置している。モチーフの構成や単位構成は整然としており、全面に隙間が残らぬよう爪形文を伴う入組文や集合沈線文などを充填施文する。非常に手の込んだ土器である。

２は大形の耳状突起の左側に刻みを施す蛇体隆帯を垂下させている。

３は内湾する無文の口縁部が開く器形で胴部下半を欠損する。胴部には先端で渦を巻く蛇体状波状隆帯を横位に施文し、余白に三叉文や渦巻文を施文する。また下側の三角形区画文内は縦位の集合沈線文を施文している。

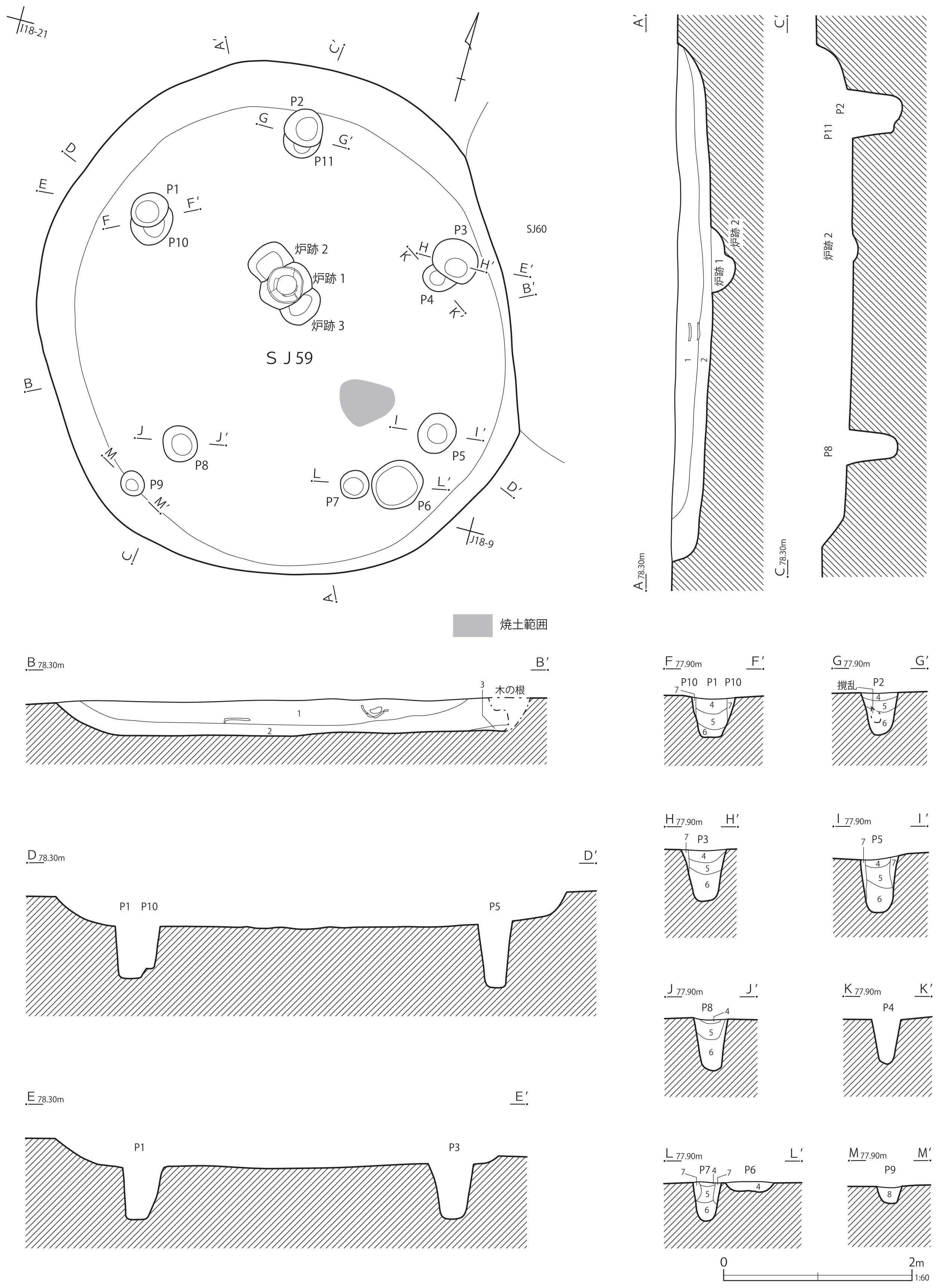
４も文様帯構成等は３に類似するが、口唇部に把手の剥落痕が残る。

５は無文の口縁部が立ち、頸部で括れ、胴部が張る器形である。幅広の胴部には、幅いっぱいに刻み隆帯文の波状文を幅狭に施文し、あたかも蛇がうごめいているかの状況を想像させる。区画内にはさらに沈線の渦巻文等を施文しており、部分的に短隆帯のモチーフも施文する。

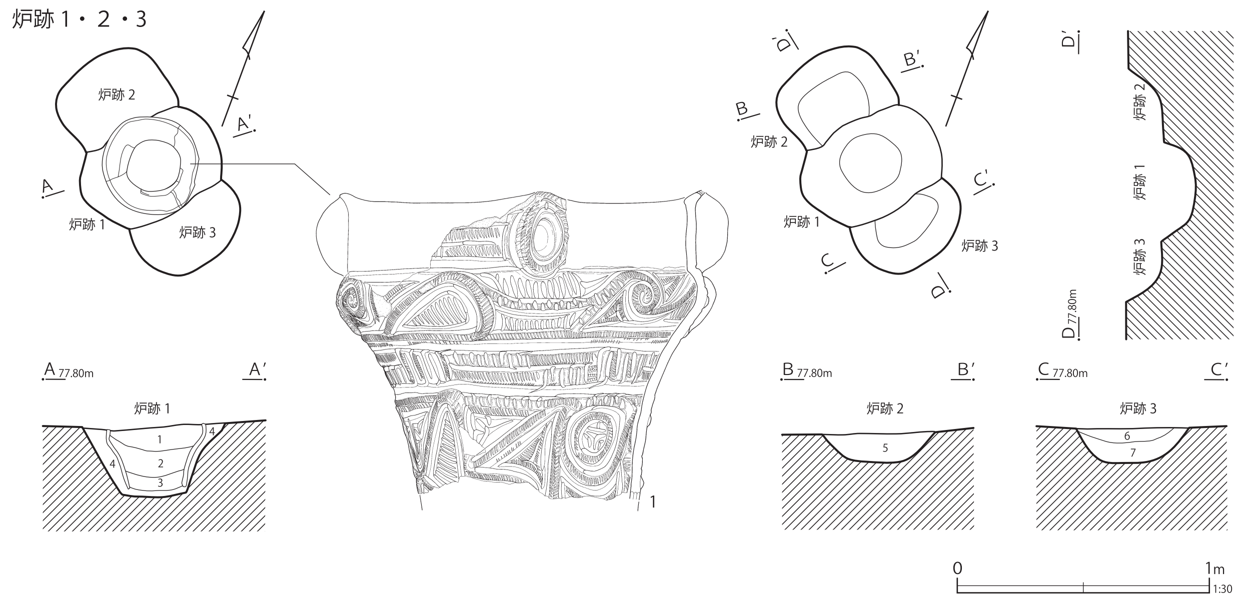
６は無文の口縁部がやや開き、頸部で括れ、胴部が張る器形を呈する。頸部は交互刺突を施す隆帯、胴部は刻み隆帯で区画し、幅広い胴部文様帯に刻み隆帯の渦巻文を連結するモチーフを描いている。胴部は、垂下隆帯で大きく３単位に区画しているようであるが、詳細は不明である。区画内には沈線のみの三叉文等を施文している。

７は円形区画文を波状隆帯で連結するモチーフを構成しており、頸部区画隆帯から縦位区画隆帯を垂下するようであるが、全体構成は不明である。

８は４単位の双頭山形把手を有するキャリパー形波状口縁深鉢である。山形把手の双頭部から刻み隆帯が垂下して、口縁部文様帯内で渦巻文が連結するモチーフと合流する。余白には爪形文を伴う三叉文等を充填施文する。胴部は０段多条



第464図　第59号住居跡（1）



ＳＪ59
1　暗褐色土　ローム粒子・炭化物少量
　　　　　　焼土粒子微量
　　　　　　中層～下層にかけて土器が多く出土
2　暗褐色土　ローム粒子多量　炭化物少量
　　　　　　焼土粒子微量　ローム小ブロック少量
　　　　　　ソフトロームが混入しており１層に
　　　　　　比べ明るい
3　暗褐色土　ローム粒子・ソフトローム・
　　　　　　ローム小ブロック多量

ＳＪ59 ピット
4　暗褐色土　ローム粒子・炭化物少量
　　　　　　焼土粒子微量
5　暗褐色土　ローム粒子多量
　　　　　　炭化物・焼土粒子微量
　　　　　　ソフトロームをブロック状に混入
6　褐色土　ローム粒子・ソフトローム多量
7　黄褐色土　ソフトローム主体　ローム粒子多量
8　暗褐色土　ローム粒子・ロームブロック多量

ＳＪ59 炉跡
1　暗褐色土　ローム粒子少量
　　　　　　炭化物・ローム小ブロック微量
2　暗褐色土　ローム粒子多量　炭化物微量
　　　　　　ローム小ブロック・焼土粒子少量
　　　　　　焼土ブロック（径１～ 2cm）微量
3　鈍黄褐色土　ソフトローム主体　ローム粒子多量
　　　　　　焼土ブロック（径 1cm）微量
4　暗褐色土　ローム粒子多量　炭化物微量
　　　　　　ローム小ブロック少量
5　暗褐色土　ローム粒子・ローム小ブロック多量
　　　　　　焼土ブロック（径１～ 2cm）・炭化物少量
　　　　　　焼土粒子微量
6　暗褐色土　ローム粒子・焼土粒子多量　しまり良い
7　暗黄褐色土　ローム小ブロック多量　しまり良い
　　　　　　埋戻された土

第465図　第59号住居跡（２）

第184表　第59号住居跡柱穴計測表（第464図）

ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)
Ｐ１	40.0	40.0	Ｐ２	40.0	45.0	Ｐ３	47.0	53.0	Ｐ４	34.0	45.0	Ｐ５	41.0	58.0
Ｐ６	53.0	10.0	Ｐ７	32.0	41.0	Ｐ８	39.0	53.0	Ｐ９	26.0	16.0	Ｐ10	45.0	(28.0)
Ｐ11	39.0	45.0												

ＲＬ縄文を、縦位施文している。

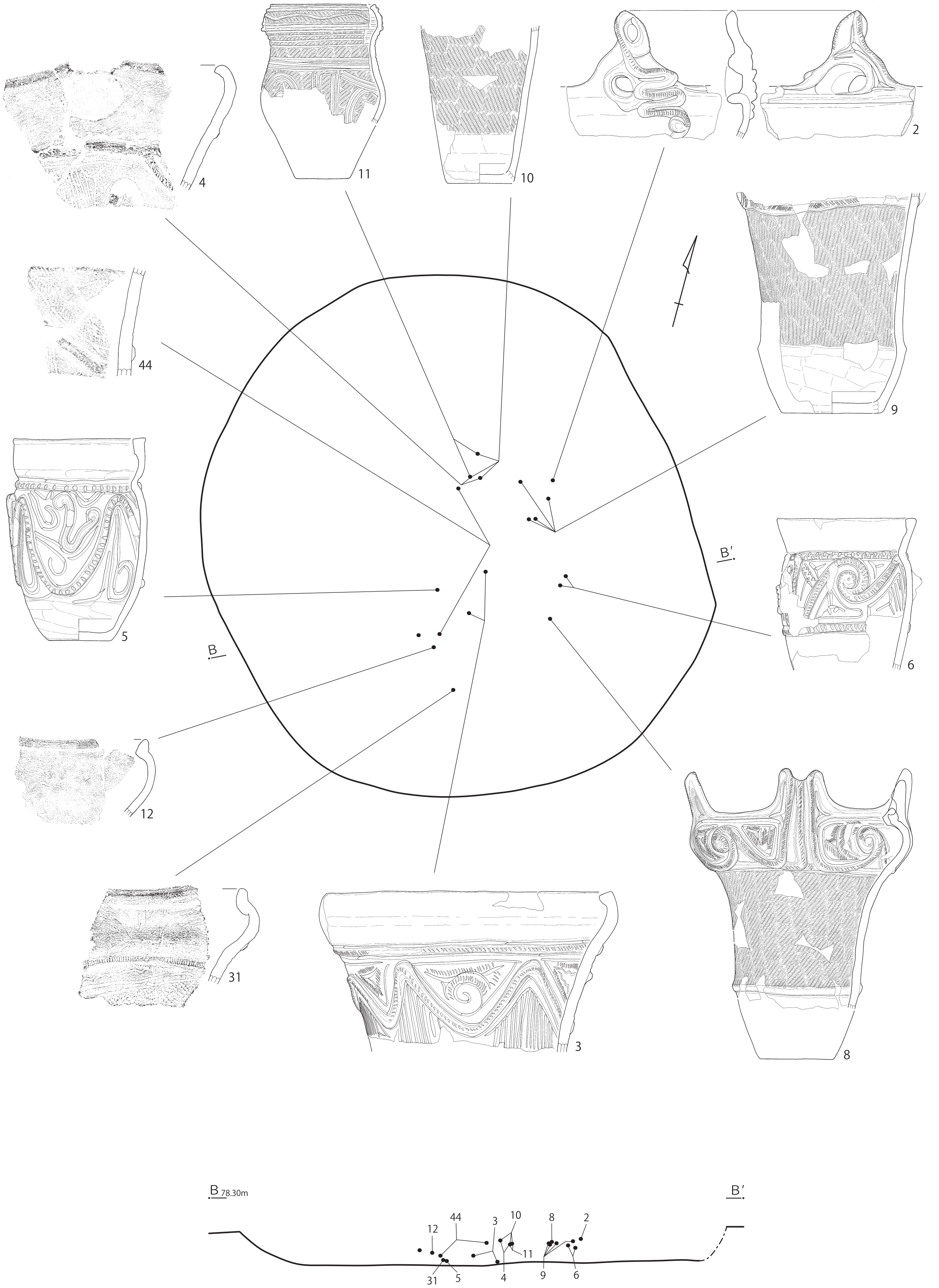
９はキャリパー形深鉢の底部がやや張り出す胴部で、地文に０段多条ＲＬの縦走縄文を施文している。

10は直線的に窄まる胴部で、円筒形土器の胴部の可能性がある。地文に０段多条ＲＬ縄文を横位施文している。

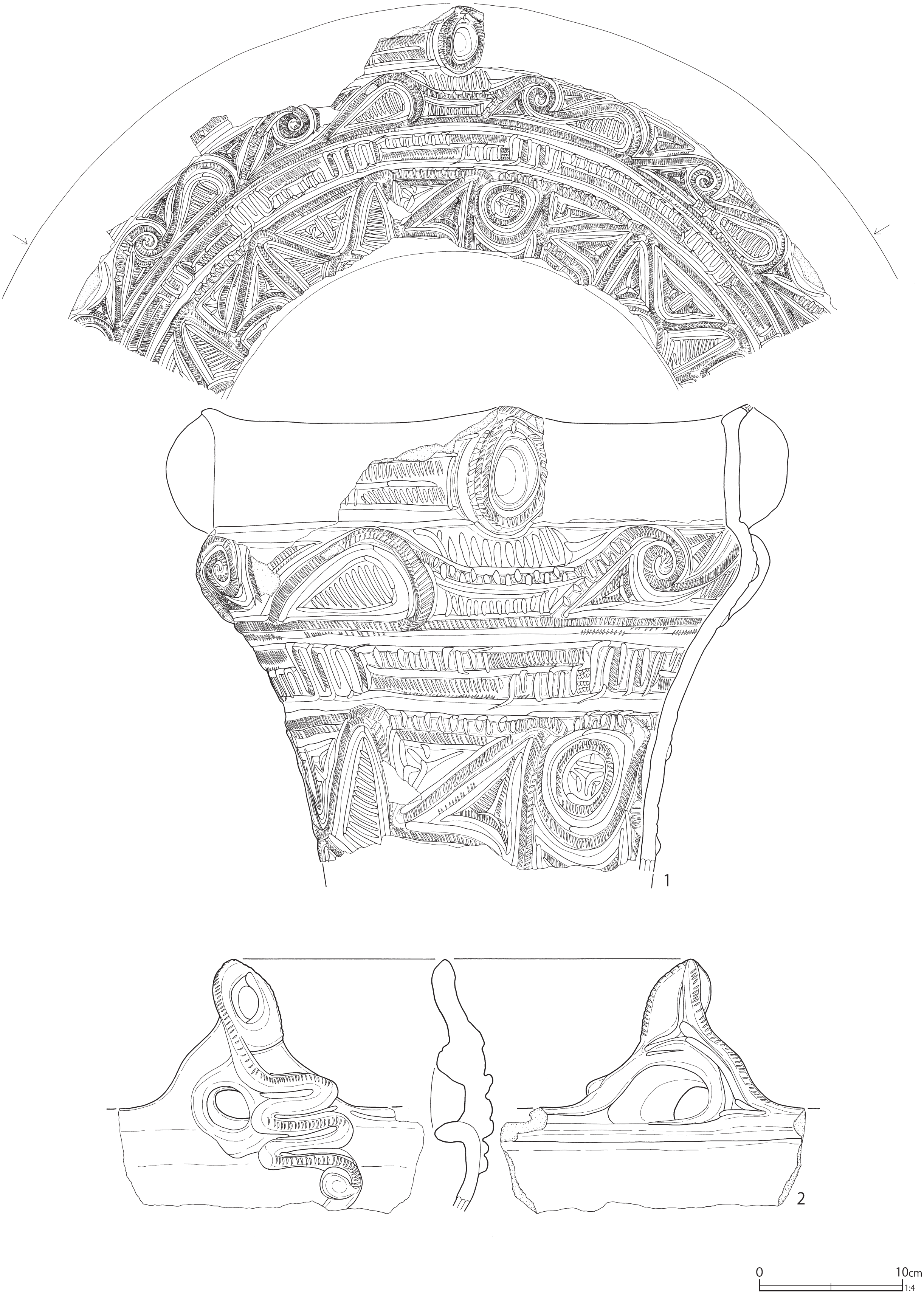
11は頸部で括れ、口縁部が内湾し、胴部が張る器形を呈する。口縁部には地文単節ＲＬ縄文上に隆線状の細い隆帯を波状に施文し、胴部には３本沈線の縦位区画文と渦巻文を繋ぐ沈線モチーフを描いている。地文は頸部から胴部にかけて単節ＲＬ縄文を縦位施文している。器形等から大木式系の土器と思われる。

12、13は無文の浅鉢で、12の口縁部は緩く内湾し、13は胴部が強く屈曲する器形を呈する。

破片では、20、21は勝坂式古段階の角押文を施文する土器である。角押文で口縁部を区画し、20は縦位集合施文し、21は横位の鋸歯状文を角押文で施文する。22 ～ 24は幅広の爪形文を施文するもので、22、23は爪形文に沿って小波状沈線文を施文している。25は平行沈線区画内にペン先状の三角押文を集合施文する。26は沈線区画内に横位多段の蓮華状文を施文している。22 ～ 24

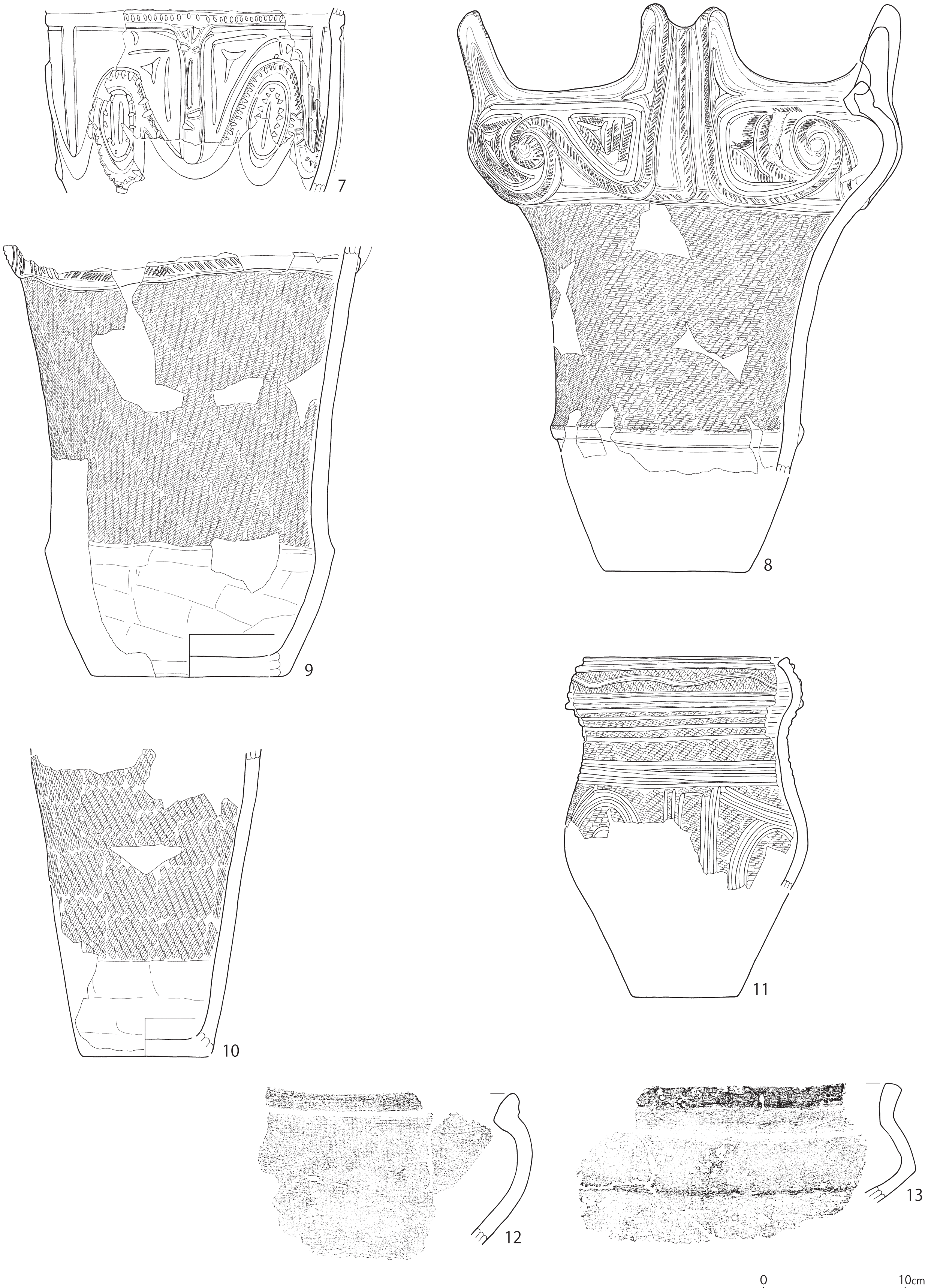


第466図　第59号住居跡遺物出土状況



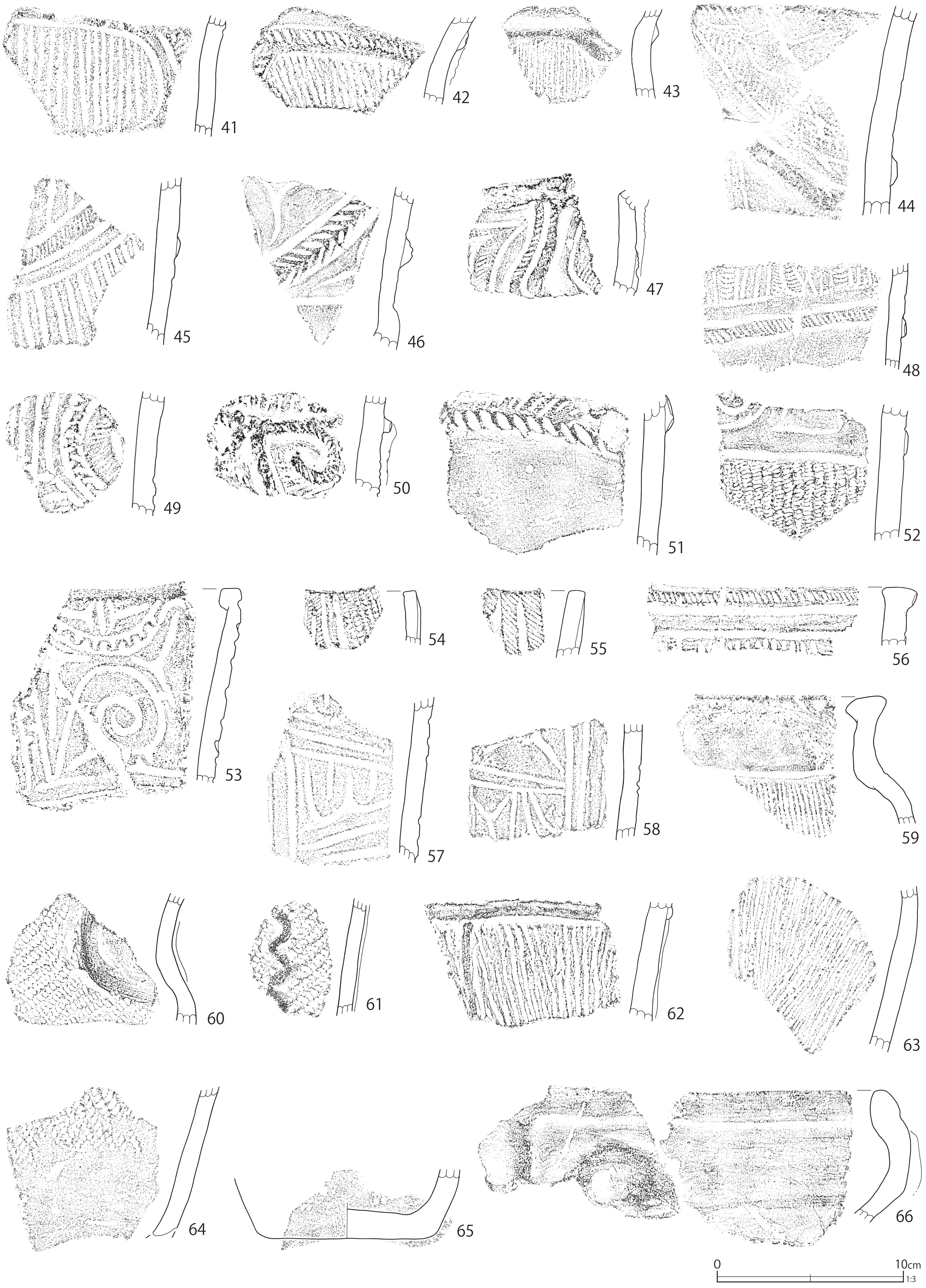
第467図　第59号住居跡出土遺物（１）

第468図　第59号住居跡出土遺物（2）

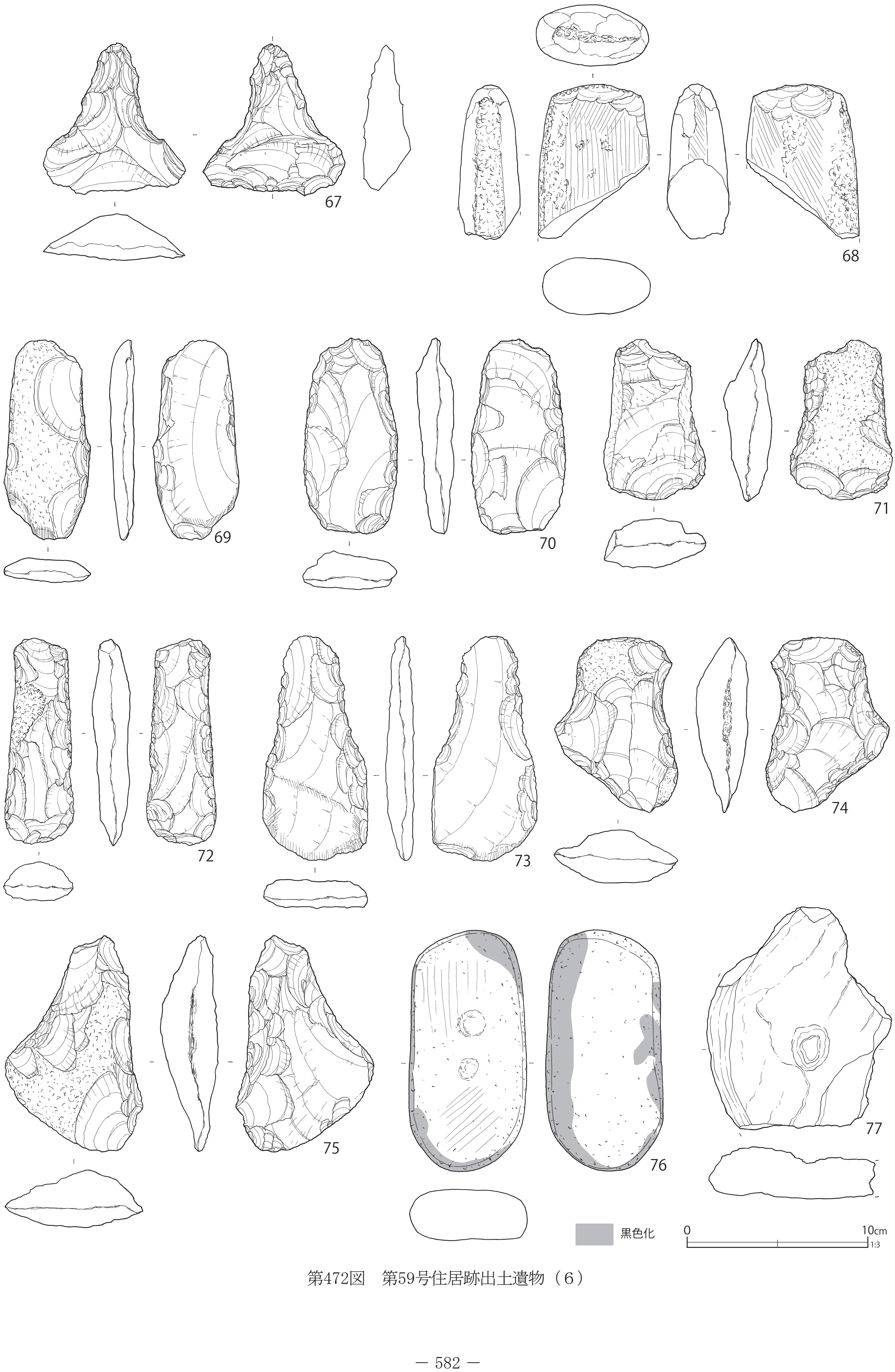


第469図　第59号住居跡出土遺物（３）

第470図　第59号住居跡出土遺物（4）



第471図　第59号住居跡出土遺物（5）



第472図　第59号住居跡出土遺物（6）

第185表　第59号住居跡出土復元土器観察表（第467 ～ 469図）

番号	器高(cm)	口径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	備　考
467-1	[32.6]	-	38.8	-	50%
2	[16.0]	-	-	-	20%
468-3	[22.2]	(39.2)	-	-	40%
4	[17.5]	(27.5)	-	-	20%
5	28.0	18.2	-	8.4	完形
6	[21.0]	19.2	-	-	70%
469-7	[13.1]	-	[20.2]	-	30%

番号	器高(cm)	口径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	備　考
469-8	[33.1]	26.6	-	-	60%
9	[30.5]	-	24.2	(13.4)	60%
10	[21.8]	-	16.2	(9.2)	40%
11	[16.4]	(14.4)	-	-	40%
12	[10.8]	-	-	-	30%
13	[8.4]	-	-	-	20%

第186表　第59号住居跡出土石器観察表（第472図）

番　号	器　種	分類	石　材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備　考
472 - 67	大形粗製石匙	Ⅰ1①イ	ホルンフェルス	8.4	7.9	2.6	107.6	
68	磨製石斧	Ⅱ②イ	緑色岩	[8.6]	[6.2]	3.4	251.0	敲石として再利用
69	打製石斧	Ⅲ2①イ	砂岩	11.1	4.8	1.4	84.7	
70	打製石斧	Ⅲ2①ア	砂岩	10.8	5.2	2.1	123.7	
71	打製石斧	Ⅲ2①イ	頁岩	8.9	5.6	2.7	140.0	
72	打製石斧	Ⅱ2①イ	ホルンフェルス	11.4	3.8	2.1	115.9	
73	打製石斧	Ⅲ2①ア	砂岩	12.4	5.8	1.6	134.1	
74	打製石斧	Ⅲ2①イ	ホルンフェルス	9.7	6.9	2.9	186.7	
75	打製石斧	Ⅲ2①イ	ホルンフェルス	12.0	7.6	3.2	227.3	
76	磨石	Ⅱ1①ア	砂岩	13.4	6.6	3.2	375.4	表裏面一部黒色化
77	石皿	Ⅳ②イ	雲母片岩	[12.3]	[10.3]	[3.9]	427.9	

は古い要素を有するものの、勝坂式中段階の藤内式古段階に比定されよう。25、26は藤内式の新しい段階であろうか。

27 ～ 59は勝坂式新段階から終末段階の土器群である。27 ～ 32はキャリパー形深鉢の口縁部破片で、27、29は口縁部文様帯を構成する土器である。27は刻み隆帯と沈線モチーフ、29は「ハ」字状刻みを施す隆帯でモチーフを描く。30 ～ 32は内湾する無文の口縁部が開く器形で、31は頸部に波状沈線と並行沈線で区画を施し、胴部に単節ＬＲ縄文を縦位施文する。33 ～ 52は胴部破片で、刻み隆帯でモチーフを描き、隆帯脇に沈線を施文する土器群である。沈線区画内には爪形文を伴う三叉文や、小波状沈線を施文する、37は隆帯脇に平行沈線で区画を行い、爪形文を沿わせて中央部に結節沈線を施文している。藤内式の新しい段階に比定される可能性もある。30は隆帯の楕円区画内に集合結節沈線を充填している。41 ～ 43は楕円区画内に沈線を施文するもので、44は沈線区画に沿って爪形文と粗い波状状沈線を施文する。46、49は隆帯に「ハ」字状刻みを施し、50、51は刻み隆帯で区画やモチーフを描いている。53 ～ 58は円筒形土器で、53 ～ 57は口縁部破片である。52は交互刺突を施した並行沈線で縦位区画や弧状区画を施し、対向の三叉文や沈線渦巻文を施文している。54、55は口唇部直下から地文縄文上に縦位沈線を施文する。57、58は沈線のみでモチーフを描くもので、三叉文に爪形文は伴わない。52は円筒形土器の胴部破片で、胴部に０段多条ＲＬの縦走縄文を施文する。59は口縁部が内湾する深鉢で、無文の口唇部が立ち、撚糸文Ｌを施文する。

60は単節ＲＬを施文する括れる胴部に、隆帯で文様を描く。61は単節ＲＬ縄文の地文上に、蛇行隆帯を垂下する。62は撚糸文Ｌ上に隆帯懸垂文を垂下する。63は条線地文の胴部破片である。61 ～ 63は加曽利Ｅ式であろう。

64、65は深鉢の底部破片であり、66は低隆帯でモチーフを施文する浅鉢である。

石器は67 ～ 77が出土した。

67は粗粒の石材を素材として用いた大形粗製石匙である。

68は乳棒状磨製石斧の基部片である。欠損後、基端部を使用面として敲石に再利用されている。

69～75は打製石斧である。69～72が短冊形を呈し、刃部は69、70が片刃、71、72が両刃である。69の刃部には擦痕が認められる。73～75が撥形を呈し、刃部は73が両刃、74、75が片刃である。73は69同様、刃部に擦痕が見られる。

76は磨石で、正面に浅い凹痕を有する。

77は石皿の破片で、正面に凹痕を有する。

第60号住居跡（第473図～第478図）

Ｉ・Ｊ－18区に位置する。西側の壁の一部で第59号住居跡と重複するが、本住居跡の方が古い。平面形は北西にやや長い楕円形を呈し、規模は長径4.6m、短径3.6m以上、深さ0.30mである。

壁溝は検出されなかった。壁は床面から皿状に緩く立ち上がる。

柱穴は合計８基検出された。柱穴の配置から４本主柱と思われるが、２基が重複しており、新旧２時期の住居跡が推定される。柱穴の重複や、覆土、配置関係から新段階の住居跡の柱穴はＰ６、１、２、４と判断され、古段階の住居跡はＰ１、２が兼ねて、Ｐ７、３の４基と推定される。いずれも４本主柱の住居跡で、２軒の住居跡が重なっていたことが理解される。

主柱穴の深さは、Ｐ１＝41㎝、Ｐ２＝52㎝、Ｐ３＝66㎝、Ｐ４＝61㎝、Ｐ６＝63㎝、Ｐ７＝54㎝を測る。

炉跡は埋甕炉であるが、３基の炉跡が住居跡のほぼ中央部で確認された。最も新しい炉跡１の炉体土器は直ぐ下部に埋設されていた古い住居跡の炉跡２の炉体土器を壊して構築されていた。さらに、炉跡３は炉跡２との新旧関係は不明であるが、明らかに炉跡１に壊されていることから、一番古い炉跡である可能性は高い。炉の規模は、炉跡１が長径68㎝、短径58㎝、深さ20㎝、炉跡２が径28㎝、深さ14㎝、炉跡３が径47㎝、深さ６㎝である。

また、炉跡の東側の覆土層中に焼土が約２m弱の範囲で確認された。

埋甕は検出されなかった。

本住居跡は炉跡と柱穴の配置から、３軒の重複であることが明らかになったが、柱穴の移動も少なく、炉も上下に重なることから、同一居住者による継続的な建て替えの可能性が高いと判断される。

本住居跡は炉体土器や覆土出土土器から、勝坂式中段階の藤内式期の所産であると思われる。

遺物は第475図１～第478図54の土器類、石器類が出土した。

10はＰ１、11、12はＰ２、13はＰ４からの出土である。

土器は１～40である。１は炉跡１の埋設土器であり、筒形の胴部のみが現存する。胴部文様帯の上端を２列の角押文で区画し、この区画線から２山を描きながら底部付近まで４単位に条線の懸垂文を垂下するものと思われる。波状懸垂文の左側の屈曲下に対応する位置に、逆「U」字状の条線懸垂文を施文している。また、４単位のうち、２単位の波状懸垂文の２山目に、蛇行する懸垂文を施文している。対称性が守られている例である。阿玉台Ⅱ式に比定されようか。

２は炉跡２の埋設土器である。無文の底部のみが現存している。本来炉体土器は胴部下半を欠いた土器を使用することから、底部がそのままの形で残存していたことに違和感を感じる。

３は内湾する口縁部が開くキャリパー形深鉢で、文様帯の区画やモチーフの施文にキャタピラ文と三角押文を使用している。頸部に１条のキャタピラ文を施文し、胴部を２本の隆帯で区画している。この１本目の区画隆帯の上側にはキャタピラ文と三角押文を施文し、下側には三角押文を施文する。また２本目の隆帯の上側には三角押文、下側にはキャタピラ文と三角押文を施文している。

区画隆帯の向かい合う内側に三角押文を施文していることになる。胴部では縦位区画する隆帯脇にはキャタピラ文、モチーフを描くには三角押文を使用している。勝坂式古段階の新道式に比定されよう。

４は口縁部が直線的に開き、胴部があまり括れない器形を呈する。口縁部文様帯は結節の角押文で区画し、中央に押引角押文で小鋸歯状文を横位施文する。頸部には口縁部と同様な押引角押文で小鋸歯状文を１列施文する。底部文様帯には隆帯で４単位の鋸歯状文を構成するものと思われる。

５は胴部に襞状整形に近い加飾を施す阿玉台式系土器である。キャリパー形深鉢で底部を欠損する。内湾する口縁部には楕円区画を施しているものと思われ、区画隆帯に沿って角押文を施文する。口縁部文様帯の下端区画に沿って、薄く貼った隆帯を襞状に潰して爪形文を施文しており、胴部の区画要素にも同じ要素を残した爪形文を巡らせている。

６は底部破片で、単節ＲＬ縄文を横位施文している。

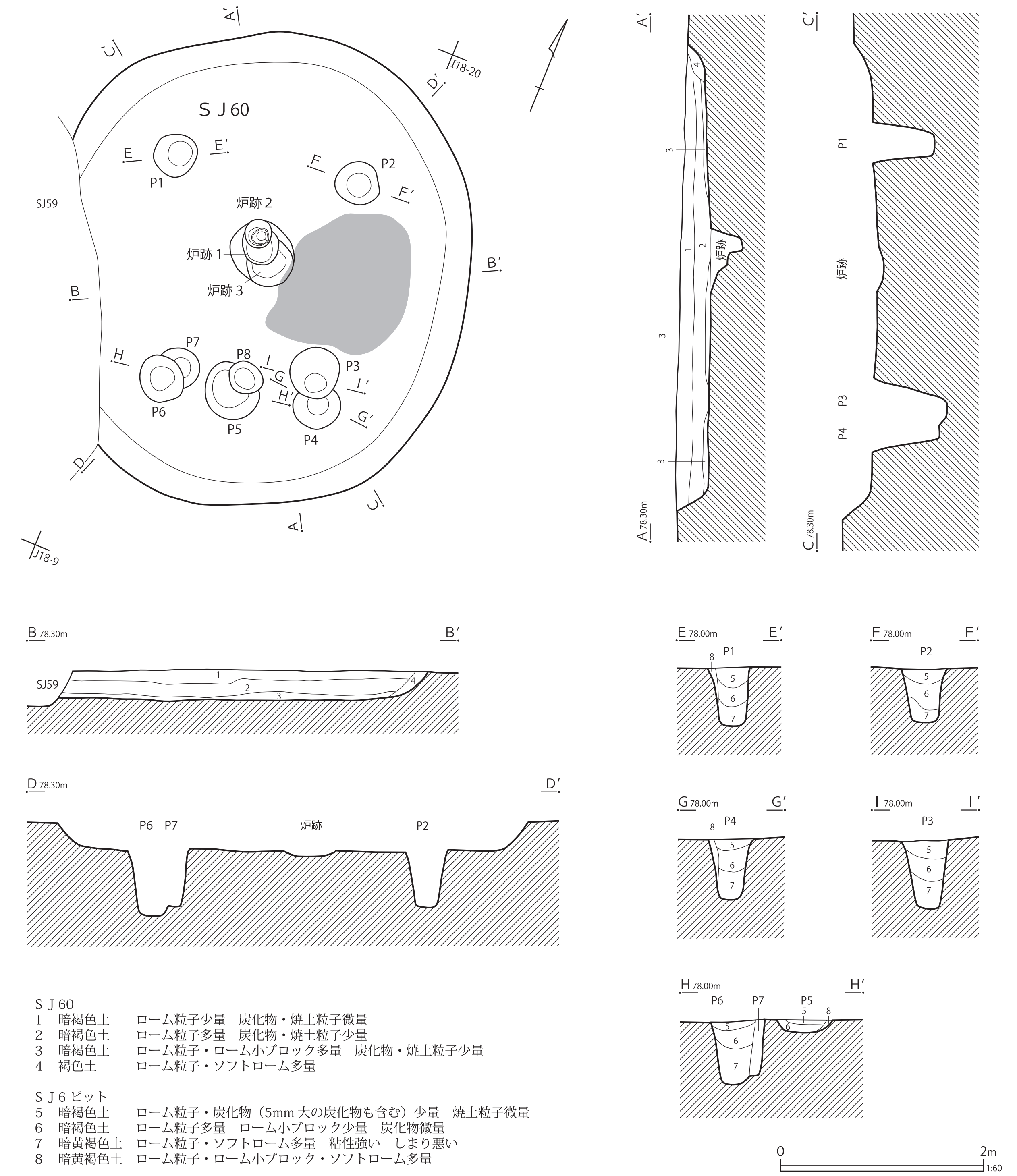
７は口唇部に眼鏡状把手１単位と、双頭の山形把手３単位を付け、把手間が弧を描く波状口縁を呈する。中央の眼鏡状把手の右側には蛇行隆帯が垂下しており、把手下に縦位の垂下隆帯と片流れの隆帯を配して、胴部を区画している。山形把手の１個は大形化し、中央部の集合三角押文を施文した縦長楕円区画で左右対称的に縦位区画して、対峙する三叉文を施文している。この山形把手の下部にあたる区画のみに格子目文を施文している。眼鏡状把手の反対側に位置する小さな双頭山形把手下には、眼鏡状把手下と同様な片流れ隆帯を垂下させている。胴部は口縁部から垂下する隆帯と片流れ隆帯のモチーフ間に、パネル文を嵌め込むような区画文を構成している。胴部に垂下する隆帯には非常に細かな刻みを施しており、口縁部から片流れ状に垂下する隆帯とともに、北陸系の要素を看取することができよう。この土器は大きな眼鏡状把手１単位と大きな双頭山形把手１単位を対峙させ、この組み合わせと小さな双頭山形把手２単位も対峙させる構成となっている。また山形把手３単位の中でも、大１、小２との対応関係を示している。勝坂式の構成原理の中に、北陸系の要素を取り入れ、パネル状区画文を構成する点が注目される。勝坂式中段階の藤内式古段階に比定されるものと思われる。

８は口唇部に耳状把手を付け、口唇部からクランク状に隆帯が垂下して、口縁部を区画している。地文もなく、阿玉台式系の土器と思われる。

９は眼鏡状把手で、正面右側に蛇行隆帯が垂下する。

破片では、14 ～ 38は角押文や三角押文を施文する勝坂式古段階の土器群である。14 ～ 21は阿玉台式系土器群で、14、15は口縁部文様帯区画隆帯脇に三角押文を施文し、14は頸部に襞状整形と波状沈線を伴う平行沈線を施文しており、15は口縁部区画内に複列の三角押文を施文している。16、19 ～ 21は半截竹管状工具の平行押引文の角押文を施文する。17は口縁部に爪形文を施文し、18は波頂部から押圧を施す隆帯が垂下する。いずれも阿玉台Ⅰｂ式の新しいところから、Ⅱ式にかけての土器群に比定されよう。

22 ～ 38は角押文と三角押文、キャタピラ文を施文する土器群で勝坂式古段階の土器群である。22 ～ 28は口縁部破片であり、口縁の区画文や充填文要素に集合の角押文や三角押文を施文する土器群である。25は口縁部区画のキャタピラ文に沿って小さな鋸歯状の角押文を施文している。29 ～ 38は胴部破片で、隆帯の渦巻文、鋸歯状の区画文を施文し、隆帯脇にキャタピラ文や幅広の爪形文を施文する土器群である。キャタピラ文や爪形文に沿う小さな鋸歯状文は、多くの場合は角押文や三角押文で施文するが、30は折れ線状の鋸歯状沈線文、34は折れ線状の鋸歯状沈線や一部

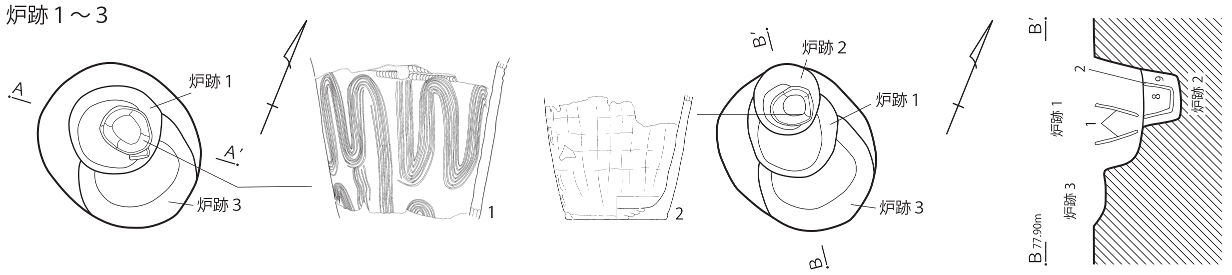


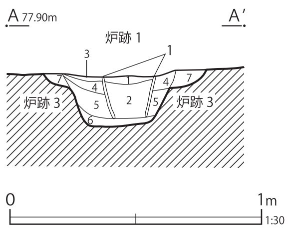
第473図　第60号住居跡（1）

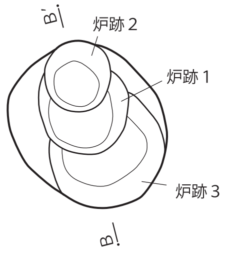
三角押文を施文している。沈線と結節沈線の中間的な様相を有しており、若干新しい様相として捉えられよう。これらの大半の土器群は新道式に比定されるものと思われるが、藤内式への移行期的な様相を有するものが含まれていると言えよう。

39は細かな刻みを施す隆帯で区画し、隆帯脇に半截竹管状工具の平行沈線を施文して爪形文を沿わせている。パネル状の区画内には鋭利な沈線で印刻文のような三叉文を施文する。爪形文を伴う三叉文の祖形のような構成で、やはり新道式新段

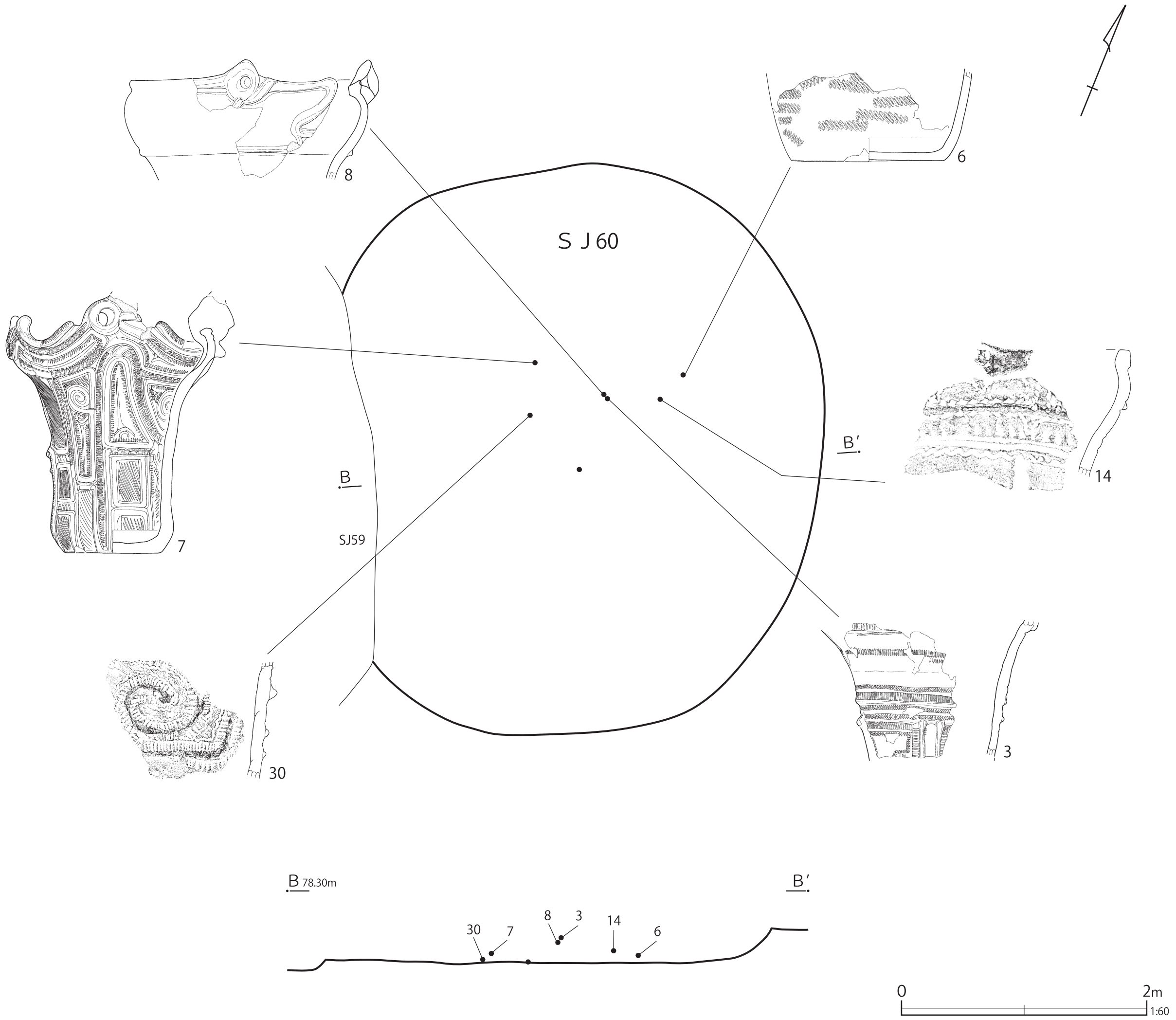
炉跡１～３



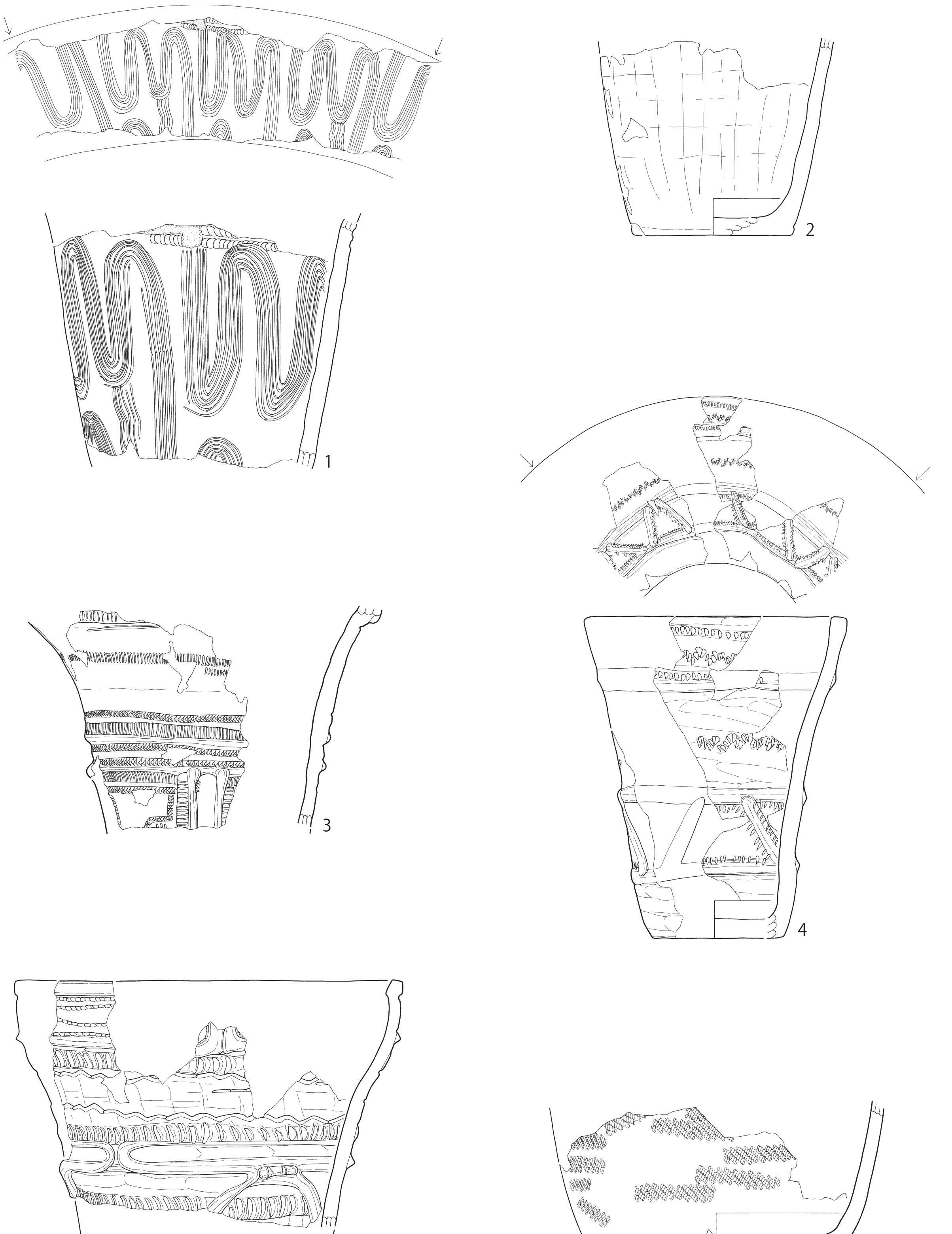




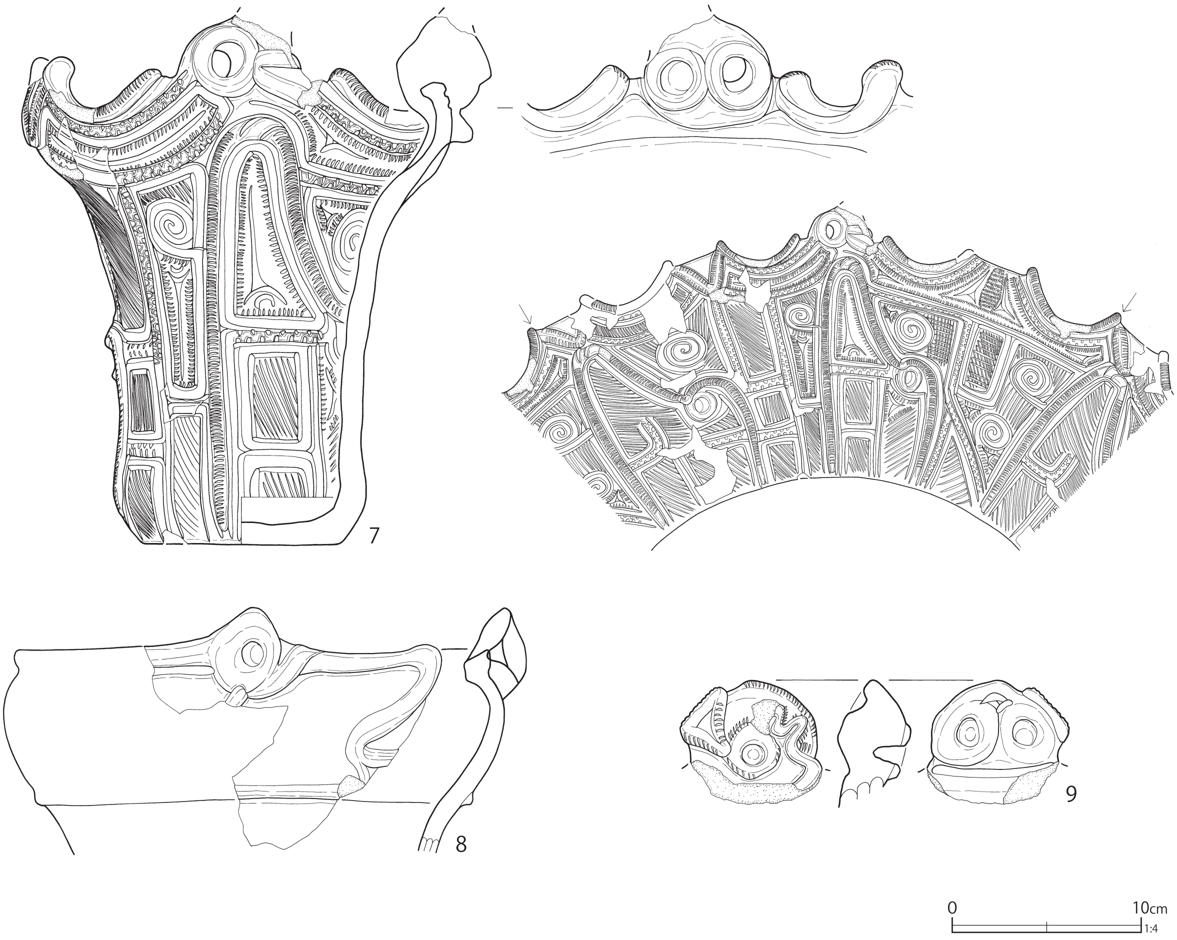
ＳＪ60 炉跡
1　暗褐色土　ローム粒子・焼土粒子少量
　　　　　　炭化物微量
2　暗褐色土　ローム粒子・炭化物・焼土粒子多量
3　暗褐色土　ローム粒子少量　炭化物微量
4　暗褐色土　ローム粒子・炭化物少量
　　　　　　焼土粒子微量
5　暗褐色土　ローム粒子・ローム小ブロック多量
6　黒褐色土　　ローム粒子・炭化物少量
　　　　　　　焼土粒子微量
7　暗褐色土　　ローム粒子多量　ローム小ブロック微量
　　　　　ソフトロームを混入
8　黒褐色土　　ローム粒子多量　　炭化物・焼土粒子・
　　　　　　　焼土ブロック（径１～２cm）少量
9　鈍黄褐色土　ソフトロームとロームブロックで
　　　　　　　充填された層
　　　　　　　炭化物少量　焼土粒子微量



第474図　第60号住居跡（２）・遺物出土状況



第475図　第60号住居跡出土遺物（1）



第476図　第60号住居跡出土遺物（２）

第187表　第60号住居跡柱穴計測表（第473図）

ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)
Ｐ１	41.0	55.0	Ｐ２	44.0	52.0	Ｐ３	(50.0)	66.0	Ｐ４	45.0	61.0	Ｐ５	57.0	12.0
Ｐ６	46.0	63.0	Ｐ７	41.0	54.0	Ｐ８	35.0	30.0						

第188表　第60号住居跡出土復元土器観察表（第475・476図）

番号	器高(cm)	口径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	備　考
475-1	[16.3]	-	(20.8)	-	50%
2	[13.0]	-	-	10.6	30%
3	[14.6]	-	(11.3)	-	40%
4	21.5	(17.7)	-	8.8	40%
5	[16.5]	(25.4)	-	-	30%

番号	器高(cm)	口径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	備　考
475-6	[9.6]	(22.3)	-	16.6	10%
476-7	28.0	21.2	-	10.2	完形
8	[12.9]	(25.2)	-	-	10%
9	[6.6]	-	-	-	10%

階から藤内式にかけての土器と思われる。

40は無文の底部で、底面に網代痕が残る。

土製品は、41のミニチュア土器と、42～44の土製円盤が出土した。41のミニチュア土器は、深鉢形土器のミニチュアで、胴部に並行沈線のクランク状のモチーフを描き、沈線文を充填している。

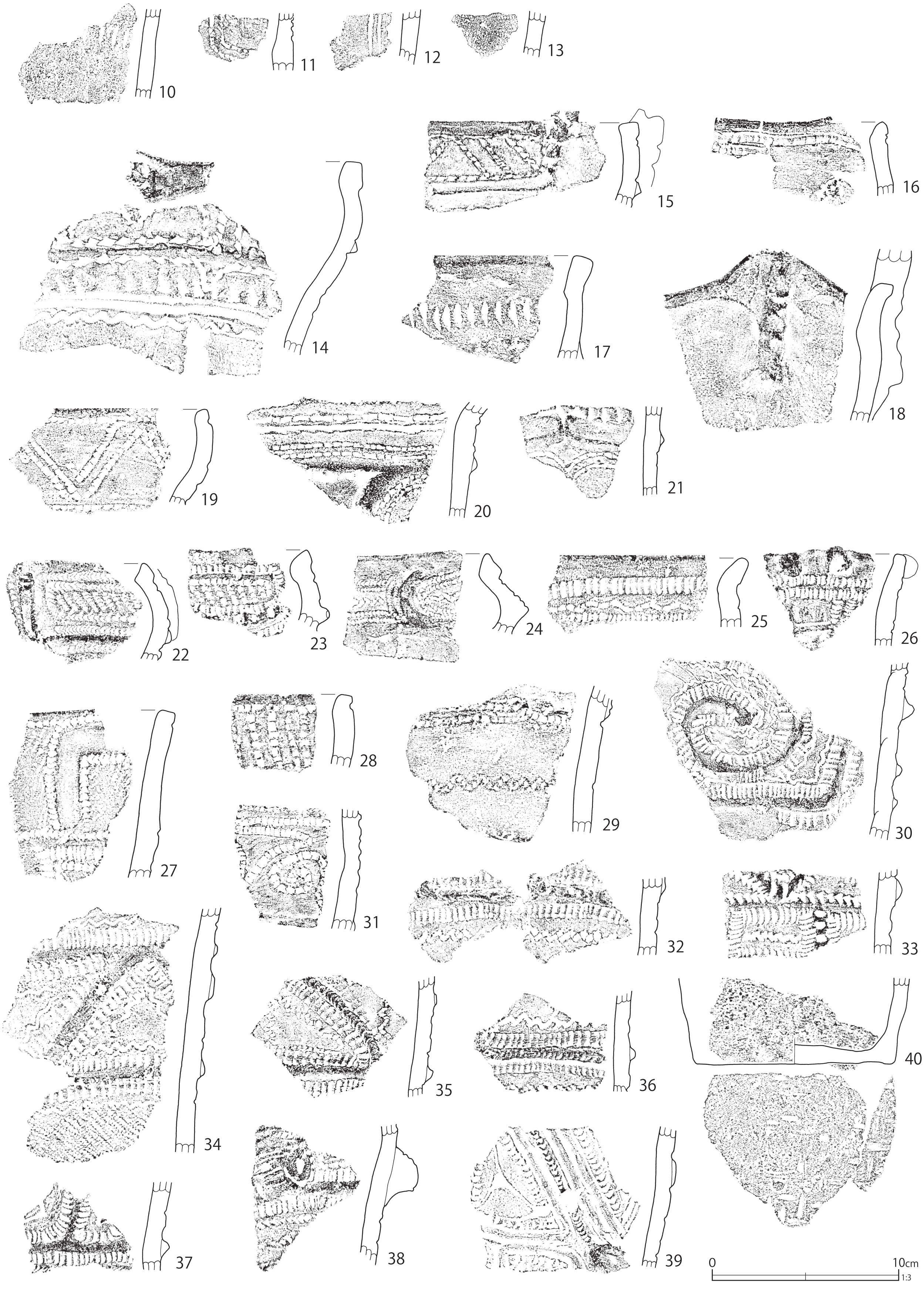
42～44は土器片を利用した土製円盤で、42は角押文を施文する破片を使用している。

石器は45～54が出土した。

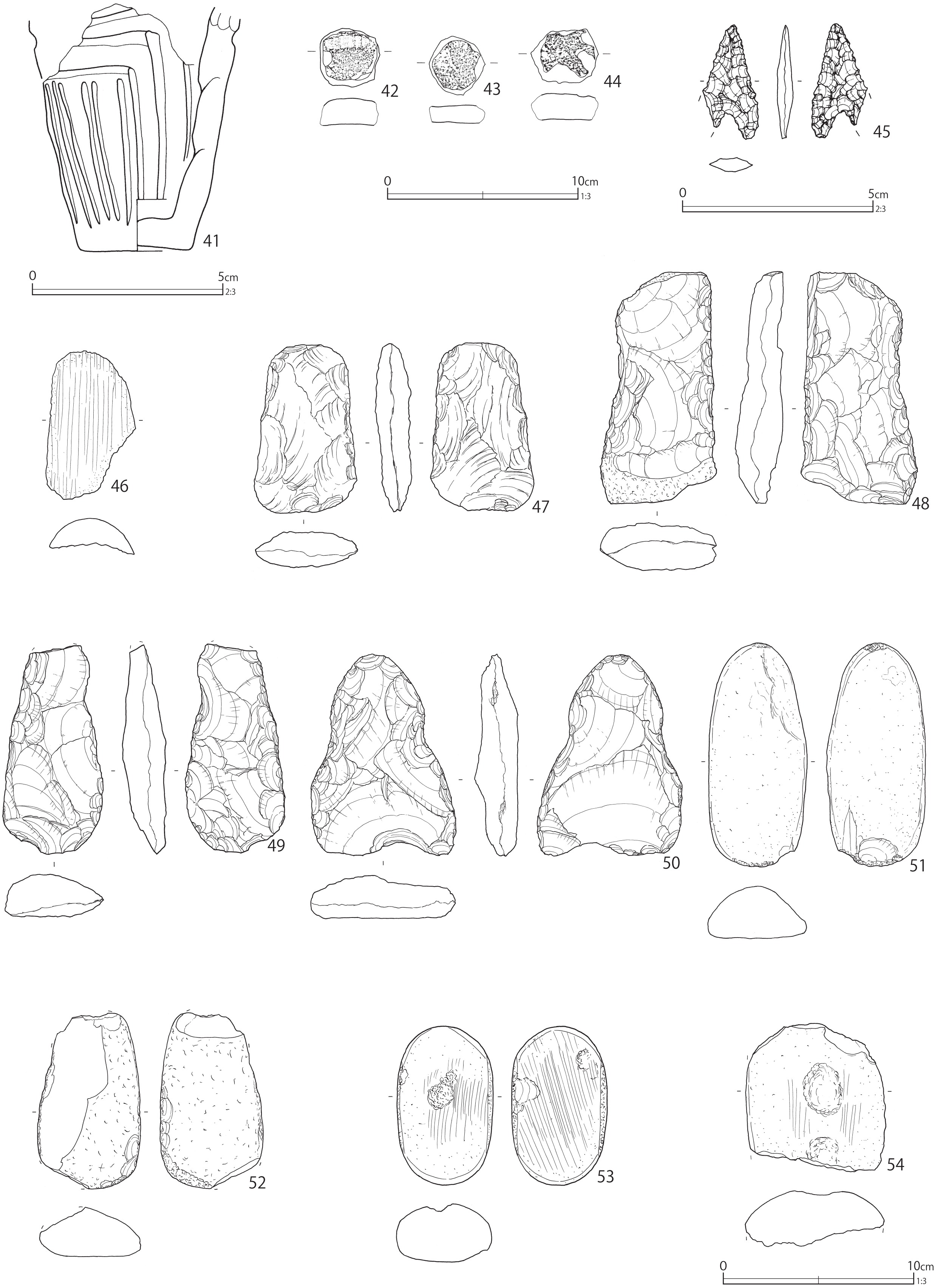
45は石鏃で、両側縁が鋸歯状である。正面左脚部が欠けている。

46は磨製石斧の破片である。

47～50は打製石斧である。47、48が短冊形を、49、50が撥形を呈する。刃部は片刃の48を除き、



第477図　第60号住居跡出土遺物（3）



第478図　第60号住居跡出土遺物（４）

第189表　第60号住居跡出土石器観察表（第478図）

番　号	器　種	分類	石　材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備　考
478 － 45	石鏃	Ⅰ2②	チャート	3.0	[1.5]	0.4	1.3	
46	磨製石斧	Ⅴ②イ	安山岩	[7.8]	[4.7]	[2.2]	71.9	
47	打製石斧	Ⅲ2①イ	ホルンフェルス	8.8	5.4	1.9	107.3	
48	打製石斧	Ⅲ2①イ	ホルンフェルス	[12.2]	6.1	2.5	187.7	
49	打製石斧	Ⅲ2②イ	ホルンフェルス	[11.0]	5.2	2.3	130.6	
50	打製石斧	Ⅲ1①イ	ホルンフェルス	10.6	7.6	2.3	186.5	
51	敲石	Ⅱ1①イ	砂岩	11.8	5.2	2.9	260.8	
52	敲石	Ⅱ3②イ	砂岩	[9.2]	5.4	2.6	161.2	
53	磨石	Ⅱ1-2①イ	安山岩	8.3	5.0	3.1	219.7	
54	磨石	Ⅱ2②イ	安山岩	[7.8]	[7.4]	[31]	244.4	

全て両刃である。

51、52は敲石である。ともに断面形が隅丸三角形状を呈する自然礫を用いており、下面に敲打痕を有する。

53、54は磨石で、ともに正面に凹痕を有する。

第61号住居跡（第479図～第485図）

Ｊ－17・18区に位置する。北東側に第59号住居跡、北西側に第67号住居跡が隣接する。住居跡の平面形はほぼ円形を呈し、規模は直径約5.3ｍ、深さ0.5ｍである。

壁溝は北側の奥壁部で重複した２本が検出された。新しい壁溝１は円形の住居跡の壁に沿って全周し、大半が壁溝１の撹乱を受けている古い壁溝２は北壁側で一部のみ現存している。

壁は床面から直に立ち上がり、上部でやや緩やかに立ち上がる。

柱穴は合計17基検出された。柱穴が５箇所で２基ずつ重複することから、５本主柱住居跡の建て替えの可能性が考えられる。

柱穴の重複や、覆土、配置関係から壁溝１に伴う新段階の住居跡の柱穴は、Ｐ８、10、１、４、５の５基と判断され、壁溝２に伴う古段階の住居跡は、Ｐ７、９、２、３、６の５基と判断される。いずれも５本主柱の住居跡で、２軒の住居跡が重なっていたことが理解される。

主柱穴の深さは、Ｐ１＝70cm、Ｐ２＝60cm、Ｐ３＝63cm、Ｐ４＝73cm、Ｐ５＝60cm、Ｐ６＝52cm、Ｐ７＝72cm、Ｐ８＝68cm、Ｐ９＝65cm、Ｐ10＝73cmを測る。

炉跡は石囲炉で、中央部やや北寄りに構築されていた。炉は、８個の細長い礫を円形に組み、西側の礫に寄り沿う形で深鉢の胴部破片が出土した。破片の下側には円形の窪みがあり、埋設されていた炉体土器の一部が残存していた可能性もある。その場合、炉は石囲埋甕炉となろう。また、土器片が古い住居跡の炉体土器の一部である可能性もあり、その場合旧炉は埋甕炉となろう。炉はほぼ円形を呈し、規模は長径73cm、短径70cm、深さ23cmである。

埋甕は検出されなかった。

本住居跡は炉跡と柱穴の配置から、２軒の重複であることは明らかであり、柱穴の移動も少しで、炉も上下に重なることから、第60号住居跡と同様に、同一居住者による継続的な建て替えの可能性が高いと判断される。

本住居跡は炉内出土土器から、勝坂式新段階の所産であると思われる。

遺物は第480図１、第482図２～第485図86の土器類、石器類が出土した。

土器は1～59である。

９、10はＰ１、11～13はＰ２、14はＰ４、15、16はＰ５、17はＰ７、18、19はＰ８、21、22はＰ11からの出土である。

１は内湾する無文の口縁部が開くキャリパー形深鉢の胴部破片で、刻み隆帯で頸部を区画し、

胴部に楕円区画を施している。区画内には沈線の三叉文を施文する。モチーフ間に加飾を施さず、沈線文のみ施文することから、勝坂式終末期の可能性もある。

２は口縁部が緩やかな双頭状の波状口縁を呈し、外反気味に立つ部分に縦位の沈線を施文し、内湾する部分に低隆帯で円形文や半円文を区画している。低隆帯の縁には刻みを施している。

３は円筒形土器の蛇頭把手で、頭を左に向けて、「ハ」字状刻みを施した隆帯を垂下する。

４は内湾する口縁部が開く器形の深鉢で、渦巻き状隆帯の把手を中心に、緩い波状を呈する。口唇部から渦巻き状隆帯と刻みを施す隆帯が、頸部区画文で垂下する。地文は撚糸文Ｌである。

５は胴部の区画文が残る破片で、刻み隆帯と交互刺突を施した隆帯で横位区画を行い、区画隆帯から縦位の隆帯を垂下して、胴部を縦分割している。縦位区画した文様帯の幅は、交互刺突を施した隆帯が狭くなっており、胴上半部と連携しているようである。

６は口縁部が大きく内湾しながら開く器形で、口縁部に幅広の楕円区画文を隆帯で区画している。地文には撚糸文Ｌを施文する。

７は口縁部が短く屈曲する器形で、頸部をナゾリ状の沈線で区画している。地文は口縁部に撚糸文Ｌを横位施文し、頸部から胴部にかけて縦位施文する。

８は底部破片で、少し張り出す底部まで撚糸文Ｌを施文する。

23、24は勝坂式古段階の土器群で、23は波頂部に捻りの入った突起から鋸歯状に隆帯を垂下して口縁部を区画し、隆帯脇に爪形文を施文する。24は断面三角形の隆帯で楕円区画を施し、区画に沿って爪形文と平行結節沈線を施文する。

25 ～ 32は口縁部破片で、25、26、30、32は口縁部が内湾して開く深鉢で、27 ～ 29、31は円筒形土器と思われる。25は多喜窪系の器形で、交互刻みと背割状低隆帯で口縁部に円形モチーフを描くもので、余白に小さな入組文を施文する。26は口縁部に放射状の刻みを施す円形瘤を有する。30は口縁部に逆「Ｕ」字状隆帯を施文している。32は内湾する口縁部に、足の長い蓮華状文と三叉文を組み合わせたモチーフを施文する。32は藤内式の新段階あたりになろうか。

27は細かな刻みと交互刺突を施す隆帯でモチーフを描き、28は沈線で区画文等を施文する。29は波状口縁を呈し、波頂部から垂下する刻み隆帯と、渦巻隆帯文を派生する。31は交互差し切り文で縁取られた蛇行爪形文を施文する。

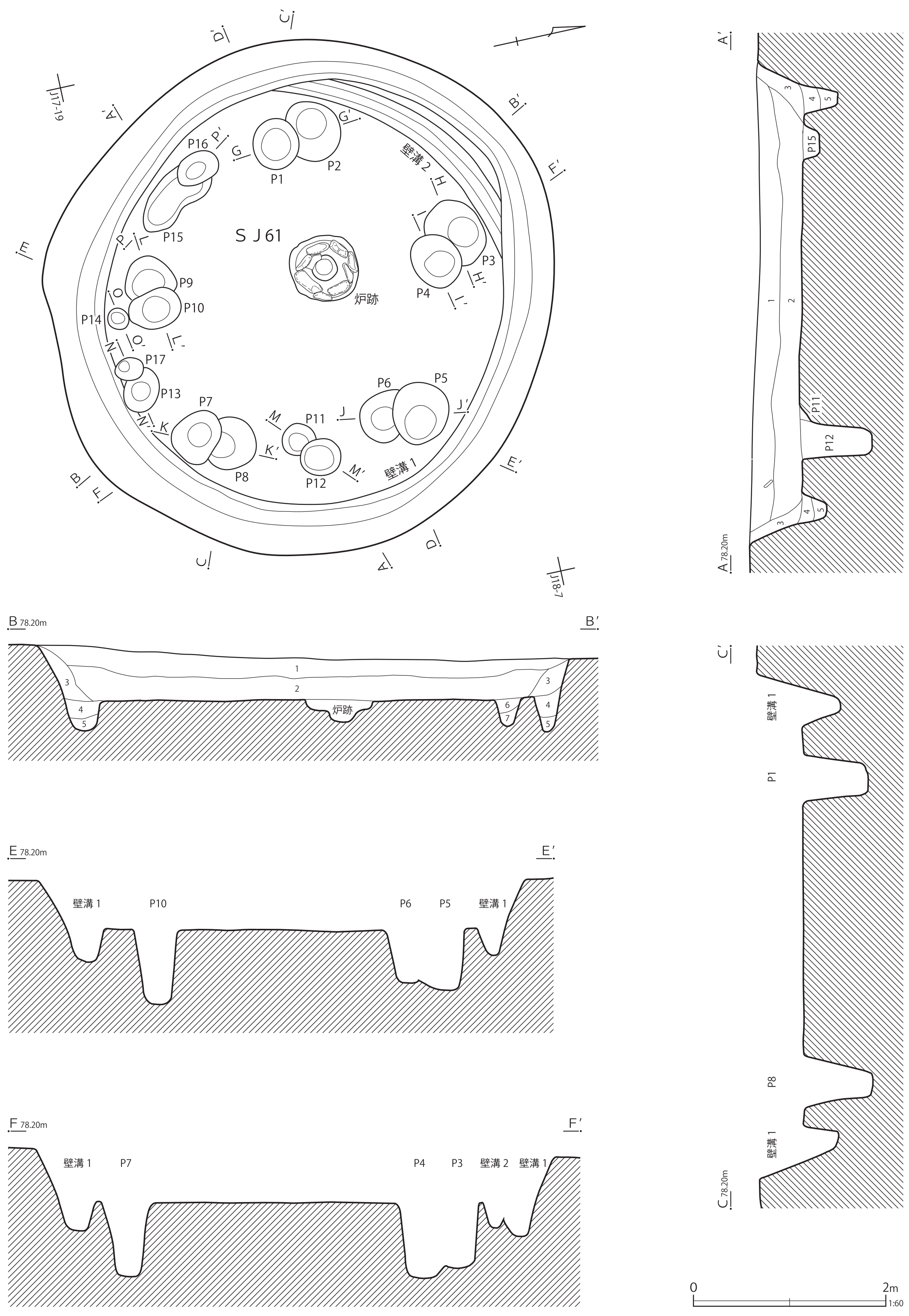
33 ～ 39は口縁部から頸部にかけての破片で、大半はキャリパー形深鉢である。刻み隆帯や背割隆帯でモチーフを描き、区画内に沈線文を施文するものや、沈線モチーフを展開するものである。頸部を無文帯にするものが多いが、35は口縁部の地文に撚糸文Ｌを施文する。38は胴部に撚糸文Ｌを施文する。

40 ～ 44は胴部破片で、刻み隆帯の区画に沈線が沿い、区画内に爪形文を伴う三叉文や、沈線の三叉を施文する。42 ～ 44は円筒形土器の胴部で、42は単節ＬＲ縄文の縦位施文、43は撚糸文Ｌを施文する。

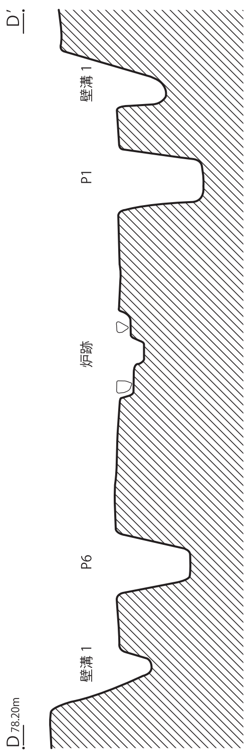
45、46は底部の破片で、45は刻み隆帯で楕円形区画を施し、46は交互刺突文を施した背割隆帯で円形区画文を施文する。

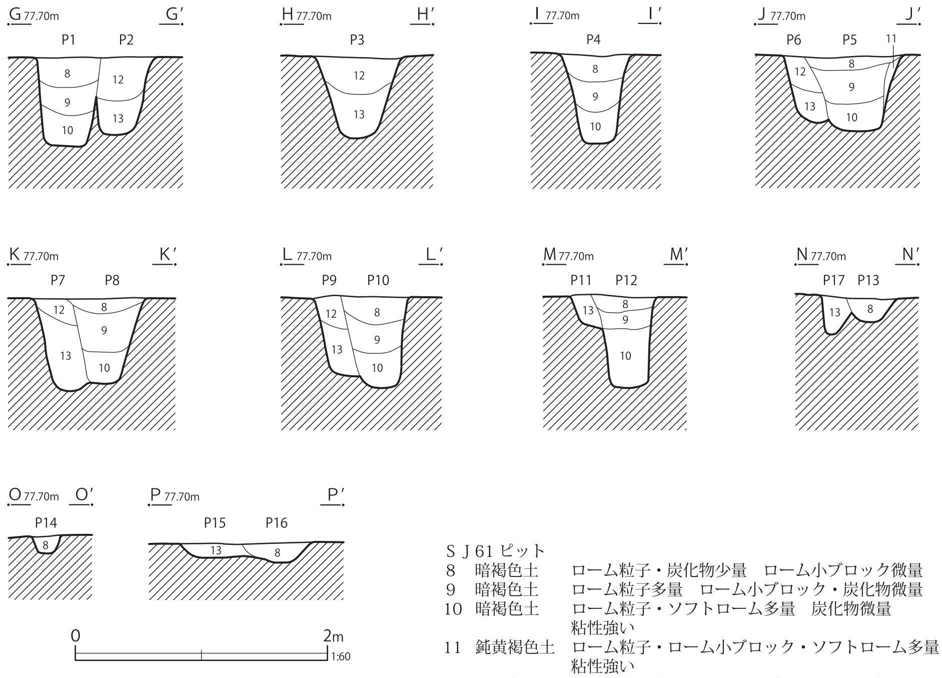
47 ～ 49は加曽利ＥⅠ式キャリパー形深鉢の口縁部破片で、47、49は撚糸地文上に２本隆帯で渦巻文を描く。50は口縁部が外反する器形で、口縁部に交互押圧を加えた隆帯を巡らせている。地文は撚糸文Ｌである。

51、52は加曽利Ｅ式の口縁部破片で、隆帯渦巻文を繋げるモチーフを描くもので、ＥⅡ式に比定されよう。53は頸部区画隆帯上に円形の瘤状文を添付し、胴部へと隆帯を垂下する。地文に単節ＲＬ縄文を縦位施文する。



第479図　第61号住居跡（１）



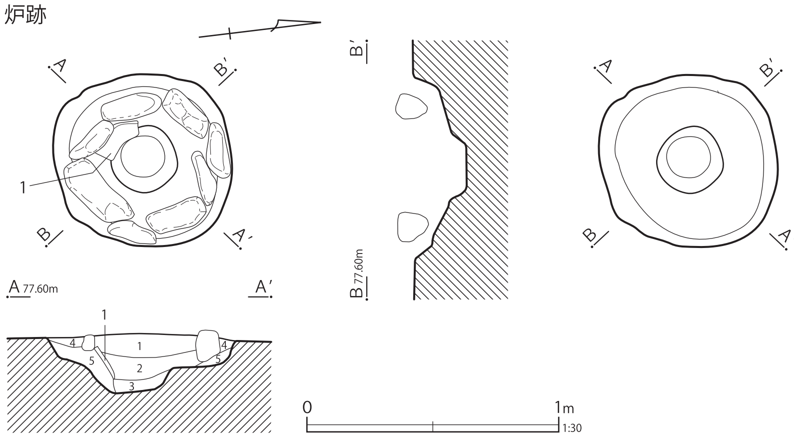


ＳＪ61
1　暗褐色土　ローム粒子少量　炭化物微量
　　　　　　褐色土をブロック状に多く含む
2　暗褐色土　ローム粒子多量　炭化物少量
　　　　　　焼土粒子・ローム小ブロック微量
3　褐色土　ソフトローム主体　炭化物微量
4　暗褐色土　ロームブロック少量　しまり悪い（壁溝 1）
5　暗黄褐色土　ロームブロック多量（壁溝 1）
6　暗褐色土　ローム粒子多量（壁溝 2）
7　暗黄褐色土　ローム粒子多量（壁溝 2）

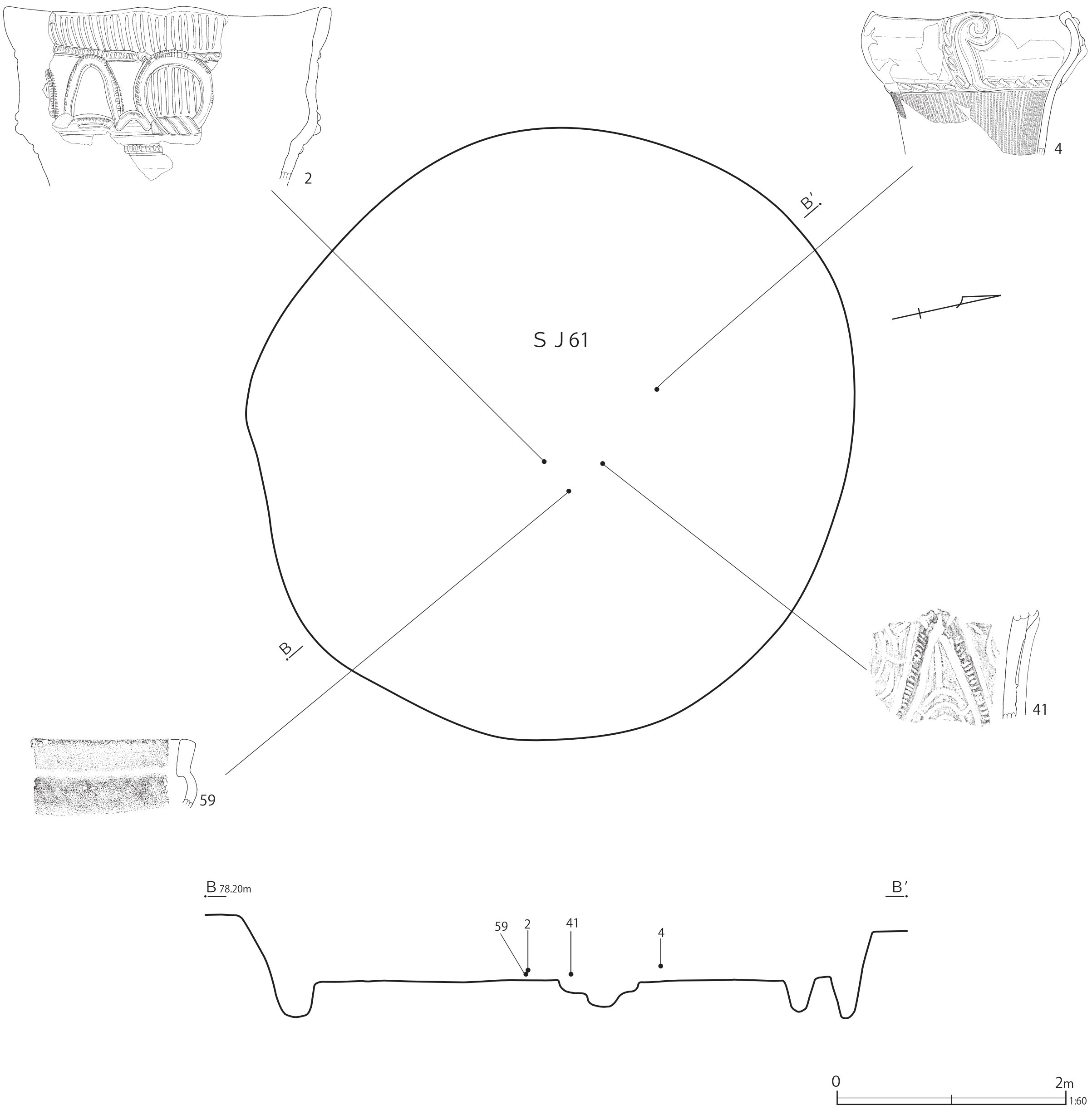
ＳＪ61 ピット
8　暗褐色土　ローム粒子・炭化物少量　ローム小ブロック微量
9　暗褐色土　ローム粒子多量　ローム小ブロック・炭化物微量
10　暗褐色土　ローム粒子・ソフトローム多量　炭化物微量
　　　　　　粘性強い
11　鈍黄褐色土　ローム粒子・ローム小ブロック・ソフトローム多量
　　　　　　粘性強い
12　暗褐色土　ローム粒子多量　ローム小ブロック・炭化物少量
　　　　　　焼土粒子微量　しまり非常に良い
13　鈍黄褐色土　ローム粒子・ソフトローム多量

ＳＪ61 炉跡
1　暗褐色土　ローム粒子・焼土粒子少量
　　　　　　炭化物・焼土ブロック（径 1cm）・
　　　　　　ローム小ブロック微量
2　暗褐色土　ローム粒子多量　炭化物・ローム小ブロック少量
　　　　　　焼土粒子微量　ソフトロームを混入
3　暗褐色土　ローム粒子・ローム小ブロック多量　炭化物少量
4　暗褐色土　ローム粒子少量
5　暗褐色土　ローム粒子多量

炉跡



第480図　第61号住居跡（２）・出土遺物（１）



第481図　第61号住居跡遺物出土状況

54は２本沈線間に単節ＬＲ縄文を施文するものであり、後期初頭の可能性もある。

55 ～ 57は底部で、55、57は少し張り出す底部の上まで撚糸文Ｌを施文する。56は撚糸文Ｒを施文する。

58、59は口縁部が内湾する浅鉢である。

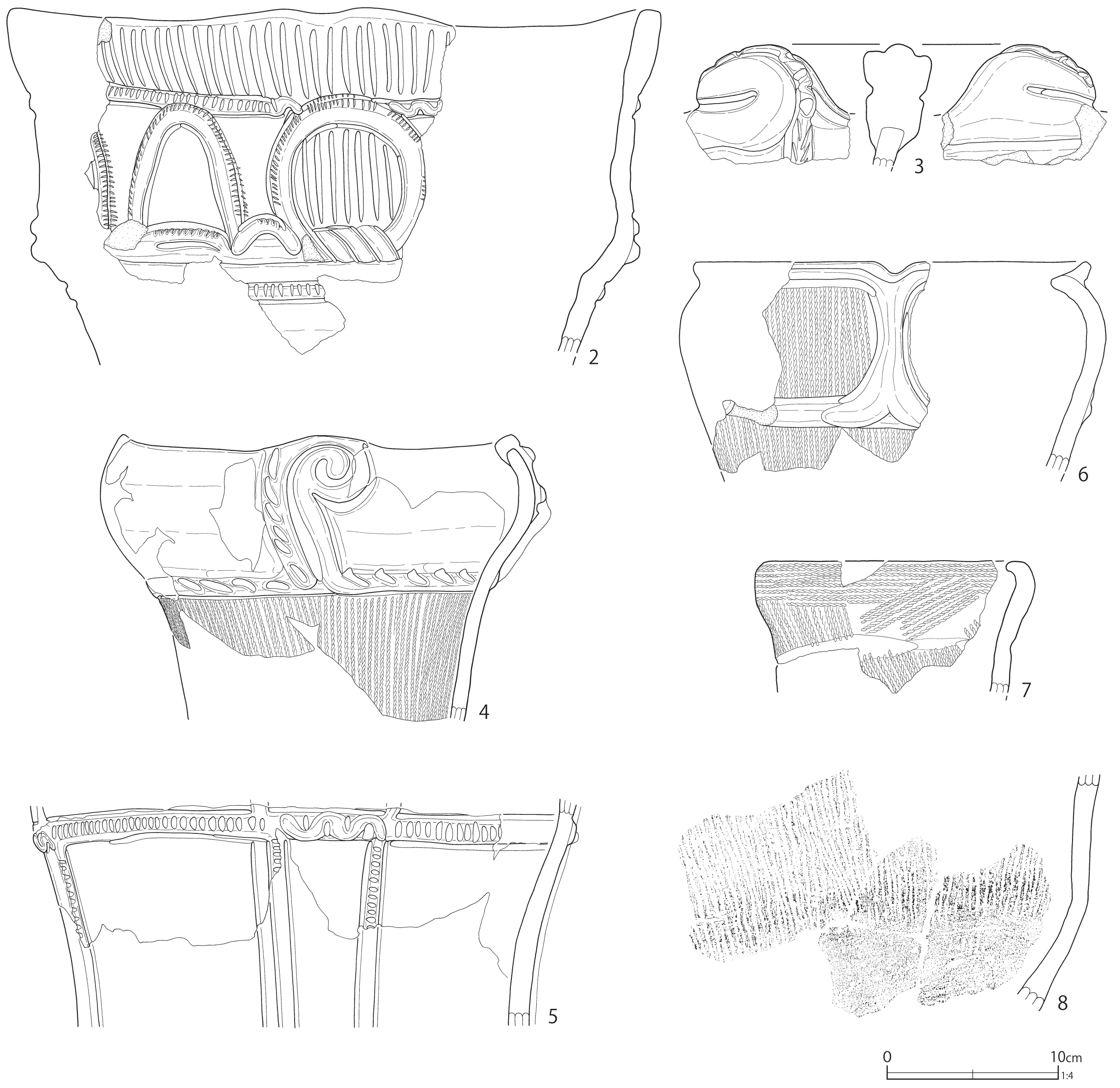
土製品では、60 ～ 71は土器片を利用した土製円盤である。

石器は72 ～ 86が出土した。

72は粗粒の石材を素材として用いたスクレイパーで、周縁に刃部を有する。刃部は主に片面加工によって整形されている。

73は磨製石斧の破片である。74は磨製石斧の未成品である。整形時に施されたと思われる敲打痕が残っており、研磨も粗い。下半部が欠損したことにより、製作途中で廃棄されたと考えられる。

75 ～ 82は打製石斧である。75、76が短冊形を呈し、刃部はともに両刃である。特に、76は刃



第482図　第61号住居跡出土遺物（２）

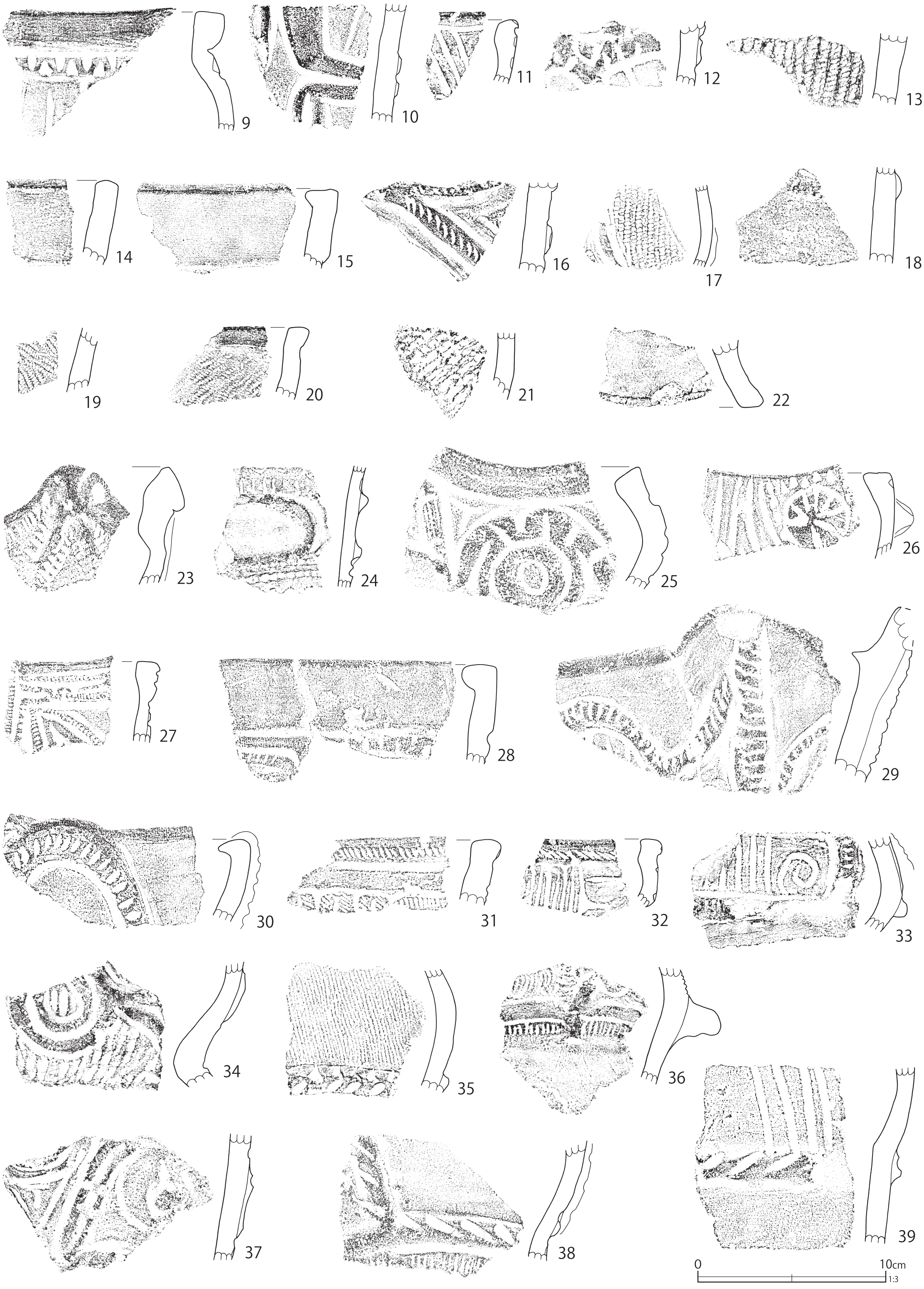
第190表　第61号住居跡柱穴計測表（第479・480図）

ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)
P１	52.0	70.0	P２	65.0	60.0	P３	70.0	63.0	P４	55.0	73.0	P５	65.0	60.0
P６	56.0	52.0	P７	58.0	72.0	P８	55.0	68.0	P９	50.0	65.0	P10	55.0	73.0
P11	35.0	25.0	P12	43.0	72.0	P13	46.0	28.0	P14	23.0	12.0	P15	(85.0)	12.0
P16	45.0	15.0	P17	30.0	30.0									

第191表　第61号住居跡出土復元土器観察表（第480・482図）

番号	器高(cm)	口径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	備　考
480-1	[10.7]	(33.4)	-	-	20%
482-2	[20.3]	(38.2)	-	-	30%
3	[7.0]	-	-	-	10%
4	[16.7]	(22.8)	-	-	40%

番号	器高(cm)	口径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	備　考
482-5	[13.1]	-	(32.4)	-	30%
6	[12.3]	(22.4)	(24.8)	-	30%
7	[7.7]	(14.4)	(16.6)	-	20%
8	[13.8]	-	-	-	20%



第483図　第61号住居跡出土遺物（3）

第484図　第61号住居跡出土遺物（４）

第485図　第61号住居跡出土遺物（5）

第192表　第61号住居跡出土石器観察表（第485図）

番　号	器　種	分類	石　材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備　考
485 － 72	スクレイパー	Ⅱ2①イ	ホルンフェルス	4.3	4.5	0.8	18.3	
73	磨製石斧	Ⅴ②イ	砂岩	[6.2]	[2.9]	[1.9]	12.3	
74	磨製石斧	Ⅳ②イ	砂岩	[10.5]	4.7	3.0	209.7	
75	打製石斧	Ⅱ2①イ	緑泥片岩	9.9	3.7	1.5	73.3	
76	打製石斧	Ⅱ2①イ	ホルンフェルス	10.5	4.8	1.9	115.4	
77	打製石斧	Ⅲ2①イ	ホルンフェルス	10.0	6.3	3.0	156.8	
78	打製石斧	Ⅲ2①イ	ホルンフェルス	8.8	6.5	2.3	121.9	
79	打製石斧	Ⅲ2②イ	ホルンフェルス	8.6	[7.5]	1.9	124.9	
80	打製石斧	Ⅲ2①イ	ホルンフェルス	10.7	5.0	2.6	125.6	
81	打製石斧	Ⅱ2②イ	ホルンフェルス	[6.3]	[3.6]	1.6	44.5	
82	打製石斧	Ⅲ2②イ	ホルンフェルス	[9.2]	5.8	[2.8]	163.4	
83	抉り入り石器	①イ	安山岩	8.4	10.4	3.0	335.7	
84	磨石	Ⅱ1①イ	砂岩	7.2	4.9	4.0	202.1	
85	磨石	Ⅰ1②ア	ホルンフェルス	9.2	8.3	4.2	454.2	
86	磨石	Ⅱ1②ア	閃緑岩	8.3	[7.7]	4.0	361.8	裏面一部黒色化

部に擦痕が認められる。77～80は撥形を呈する。刃部は、片刃の80を除き、全て両刃である。その他、81が基部片、82が両刃の刃部片である。

83は粗粒石材を素材に利用しており、両側縁には、抉りが加えられている。

84～86は磨石で、85の周縁には整形が施されている。

第62号住居跡（第486図～第493図）

Ｈ・Ｉ－19区に位置する。南東側の壁の一部で第56号住居跡と重複するが本住居跡の方が新しい。また、北西側で第63号住居跡、第81号集石土壙及び第132号土壙と重複するが、いずれも本住居跡の方が新しい。住居跡の平面形は南北に若干細長い楕円形で、規模は長径6.7m、短径6.6m、深さ0.45mである。

壁は比較的緩く立ち上がる。

壁溝は２本検出され、外側の壁溝１は住居跡のプランに沿って全周し、内側の壁溝２は北側から東側にかけて壁溝１と重複して壊されている。壁溝１が新しく、壁溝２が古い。

柱穴は合計29基検出された。それぞれ柱穴が２～４基重複する部分が８箇所程あり、新旧の壁溝に対応しているものと思われるが、正確に対応関係を把握することは難しい。

柱穴の切り合い、覆土、配置関係から、壁溝1に伴い最も新しいと思われる柱穴はＰ１、３、７、11、13、17の６基が想定される。

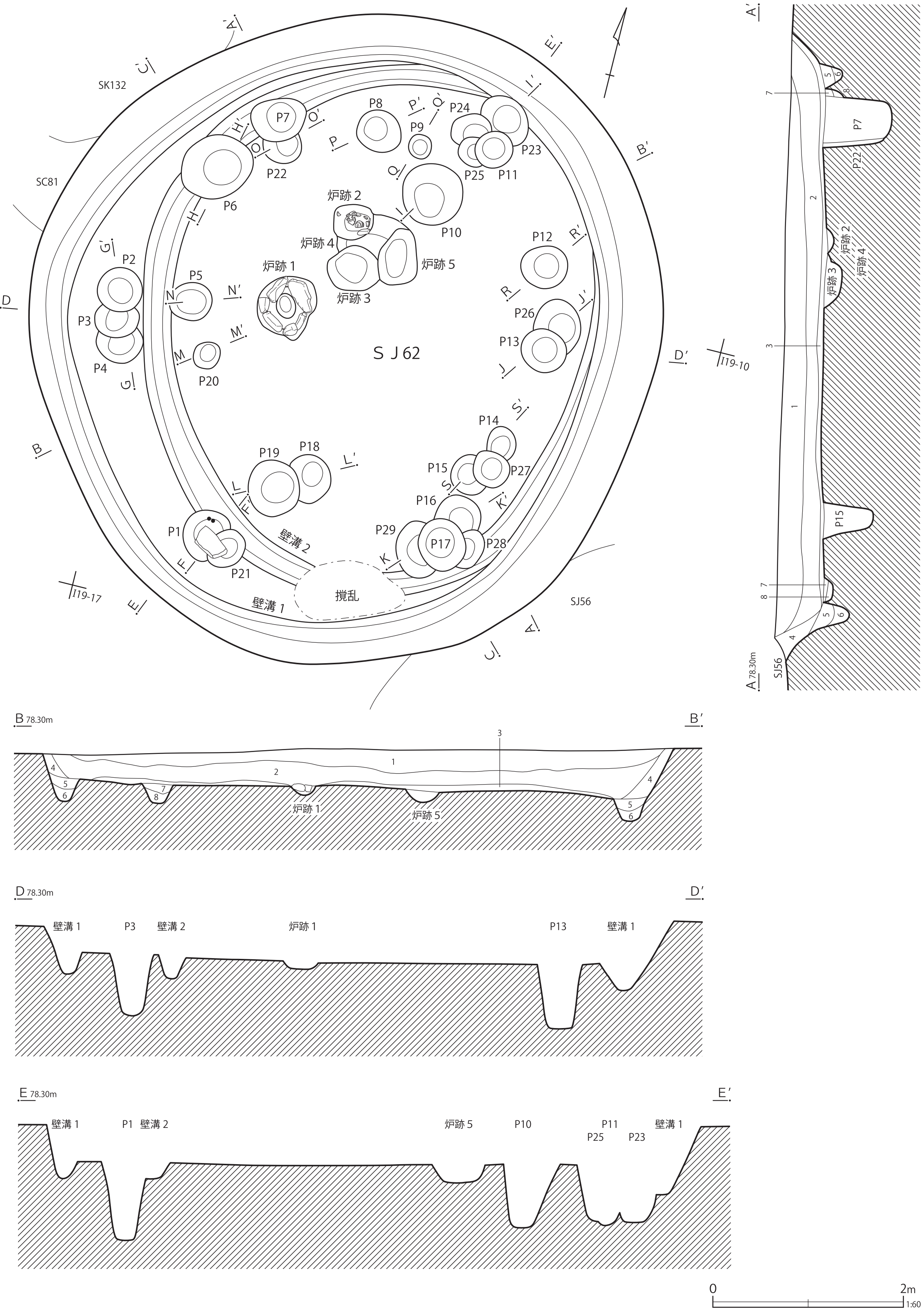
また、壁溝２に伴うと思われる柱穴はＰ18、５、22、25、12、14の６基が想定される。

いずれも６本主柱の住居跡が想定されるが、新旧に想定した柱穴は、それぞれ１～２基、多い時は３基との重複や、近接して柱穴が存在している。正確な組み合わせは難しいが壁溝１の段階で２回の、壁溝２の段階で１回の建て替えがあり、少なくとも合計５軒以上の住居跡が重なっていたことが理解される。

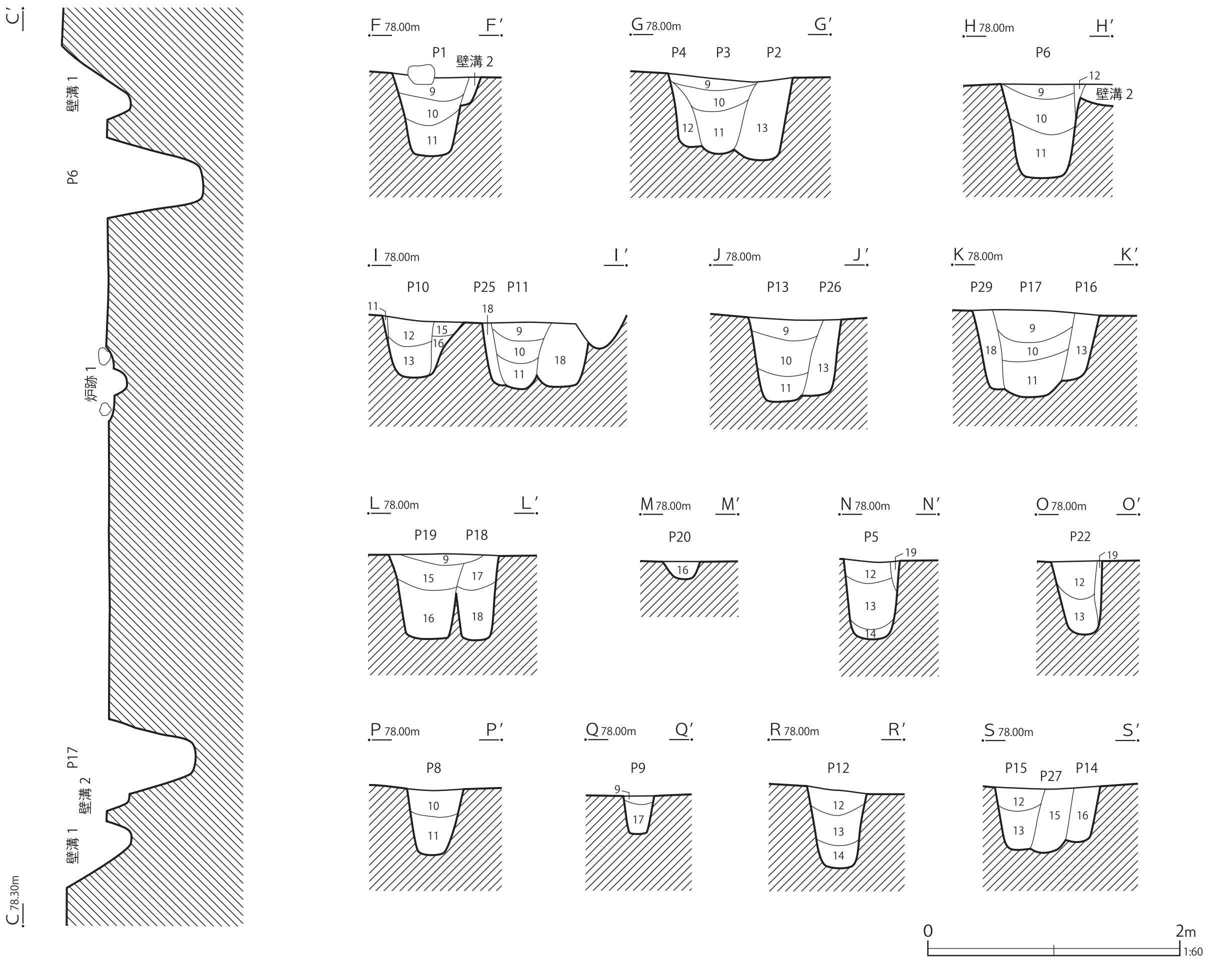
主柱穴の深さは、Ｐ１＝62cm、Ｐ３＝58cm、Ｐ５cm＝62cm、Ｐ７＝71cm、Ｐ11＝52cm、Ｐ12＝60cm、Ｐ13＝65cm、Ｐ14＝43cm、Ｐ17＝69cm、Ｐ18＝66cm、Ｐ22＝58cm、Ｐ25＝48cmである。

炉跡は中央部北寄りと西寄りに、合計５基が検出された。

最新の住居跡の炉跡１は中央部の西寄りに検出された石囲炉で、大小６個の礫を丸く並べたものである。炉床中央部に丸い窪みが存在することから、炉体土器が埋設されていた可能性がある。平面形は北東方向に細長い楕円形で、長径73cm、



第486図　第62号住居跡（1）



ＳＪ62
1　暗褐色土　ローム粒子少量　炭化物・焼土粒子微量
　しまり非常に良い
2　暗褐色土　ローム粒子多量　炭化物・焼土粒子少量
　焼土粒子炉跡周辺に多量　しまり非常に良い
3　暗褐色土　ローム粒子・ローム小ブロック多量
4　褐色土　ローム粒子・ソフトローム多量
5　暗褐色土　ローム粒子多量　炭化物微量（壁溝1）
6　暗褐色土　ローム粒子多量　炭化物少量　ローム小ブロック微量
　ソフトローム少量（壁溝1）
7　暗褐色土　ローム粒子多量　炭化物微量　ローム小ブロック少量
　ソフトローム少量　しまり非常に良い（壁溝2）
8　鈍黄褐色　ソフトローム主体　ローム粒子多量（壁溝2）

ＳＪ62ピット
9　暗褐色土　ローム粒子・炭化物少量　焼土粒子微量
10　暗褐色土　ローム粒子多量　炭化物少量　ローム小ブロック微量
　ソフトローム少量
11　褐色土　ローム粒子・ソフトローム多量
12　暗褐色土　ローム粒子多量　炭化物微量　ローム小ブロック少量
13　暗褐色土　ローム粒子少量　ローム小ブロック微量
14　暗褐色土　ローム粒子少量　粘性強い
15　鈍黄褐色土　ローム粒子・ロームブロック多量
　ソフトローム多量　粘性強い　埋め戻し土
16　鈍黄褐色土　ローム粒子多量　ローム小ブロック少量
　ソフトローム主体　粘性強い（埋戻し）
17　鈍黄褐色土　ローム粒子多量　ロームブロック密に多量
　ソフトローム多量　粘性強い（埋戻し）
18　鈍黄褐色土　ソフトローム主体　ローム粒子多量　粘性強い（埋戻し）
19　褐色土　ローム粒子・ローム小ブロック・ソフトローム多量

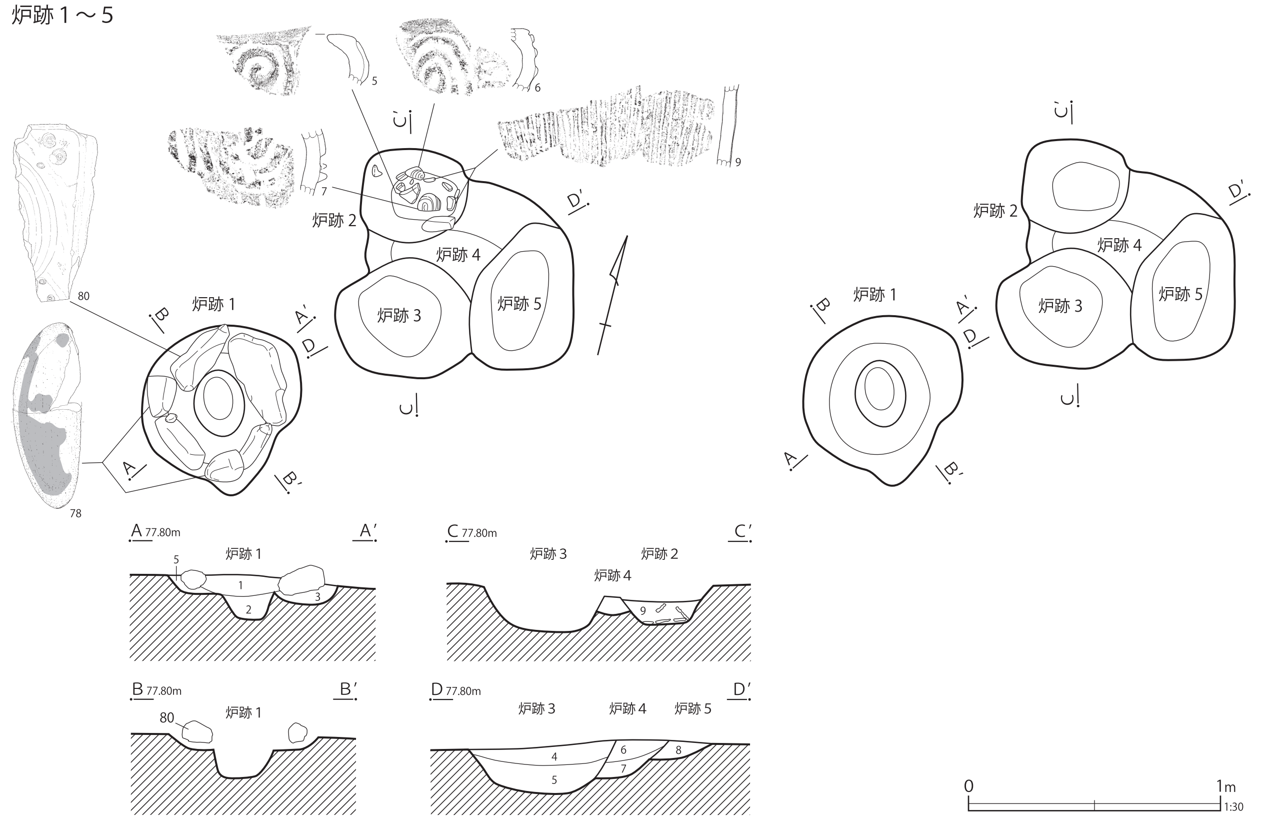
第487図　第62号住居跡（２）

第193表　第62号住居跡柱穴計測表（第486・487図）

ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)
Ｐ1	53.0	62.0	Ｐ2	47.0	63.0	Ｐ3	46.0	58.0	Ｐ4	47.0	55.0	Ｐ5	44.0	62.0
Ｐ6	77.0	74.0	Ｐ7	55.0	71.0	Ｐ8	49.0	51.0	Ｐ9	25.0	29.0	Ｐ10	65.0	45.0
Ｐ11	38.0	52.0	Ｐ12	49.0	60.0	Ｐ13	48.0	65.0	Ｐ14	(35.0)	43.0	Ｐ15	42.0	48.0
Ｐ16	46.0	51.0	Ｐ17	55.0	69.0	Ｐ18	50.0	66.0	Ｐ19	53.0	67.0	Ｐ20	28.0	13.0
Ｐ21	42.0	—	Ｐ22	39.0	58.0	Ｐ23	58.0	50.0	Ｐ24	42.0	—	Ｐ25	30.0	48.0
Ｐ26	(50.0)	60.0	Ｐ27	40.0	50.0	Ｐ28	44.0	—	Ｐ29	60.0	63.0			

短径70cm、深さ23cmである。

炉跡２から炉跡５は中央部やや北側に構築されており、炉床４基が重複している。炉跡３から炉跡５は土層観察では３→４→５の順に古くなり、



SＪ62炉跡
1　暗褐色土　ローム粒子少量　焼土粒子多量　炭化物少量
　　　　　　焼土ブロック（径１～2cm）微量
2　暗褐色土　ローム粒子多量　焼土粒子・炭化物少量
3　暗褐色土　ローム粒子多量　炭化物少量
　　　　　　ロームブロック微量（炉石の支え）
4　暗褐色土　ローム粒子少量　ローム小ブロック・焼土粒子微量
5　暗褐色土　ローム粒子多量　ローム小ブロック・焼土粒子少量
　　　　　　焼土ブロック（径１～2cm）微量
6　暗褐色土　ローム粒子少量　焼土粒子微量　炭化物少量
7　暗褐色土　ローム粒子・ローム小ブロック少量
　　　　　　焼土粒子・炭化物微量
8　暗褐色土　ローム粒子多量　ローム小ブロック・炭化物少量
9　暗褐色土　ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子・
　　　　　　炭化物・焼土ブロック・焼土ブロック（径１～４cm）少量

第488図　第62号住居跡（３）

最も古いと想定される炉は、炉跡５である。

炉跡２に関しては他の炉との新旧関係を把握できなかったが、土器片が出土していることから、およその時期が把握される。出土土器が加曽利ＥⅠ式並行期の中部高地系褶曲文土器であることから、炉跡２は石囲炉の次に新しい炉であることが想定される。

埋甕は検出されなかった。

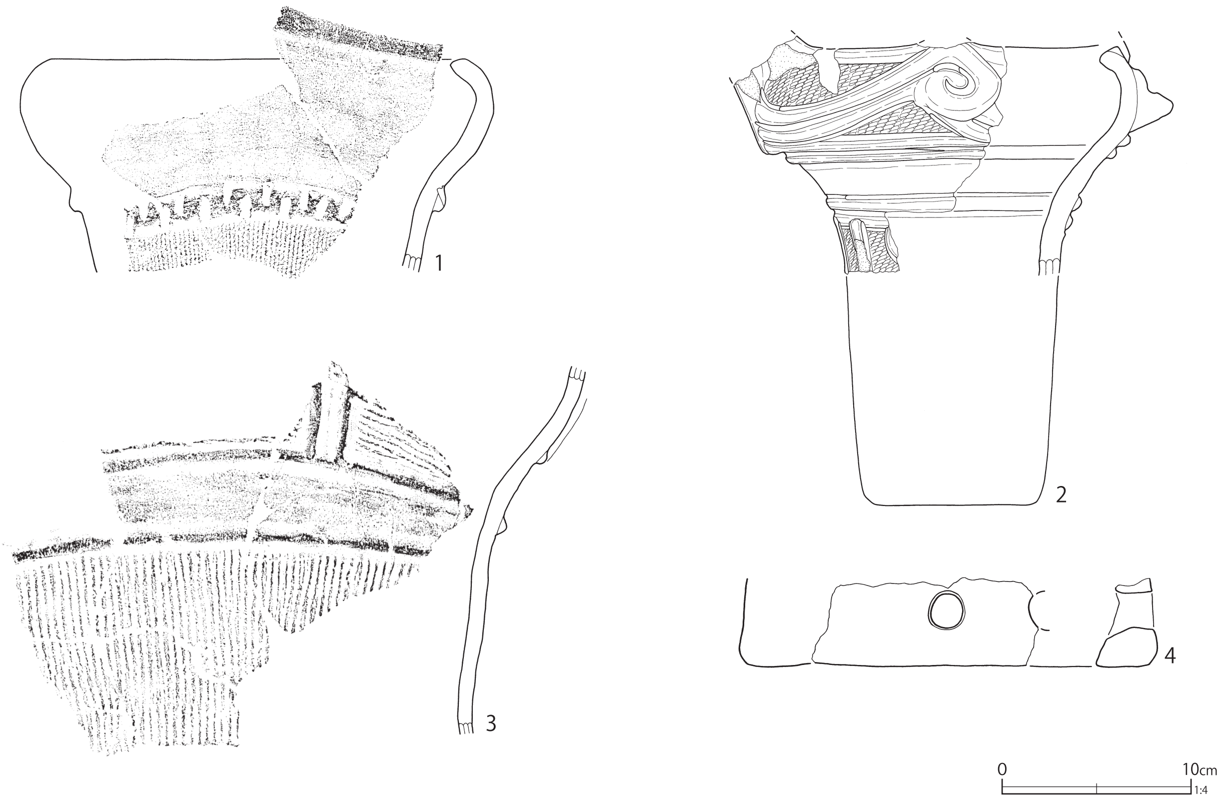
出土遺物は破片が多く、復元されるものは少なかった。住居跡の時期を決められる土器は炉内出土土器だけであり、最新の住居跡の時期は不詳であるが、覆土の土器群と合わせると住居跡は加曽利ＥⅠ式後半期の所産である可能性が高い。石囲炉や、壁溝を有し６本主柱であることから、加曽利ＥⅠ式後半期にかけての住居跡であろう。

炉の作り替えが５回であり、柱穴から推察される住居の重複関係も５回であることから、少なくとも５回の建て替えを推定することは整合的であろう。また、５回の建て替えに６本主柱が想定されることから、本住居跡は比較的短時間のうちに何度も建て替えられた可能性が高いと判断される。

遺物は第489図1～第493図80の土器類、石器類が出土した。

土器は１～62である。

５～10は炉跡２、11、12はＰ２、13～15はＰ３、16はＰ５、17、18はＰ７、19はＰ11、20はＰ13、21はＰ14、22、23はＰ15、24はＰ17、25はＰ18からの出土である。



第489図　第62号住居跡出土遺物（1）

第194表　第62号住居跡出土復元土器観察表（第489図）

番号	器高(cm)	口径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	備　考
489-1	[11.3]	(22.0)	-	-	30%
2	[12.6]	-	(19.8)	-	30%
489-3	[20.2]	-	-	-	40%
4	[4.7]	(21.3)	-	(21.2)	20%

１は内湾する無文の口縁部が開く器形で、頸部は交互刺突を施した隆帯で区画する。地文は撚糸文Ｌである。

２は頸部無文帯を有する加曽利Ｅ式土器で、口縁部に２本隆帯の渦巻文を繋ぐモチーフを施文する。地文は口縁部、胴部ともに単節ＲＬ縄文の縦位施文である。加曽利ＥⅠ式後半に比定されよう。

３は頸部無文帯を有し、口縁部と胴部に撚糸文Ｌを施文する。

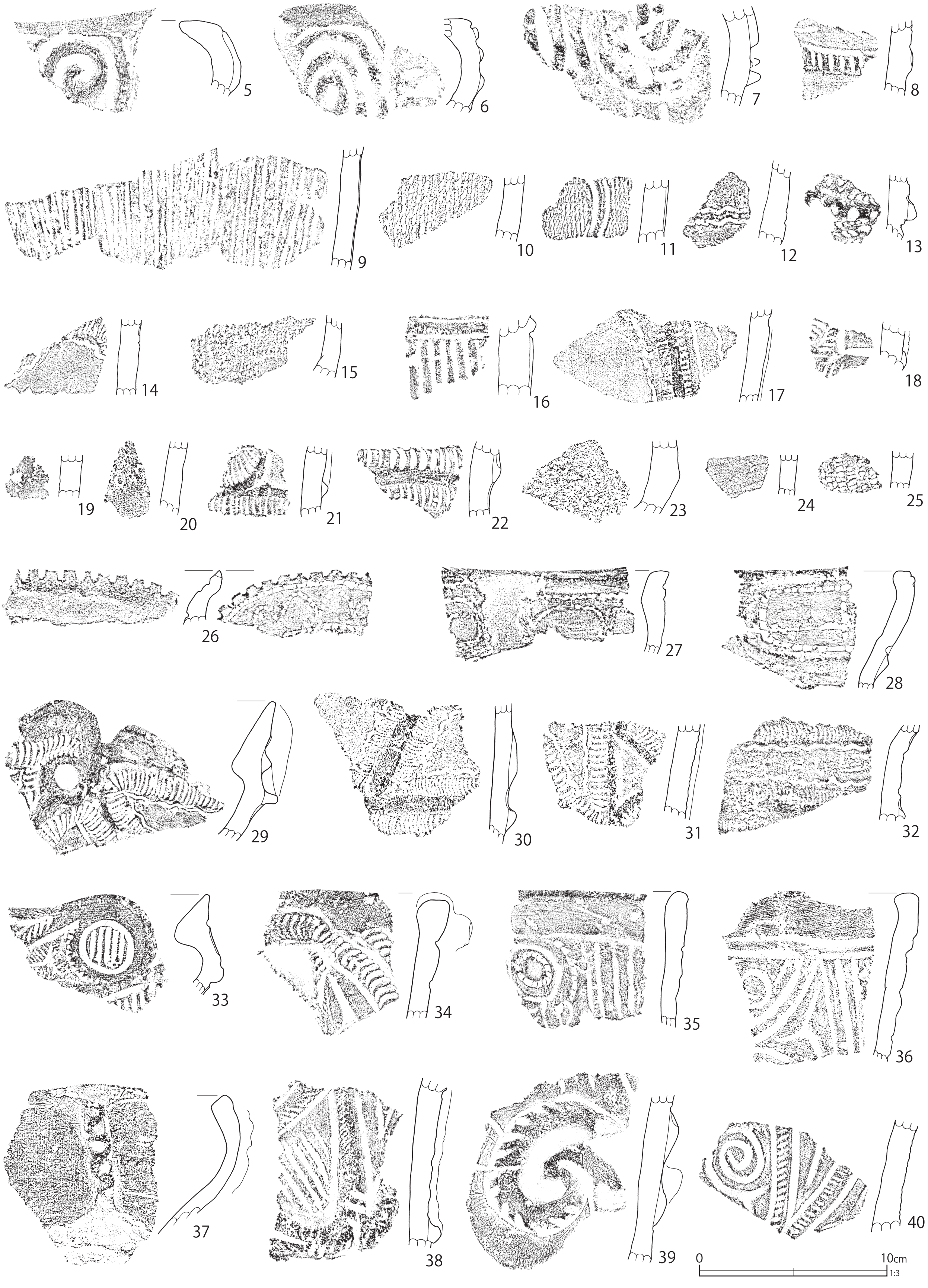
４は台形土器で、脚部の一部が現存する。

26 ～ 28は阿玉台式系土器で、隆帯脇に三角押文や角押文を単列で施文し、モチーフも単列で施文する。阿玉台Ⅰｂ式に比定されよう。

29 ～ 32は隆帯脇に細かな爪形文を施文し、波状沈線を沿わせている。勝坂式中段階の藤内式に比定されよう。33 ～ 46は勝坂式新段階から終末段階の土器群で、33、37は口縁部が内湾するキャリパー形土器である。他の多くは円筒形土器と思われる。隆帯の縁の刻み、「ハ」字状刻み、交互刺突文などを施した隆帯でモチーフを描き、余白には簡素な沈線モチーフを施文する。

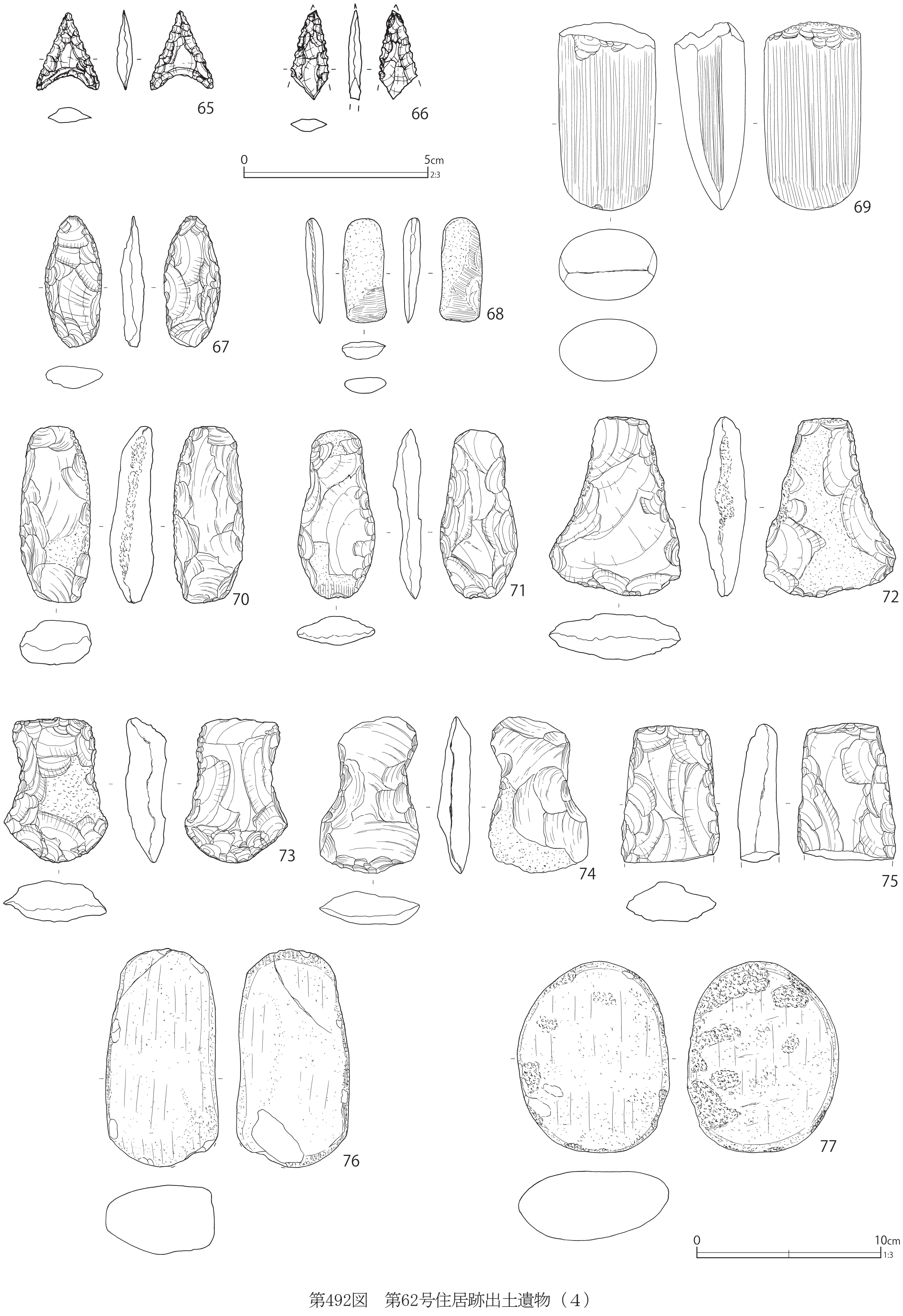
47 ～ 52は中部高地系の土器群で、47 ～ 50、52は隆帯の褶曲文系土器である。頸部に無文帯を設け、口縁部の下端は区画していない。51は頸部の区画帯に隆帯の籠目文を施文する。

53 ～ 58は加曽利Ｅ式キャリパー形深鉢で、53は口唇部が強く内折して幅広を呈し、口縁部に隆帯でモチーフを描く。54も口縁下部で強く屈曲し、上半が内折する。55は口縁部が緩く内湾し、２本隆帯で渦巻文を施文する。56は縦位沈線を

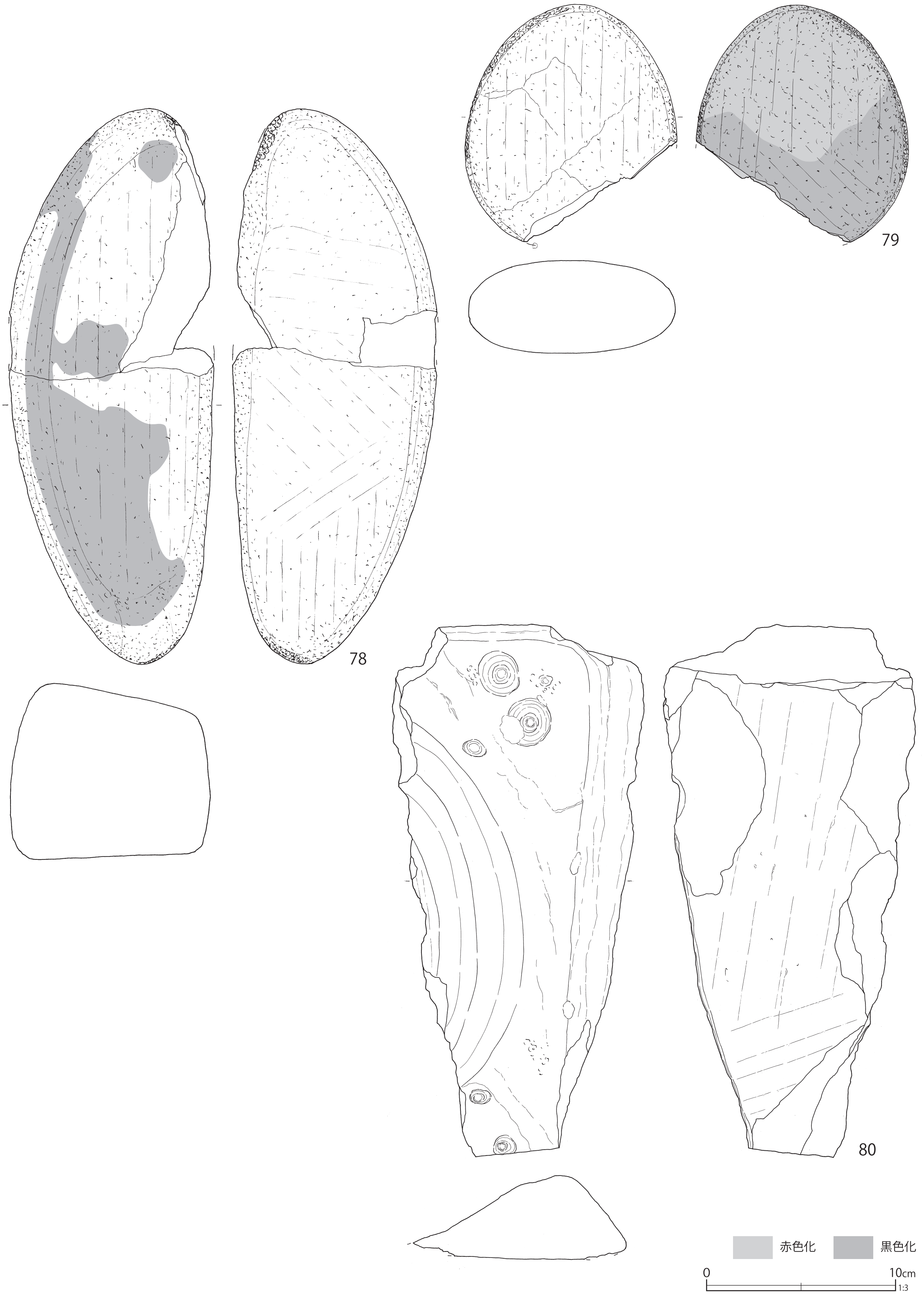


第490図　第62号住居跡出土遺物（２）

第491図　第62号住居跡出土遺物（3）



第492図　第62号住居跡出土遺物（４）



第493図　第62号住居跡出土遺物（５）

第195表　第62号住居跡出土石器観察表（第492・493図）

番　号	器　種	分類	石　材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備　考
492 － 65	石鏃	Ⅰ2①	頁岩	2.1	1.7	0.4	0.8	
66	石鏃	Ⅳ②	頁岩	[2.4]	[1.0]	0.4	0.7	
67	尖頭器	①イ	頁岩	7.1	3.1	1.3	30.8	
68	磨製石斧	Ⅲ①イ	砂岩	5.7	2.4	1.0	17.4	
69	磨製石斧	Ⅰ①イ	緑色岩	10.2	5.3	3.9	344.7	
70	打製石斧	Ⅱ2①イ	ホルンフェルス	9.6	3.9	2.4	118.4	
71	打製石斧	Ⅰ①イ	ホルンフェルス	9.2	4.2	1.6	57.3	
72	打製石斧	Ⅲ2①イ	安山岩	9.7	7.1	2.5	164.1	
73	打製石斧	Ⅲ1①イ	砂岩	7.9	5.6	2.3	104.5	
74	打製石斧	Ⅲ1①イ	ホルンフェルス	8.5	5.4	1.8	91.0	
75	打製石斧	Ⅲ2②イ	ホルンフェルス	[7.5]	5.3	2.2	113.5	
76	磨石	Ⅱ1-3②イ	ホルンフェルス	11.9	6.1	3.9	399.3	
77	磨石	Ⅰ1-3①イ	砂岩	10.5	8.3	3.8	464.0	
493 － 78	台石	Ⅳ①ア	砂岩	29.5	10.8	9.4	4887.5	表面一部黒色化
79	磨石	Ⅰ1②ア	砂岩	[12.6]	11.3	4.9	889.3	表面全部赤色化 裏面全部赤色・黒色化
80	石皿	Ⅳ②	緑泥片岩	[28.2]	[13.4]	4.9	2308.7	

施文する幅狭な口縁部文様帯を有する。

57は地文の撚糸文Ｒ上に半截竹管状工具の平行沈線で区画文や波状文を描く。

58は加曽利ＥⅠ式の口縁下端部の破片で、撚糸文Ｌ上に２本隆帯でモチーフを描く。

59、60は東関東系土器で、59は４単位の波状口縁で、口縁部に隆帯を巡らせて肥厚させている。地文に撚糸文Ｒを施文する。60は59の同一個体の波底部の破片と思われる。

61、62は胴部が屈曲する浅鉢で、61は低平隆帯で、62は沈線で、胴部に文様を施文する。

土製品では63のミニチュア土器と、64の土製円盤が出土した。63は頸部の括れ部を太沈線で区画し、張る胴部に撚糸文Ｌを施文している。64は土器片を利用した土製円盤である。

石器は65 ～ 80が出土した。

65、66が石鏃で、特に66の両側縁は鋸歯状である。66は先端と下半部が欠損している。

67は木葉形を呈する尖頭器である。素材には粗粒の石材が用いられている。

68は研磨の粗い小形の磨製石斧である。

69は乳棒状磨製石斧の刃部片で、刃こぼれが認められる。上半部が欠損した後、欠損面を使用面として敲石に再利用されている。

70 ～ 75は打製石斧である。70は短冊形を呈する両刃の打製石斧である。71 ～ 74は撥形を呈し、いずれも刃部が両刃である。また、72は刃部に擦痕が認められる。

76、77、79が磨石である。

78は炉跡１に転用された台石である。被熱により正面がやや黒色化している。

80も78同様、炉跡１に転用された石皿で、皿部の周縁に凹痕を有する。

第63号住居跡（第494図～第504図）

Ｈ・Ｉ－18・19区に位置する。南東側の壁の一部を第62号住居跡に壊されている。また、同じく南東側で重複する第81号集石土壙、第132号土壙は本住居跡よりも古い。住居跡の平面形は北西方向に若干変形する不整円形で、規模は径6.0ｍ、深さ0.5ｍ程である。

壁溝は検出されなかった。壁は床面からやや緩やかに立ち上がる。

柱穴は合計14基検出されたが、覆土、深さ及

び配置から主柱穴と思われるものはＰ１、13、７、４の４基と思われるが、Ｐ14が加わると５基の５本主柱の住居跡となる。他に組み合わない柱穴が存在することから、１回以上の建て替えがあった可能性が高い。また、柱穴が不揃いのため、それぞれの主柱穴を把握しかねる状況である。

なお、同様の覆土のＰ５は、底面付近から土器の底部が出土している。本住居跡とは時期の異なる柱穴の可能性がある。

また、炉跡２の南側の覆土下層に、約1.2ｍの幅で、3.5ｍの範囲に焼土を含む層が厚く堆積していた。

主柱穴の深さは、Ｐ１＝75㎝、Ｐ４＝65㎝、Ｐ７＝40㎝、Ｐ13＝68㎝、Ｐ14＝46㎝である。

炉跡は、遺構中央付近で３基検出された。いずれも掘り込みが深いことから埋甕炉で、炉体土器が抜き取られているものと思われる。

炉跡１には土器が残されており、被熱の影響は顕著でないが、本遺構の最終段階の炉跡と思われる。深鉢の胴下半部が残されていた。

炉跡２及び炉跡３の内面は被熱による焼土化が著しく、長期間の使用の結果と思われる。また、炉跡２、３とも覆土は非常に締りがよく、埋め戻されたものと思われる。

埋甕は検出されなかった。

炉跡が３箇所に存在することから、住居跡３軒分の重複の可能性があるが、主柱穴と炉跡との関係が明瞭ではなく、出土遺物が古いことから推定すると、４本主柱の住居跡が主軸方向を変えて建て替えられている可能性もある。

住居跡は炉体土器及び覆土出土土器から、勝坂式古段階の新道式期の所産と推定される。

遺物は第497図１～第504図125の土器類、石器類が出土した。

覆土の遺物は炉跡３の南側辺りに廃棄されていた礫集中を中心として、いわゆる吹上パターン状に出土した。この礫集中と焼土分布範囲との関係は不明であるが、遺物が礫を中心として分布する点や、焼土範囲からの出土が少ないことを考慮すると、覆土が堆積する途中で焼土範囲において活用され後に、少し間隔を空けて礫が廃棄され、それと同時か、間もなくして土器群も遺棄されたものと推定される。

99、100は炉跡２から、101は炉跡３から出土したものであるが、無文で、時期判定は難しい。

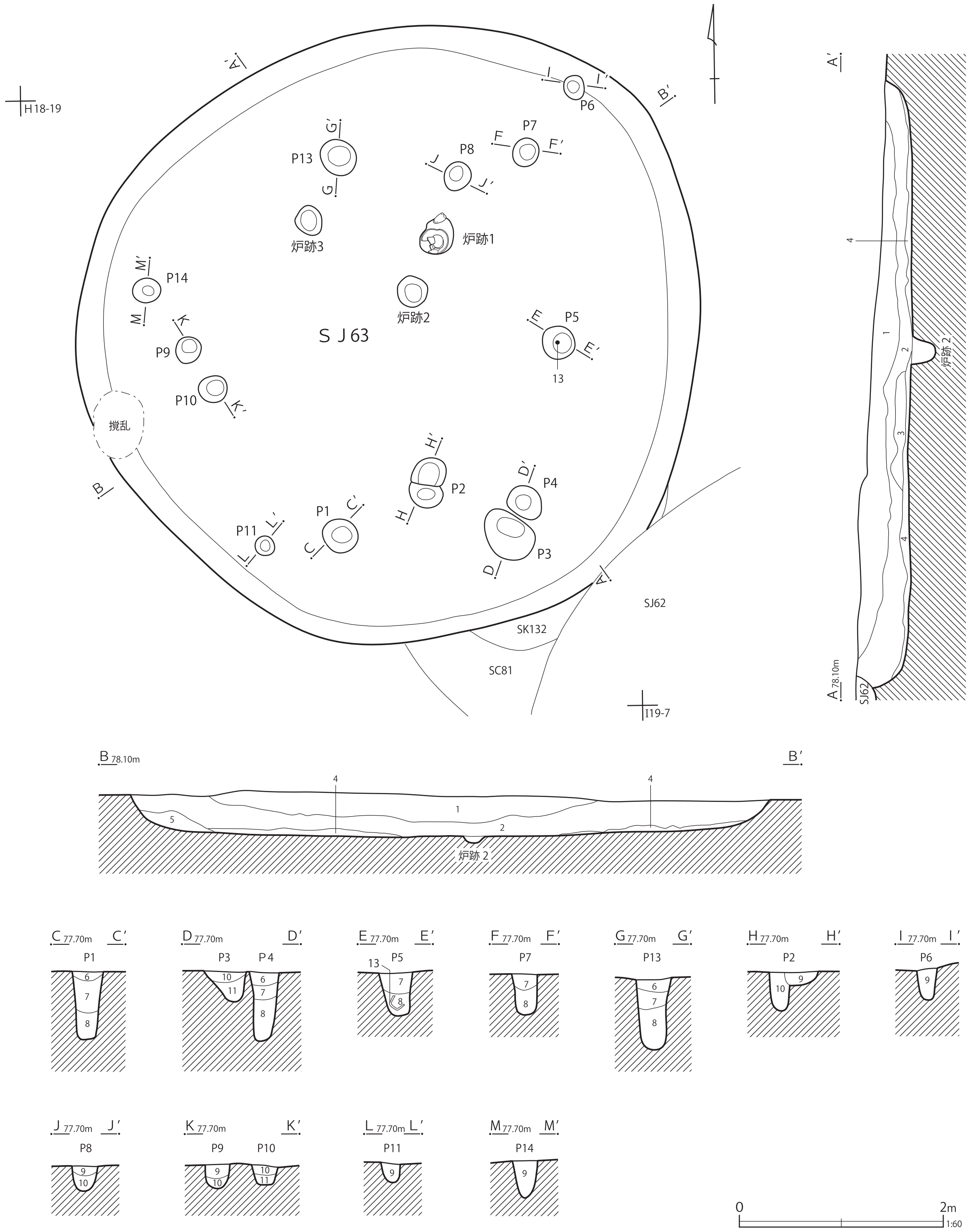
１は炉跡１の埋設土器である。深鉢の胴部のみ現存するものであるが、胴部に押圧を施した隆帯を４本垂下して４分割し、それぞれの区画に単節ＬＲを縦位施文する帯縄文を２～３帯垂下施文する。また、実測図正面の垂下隆帯の右区画には２段の縄文原体の結節回転文を２条施文し、左区画では１条を垂下施文する。

２～５は勝坂式古段階の角押文や三角押文を施文する土器群である。内湾する口縁部が開くキャリパー形深鉢であり、４は円筒形の胴部を有する。

２は口唇部に突起を有する緩い波状口縁を呈し、口縁部を突起から垂下する隆帯と斜行隆帯で区画を施し、それぞれの区画に沿ってキャタピラ文と２列の三角押文を施文している。隆帯上には押圧もしくは刻みを施している。区画内は三角印刻や２列の三角押文で半円状のモチーフを描き、刺突文を充填施文する。また、三角印刻に付随して、三角押文の短い鋸歯状文を施文している。頸部は幅狭な楕円区画文を施しているようである。

３は口唇部上に捻りの入った突起を貼付し、口縁部に半円形の区画と、三角形区画を施し、単列の角押文を沿わせる部分と、２列の角押文を部分的に施文する箇所がある。半円形区画文の底部と頸部区画線の交点に、捻りを加えた円形貼付文を有する。

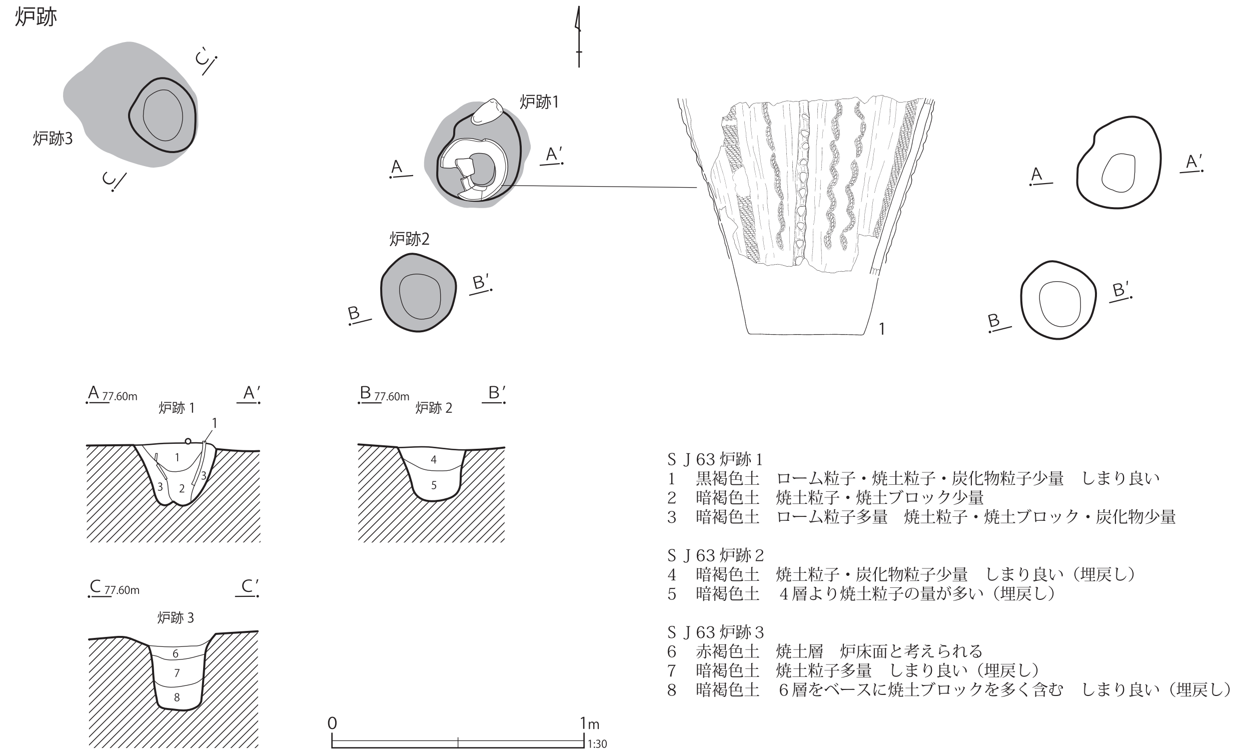
４は平縁と思われるが、内湾する口縁部が開き、円筒形の胴部へと移行する器形を呈する。口縁部には半円形区画と三角形区画を構成し、半円



S J 63
1　暗褐色土　黒色強い層　ローム粒子・炭化物少量　下層より遺物出土
2　暗褐色土　ローム粒子多量　炭化物・焼土粒子微量　遺物出土
3　暗褐色土　ローム粒子・焼土粒子多量　炭化物少量
　　　　　　特に上面部に焼土多量
4　暗褐色土　ローム粒子多量　炭化物・ローム小ブロック少量
5　褐色土　　ソフトローム多量

S J 63 ピット
6　暗褐色土　　ローム粒子・炭化物少量
7　暗褐色土　　ローム粒子多量　ローム小ブロック少量　炭化物微量
8　暗褐色土　　ローム粒子多量　粘性強い
9　暗褐色土　　ローム粒子多量　炭化物・ローム小ブロック少量
10　暗褐色土　　ローム粒子・ローム小ブロック多量　炭化物少量
11　鈍黄褐色土　ローム粒子・ソフトローム多量

第494図　第63号住居跡（１）



第495図　第63号住居跡（２）

第196表　第63号住居跡柱穴計測表（第494図）

ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)
Ｐ１	35.0	75.0	Ｐ２	48.0	37.0	Ｐ３	55.0	30.0	Ｐ４	35.0	65.0	Ｐ５	33.0	43.0
Ｐ６	25.0	33.0	Ｐ７	30.0	40.0	Ｐ８	29.0	25.0	Ｐ９	26.0	25.0	Ｐ10	29.0	20.0
Ｐ11	20.0	18.0	Ｐ12	欠番		Ｐ13	37.0	68.0	Ｐ14	27.0	46.0			

第197表　第63号住居跡出土復元土器観察表（第497 ～ 499図）

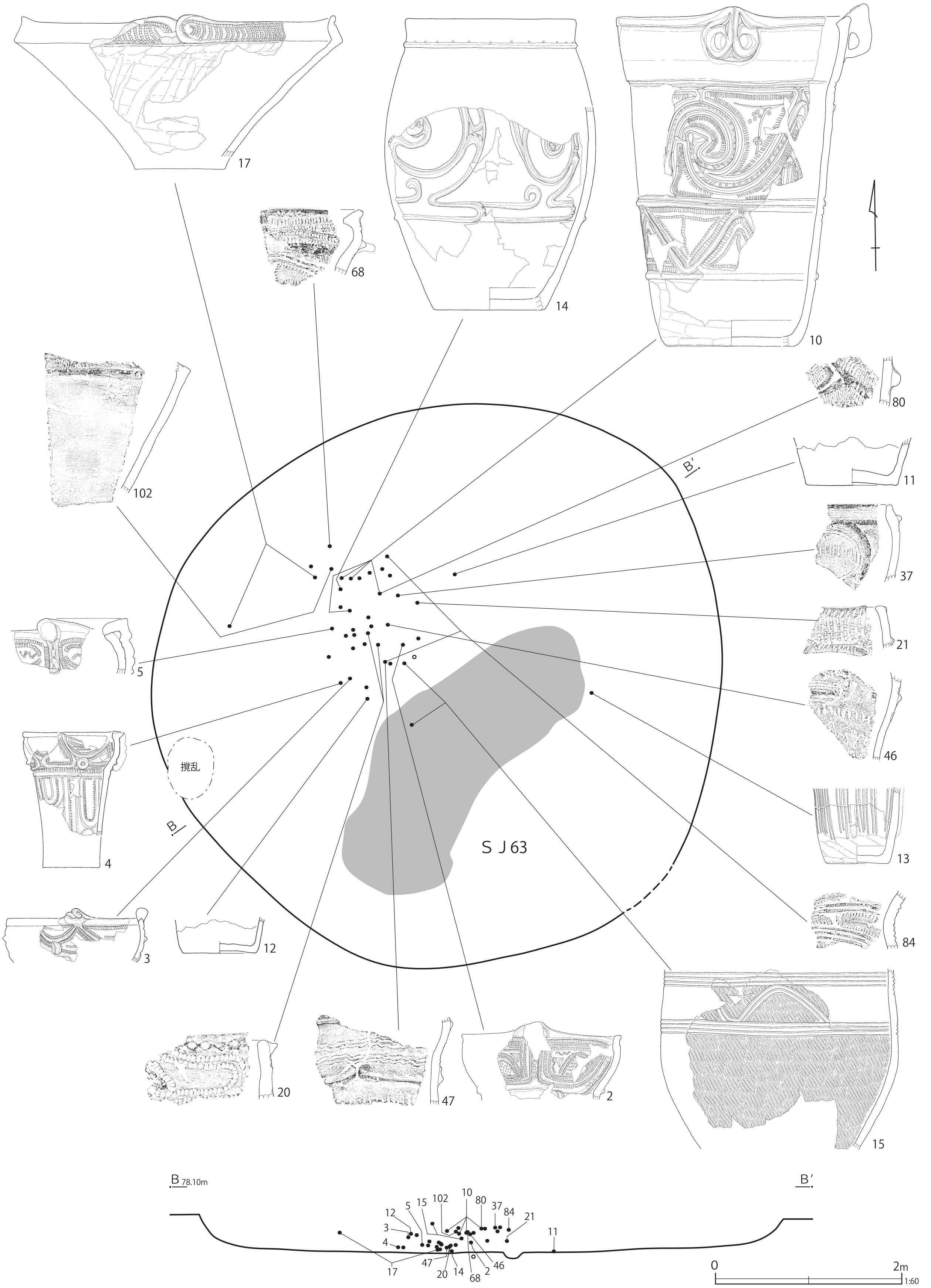
番号	器高(cm)	口径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	備　考
497-1	[18.8]	-	(26.4)	-	50%
2	[11.0]	(22.8)	-	-	30%
3	[7.5]	(19.2)	-	-	10%
4	[14.6]	(13.8)	-	-	40%
5	[7.9]	-	-	-	10%
6	[10.2]	(15.4)	-	-	20%
7	[7.6]	(15.8)	-	-	20%
8	[9.0]	-	-	-	10%
9	[7.1]	(15.7)	-	-	30%

番号	器高(cm)	口径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	備　考
498-10	48.7	(32.8)	-	18.2	50%
11	[6.8]	(16.8)	-	-	10%
12	[4.7]	(12.7)	-	-	10%
13	[10.8]	(12.2)	-	8.8	40%
499-14	[29.1]	-	30.2	(15.6)	50%
15	[25.6]	-	(33.9)	-	30%
16	[9.8]	(35.4)	-	-	20%
17	[19.9]	(44.8)	-	-	40%

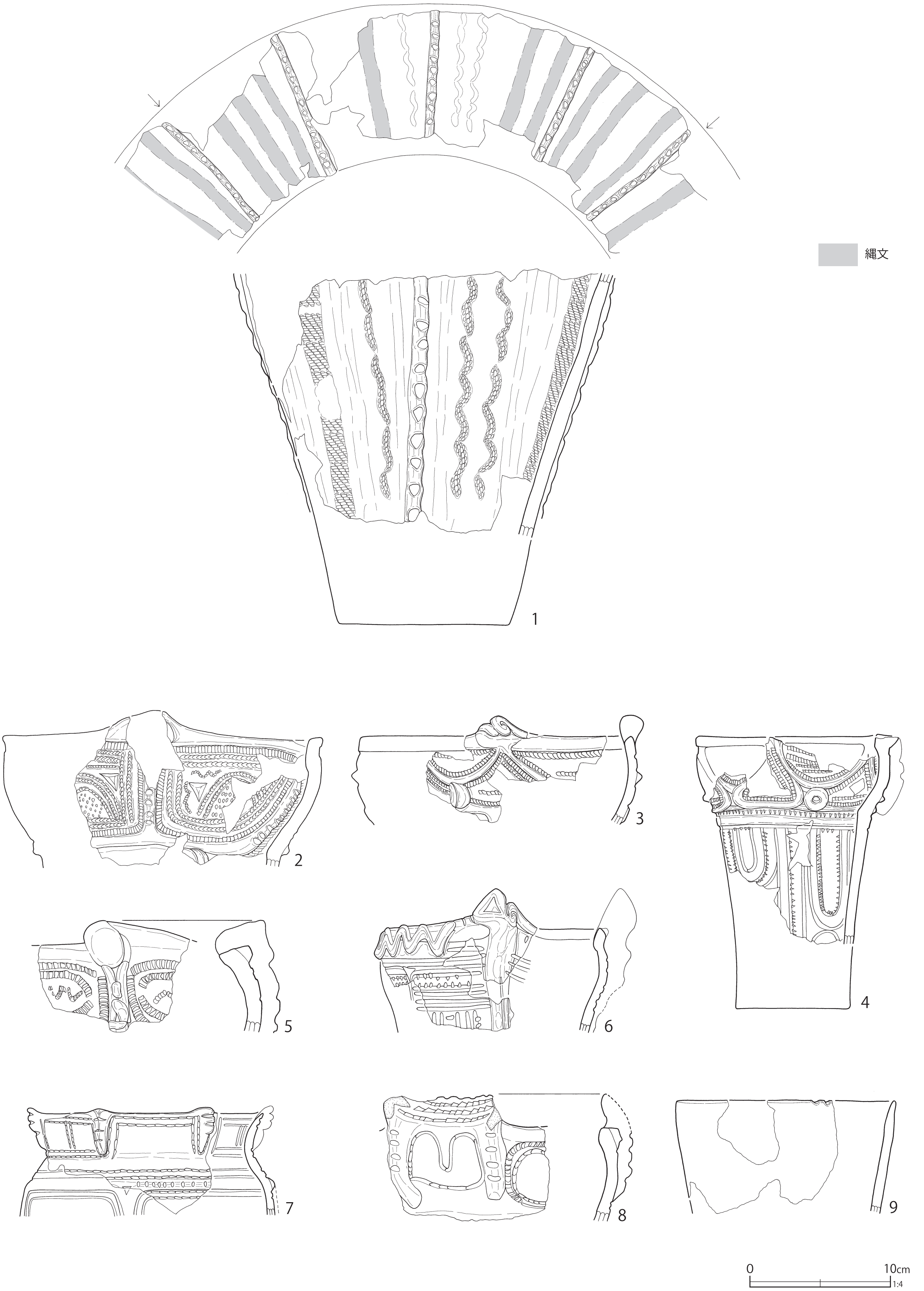
形区画の下部と頸部区画隆帯の交点に円形貼付文を施文する。区画を施す隆帯脇には、２列もしくは単列の角押文を施文するもので、隆帯は隆起線状を呈する。胴部には垂下沈線で縦位区画を施し、対向「U」字状区画文を構成して、区画の縁辺に細かな刻みを施文する。胴部の区画はパネル状区画文を彷彿させる。

５は口縁部の楕円状区画に沿って２列の角押文を沿わせ、中央部に角押文の横位鋸歯状文を施文している。

６は口縁部が緩く内湾する器形で、口唇部上の把手から押圧隆帯を垂下して縦位分割し、口縁部に隆帯の鋸歯状文を施文する。把手は捻りの入った渦巻文と、三角形文で構成している。頸部は並



第496図　第63号住居跡遺物出土状況



第497図　第63号住居跡出土遺物（1）